

# VII

キリスト  
基督教独立学園に関する文章



## 7-1 キリスト 基督教独立学校創設に際して

たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。

また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。

(マタイ伝 16 章 26 節)

このキリストの御言葉は生命の尊貴を最もよく教えたものであります。言いかえれば人の生命というものは全世界ともかけ替えのないもの即ち無限の価値あるものであるというのであります。人は誰でもこの尊い無限の価値ある生命を持っている点においては万人は平等であります。他の種々な不平等もこの無限の価値の前には無に等しいものであります。「神には、かたより見ることがないからである」と聖書にあります。誠にその通りであります。

基督教以外でも人の生命の尊貴は認めて居ります。何処の国でも何か災害があった場合第一に人の生命が害われたかどうか問題になりまして、何億円の損害もこれに較べれば後まわしにされます。また必ず死ぬと定まった病人でも全力を尽くして療養に努めます。しかし生命の尊さを真に教えたのは基督教であります。すべて人の生命は尊いものである。悪人の生命も、知的障害者<sup>(1)</sup>の生命も、障害や病気のために通常の社会生活を営めなくなった人<sup>(2)</sup>の生命も全世界ともかけ替えない程尊いものであると解ってこれ等の多難な<sup>(3)</sup>生命のための児童自立支援施設<sup>(4)</sup>とか、知的障害者のための施設<sup>(5)</sup>とか、精神障害者のための病院<sup>(6)</sup>とかの慈善事業が起こります。これ等の社会事業の源は基督教にあるとあって差しつかえありません。

しかし果たして人の生命というものは斯く聖書が教えている如く尊いものでありましようか。身分の高い方とか非常な才能を持った人等の生命は尊いであろうが、凡人の、あるいは悪人や知的障害者<sup>(7)</sup>の生命は尊くないではないか、悪人や知的障害者<sup>(8)</sup>の生命は亡してしまった方がいいではないかという思想がないではありません。悪人や精神障害者<sup>(9)</sup>を身内の者が殺したという悲劇は度々聞かされます。自殺者の多いのもこの生命の尊貴ということが解らないからであります。けれども聖書は人の生命は全世界ともかけ替えのない程尊いものであると教えます。それならなんのためにかく尊いのでありましようか。聖書は何故かく生命の尊貴を教えているのでありましようか。

それは第一に人の生命は靈魂を宿しているからであります。あるいはまた人の生命は靈魂であると言ってもいいでありましよう。聖書の教えるところによりますと人は誰でもキリスト・イエスの十字架により罪を潔められて神の子となる事が出来る、不滅の靈魂、永遠の生命を与えられるというのであります。「そこにはなんの差別もな

い」(ロマ書 3 章 22 節)でありまして、どんな無学な人でも、身分の低い人でもまた悪人でも悔い改めれば、信ずれば与えられるのであります。この資格があるからこそ人の生命は何物とも替え難い価値があるのであります。この故にどのような人<sup>(10)</sup>でも人を殺すことはいけないのであります。犬は如何に高価な犬でありましても神の子となることは出来ませんが、人はどんな悪人でも何時回心して救われるかわかりません。その人の心次第で救われる可能性を持っているのであります。如何なる人でもこの無限の宝を持っているのであります。

第二に人は皆神に創造せられたものであります。神は何事かの御目的をもって各個人を生まれしめ給うたのでありまして、どんな人でも無用な人としてはありません。権力のある人、才能のある人のみが有用で貴いのでありません。すべての人が皆それぞれ有用なのであります。愚かな人一人欠けても神の御創造は完全でなくなるのであります。どんなつまらない人でもその人が天職を果たさないではその代わりにその人の職責を充たす人は他にありません。多少似た人はあっても全く同じ人としてはありません。この特殊性が、個性がまた靈魂を尊いものとするのであります。

人は何人でもこの如く尊い生命を持っているのであります。基督教的独立とはこの靈魂の尊貴から来ているのであります。この尊い靈魂を持っているのですから各人が自重しまた他の個人を尊重しなければなりません、この靈魂の尊貴の自覚から真の独立が出て来るのであります。また真の独立によらなければこの尊い生命を成長発達せしめることは出来ないのであります。信仰の純粹を保持するにはこの基督教的独立ということが絶対に必要であります。人に頼らずして見えざる神に頼るのであります。神に頼らなければ真の独立を保つことは出来ないのであります。頼るべきものに頼って、初めて独立は可能になるのであります。あるいはまた神に頼る為に独立が必要なのであるとって差しつかえありません。また独立は孤独ではありません、他の独立の人と協同することを否定するのではありません、むしろ真の協同は独立人の間で初めて出来るのであります。

靈魂の尊貴を自覚せしめ、基督教的独立人を養成するのが基督教独立学校の第一の目的であります。これが正しい信仰を保つ最もよい基礎であるからであります。また人が生き甲斐のある生涯を送る第一歩となるからであります。特に捨てて顧みられなかった、自らも諦めている農村の人々にこの自覚を与え、どんな山間僻村<sup>(11)</sup>にいる人でも崇高なる生涯を送り得ることを知らせたいのであります。これが小国の中でも僻陬<sup>(12)</sup>の叶水にて基督教独立学校を創めます第一の理由であります。

(「聖書の農村」第 1 号、1934 年 10 月)

## 7-2 キリスト 基督教独立学園の歩み

### — 教育を守って30年 —

キリスト 基督教独立学園高等学校は、1948年4月新制高校発足の時に認可され、5月初めから一年生10名で、普通科の高校として授業を開始した。高校の認可は県であるのであるが、学校法人の認可は文部省であるので、所定の条件を整えて認可を申請したが、文部省では余り少数定員であるからと言って認可しなかった。教育は少数ほどよいではないかと言っても、常識的に限度があると言って認可しない。利権でも欲しくて法人認可を申請するのではない、文部省でできない教育をやってやろうとしているのである。何も文部省に頭を下げる必要はない。大学へ行きたい人は検定試験を受ければよいから、資格等はいらないと言って廃校届を出したところが、当時の山形県知事の村山道雄氏<sup>(13)</sup>が文部省と交渉してくれて、一年遅れて法人として認可された。

2期生は5名、5期生は3名であったが、次第に増えて来て、10名が15名になり、20名になって来た。特に公立高校が受験準備教育のため本来の教育を放棄したので、ほんとうの教育を求める者が全国から来るようになったが、一学年25名以上にはしないことにした。ただ1973年、高校生急増の時に、その対策に少しでも協力するためにと30名にしたが、十分な教育ができないので、2回だけで、25名定員を守ることにした。しかし減らすことはなかなか困難で、現在でも1、2名位定員をはみ出している。早く一学年25名、全員75名にしたいと願っている。

入学選考は書類の段階で50名位にしぼって、前年の10、11月にわたって5、6名ずつ父兄と共に一泊してもらって、丁寧な試験をしている<sup>(14)</sup>。昨年はテレビで紹介されたために志願者が多くなって、80名近くの選考をしなければならなくなり大変困った。

今、日本中の私立学校が困っている。それは公立で教職員の給料を毎年ベースアップ<sup>(15)</sup>で上げているので、それにつれて上げて行かねばならないが、授業料をそれに見合うように上げることができないからである。しかし独立学園は困らないでいる。授業料をまだ上げる余裕があり、職員の給料をふやすことができるが、これで足りているので、余計にもらっても仕様がないからと言って上げないでいる。認可を渋った文部省の役人を始め、世間一般の考えと反対のことをしているから困らないのである。

第一に、世間では学校を立てるなら大都会の近くでなければならぬと考えているのに、山の中の不便な所に建てた。そのお陰で、職員は無駄な生活費は要らないで、美味しい空気を吸い、新鮮な食物を食べて、目を楽しませてくれる環境の中に住んでいられて、薄給<sup>(16)</sup>でありながら都会の人々よりずっと贅沢な生活をしている。物質的面でこのような贅沢な生活ができることに加えて、精神的面においても都会の生活

に較べて遙かに高い生活をしている。都会の人々は外見は立派な風をしているが、誰が儲けた、誰が損したというようなくだらないことに心身を摺り減らしているのに、こちらでは世界一流の文学、音楽、美術を論じ、最高の文化を楽しんでいる。

第二に定員を多くすることが学校経営の秘訣と考えられているのに、少数定員主義をとっている。定員を多くすると教職員を多くしなければならないから、止むを得ず金儲け主義の悪い教師をも採用しなければならない。世に人材確保法ほど愚かなものはない。給料を多くする程よい教師が確保できると思うのであろうが、高給を目標とするような金儲け主義の教師に教育ができるはずがない。

第三に、世間では受験準備教育をして、進学率を高めて、所謂名門校になるように努力している。受験準備教育は教育を破壊するものであるから、独立学園では絶対にやらない。試験でよい点を取るために勉強するのではなく、学問の貴さ、面白さがわかって勉強するように指導している。そのためにはほんとうの教育を求める志願者が、断わるのに苦しむほど多く集まって来る。このように、世間の考えと反対のことをしているから、独立学園が困らないのである。それ故、人間的なものに頼るよりは神に頼る方が確かである。まことに「鼻から息の出入りする人に、たよることをやめよ」（イザヤ 2 章 22 節）である。万物の創造者なる全能の神に頼るに優ってよいことはない。

今日、教育の荒廃が叫ばれているが、それは受験準備教育のためである。学問ができる者は、考えて問題を解くから時間がかかり、全部の問題の答えを書くことができないから合格しない。学問ができないにもかかわらず、この問題にはこう答えを書く、と考えないで答えを丸暗記している者が全部の答えを書いて合格する、ということになる。学問とは、考えて真理を探究するものであるのに、考えないように訓練する。したがって学問ができなくなるように訓練する。今日では、数学さえも暗記物と言われるようになって来た。数年前、連合赤軍事件<sup>(17)</sup>が起こった時に、何という考えなしのことはしたものだと思っただが、考えなしのことはするようにと教育して来たのである。その他、若い母親が享樂<sup>(18)</sup>の邪魔になるといって、自分の子供を殺すというような人間性に反する犯罪がふえて来ている。社会をよくして行くはずの教育が荒廃してしまったので、こんなになったのである。これは恐ろしいことである。考える力を奪う受験勉強がこうさせるのである。社会の趨勢<sup>(19)</sup>で仕方がないとすましてはならない。学問と教育が社会をよくして行くべきものであるのに、学問と教育が悪くなったから社会をよくしていくことができなくなったのである。

知育が社会の要請だから、知育のみをして徳育をしないからこうなったという人があるが、これも間違いで、知育もしていないのである。知育とは学問を教えることである。理解させないでただ答えを丸暗記させる教育は知育ではない。知育をしっかりとやって、考える力を養っておればこんなことにはならない。よく考えれば、悪いこ

とをすればそれが何らかの形で自分にはね返って来ることがわかるから、悪いことはできなくなる。良心の英語はコンシェンス (conscience) であるが、よく考えるという意味である。学問を教えて、真理を求め、真実を愛し、嘘やごまかしの嫌いな人間にするのが教育である。道徳教育といって、単に徳目を並べて暗記させても何の役にも立たない。戦前の修身<sup>(20)</sup>という学科が日本の道徳を高めるために役立たなかったことを見てもわかる。学問を教えて、ほんとうの教育をすることが道徳教育になるのである。戦前、小学校で優等賞というのを与えた。それには大抵、学力優等品行方正なことを賞すると記されていた。学力優等の者は人間も立派である。戦前の小学校時代の友人を思い出すなら誰でも気付くことである。今日、所謂成績優秀な者が人間としても駄目であるのは学問ができなくて、受験技術が優れているだけだからである。

世の中がこんなに困るようになったのは、教育が悪くなったからであるが、何故悪くなったかと言えば、金銭万能主義がはびこり、教育が金儲けのためになされるようになったからである。教育を受ける者もよい就職口を得るため、教育を授ける者も出世したいためと、いずれも金儲けのためである。大学へはいれなければ出世できなくなるから、受験準備教育は必要悪<sup>(21)</sup>だ生徒のためだと言って、教師は本来の教育を放棄して、受験技術を訓練する。生徒のためどころでなく、生徒の希望など無視して、お前はこれ位できるからこの大学へ、お前はこの大学へと勝手に割り当て、進学率をよくして、自己とその学校の名声を上げようとする。これでは教育が悪くなるはずである。

信仰をもたない偉い学者、偉い教育者のあったことは確かである。しかし世の中がこう金銭万能主義になってしまった時に、学問、教育を金儲け主義から守ることは信仰がなければできないことである。ほんとうの教育は信仰がなければできないものである。「人が全世界を儲けても、自分の命を損したら、何の得になろうか」との御言葉の如く、人は誰でも全世界よりも大きい無限大の価値を持っている。これを引き出すのが教育である。教育のヨーロッパ語はいずれも引き出すという意味である。この無限の価値を持っているものは命とか、霊とか、人格とか言うべきものである。人格を引き出すものは人格である。故に教育は人格の接触である。心の触れ合いである。ほんとうの教育は人間のこの無限の価値を知ったものでなければできない。

日本でも教育学としてペスタロッチの研究がなされているが、ペスタロッチの信仰を抜きにしてはいくら研究しても何にもならない。ペスタロッチの教育はその信仰から出たものである。信仰がなければ教育はできない。今日の教育の荒廃は日本の学者、教育者が信仰を馬鹿にし、捨てたからである。真の神を信じなければ金銭という偶像を信ずるようになる(マタイ6章24節)。そして必ず金儲け主義になる。身を立て、名をあげという卒業式の歌は金儲け主義を唄っているのである。教育を金銭のために売り、受験準備教育に専念するようになるはずである。

公立学校では教育の改善は望めない。教育機関が立身出世主義の官僚機構の中に丸め込まれてしまえば、教育が崩壊するのは当然である。国立大学が学問のできる人を締め出して、できない人を入れる愚かなことを止めることができない。入試が悪いことはわかっている、改善することができない。度々改善策を講ずるが、かえって年々悪くなって行く。特に、今やろうとしているコンピューターを用いる共通一次試験は、最も愚かな、試験地獄を激しくする企てである。こんなことを考える文部省や国立大学の愚かさは測り知れない。進学適性検査<sup>(22)</sup>や能研テスト<sup>(23)</sup>で失敗しているのに、同じ愚を繰り返そうとしている。文部省でこの愚を繰り返そうとする理由は、アメリカで共通試験でうまくいっているから、日本でもやれないことはないというのであるらしい。しかし、アメリカでうまくいっているのは共通試験の故ではなく、競争率が小さい故である。アメリカの医学部の競争率が3倍弱になったら、医学生が悪くなって、カンニングをするようになったので、1974年5月20日の『タイム』に、カンニング防止のためにカリフォルニア大学で一列おきに並ばせて試験している写真が載っていた。その記事には、学生が一番でも上になりたいので、お互いの勉強の邪魔、研究、実験の妨害をすることが記されており、最後に喉切りの医学生<sup>(24)</sup>は「喉切りの医者」になるだろうと言っている。医学生の喉切りは点取り虫という意味であろうが、医者の喉切りは人殺しの意味である。アメリカでは競争率が3倍弱になったら人殺しの医者が出はしないかと心配しているが、日本では医学部は20倍、30倍の競争率であるから、超人殺しの医者が多く出るであろう。医は仁術<sup>(25)</sup>でなく、算術<sup>(26)</sup>という医者ばかりになるであろう。

教育改善というが――崩壊してしまっているから再建というべきか――公立学校ではできない。私立学校に待たなければならない。しかし、私立学校は公立学校の悪い教育の真似をして、所謂名門校になろうとしている。この世的誘惑に打ち勝って、ほんとうの教育を守りとおすことは信仰がなければできない。キリスト教主義学校の使命は大きい。ところがキリスト教主義学校でさえ受験準備教育をして名門校になろうとする学校がある。これは「生ける水の源である私（神）を捨てて、自分で水ためを掘る」（エレミヤ2章13節）ことで、悪しきこと、愚かなことである。キリスト教主義学校の問題というのは、生ける水の源である神に頼るか、じきに水が乾いてしまう水ために過ぎない人間的なものに頼るかである。名門校になりたがるか、ほんとうの教育をするかの問題である。答えは明らかである。信仰をもってほんとうの教育をするより他に道はない。有名大学、有名校にはいりたがるのは金儲けのためである。学問、教育を金儲けに使ってはならない。学問の貴さはその応用にあるのではない。真理を愛し、真実を愛し、嘘とごまかしの嫌いな人間にするから貴いのである。応用にとらわれて公害問題が出て来たことを考えれば、学問などない方がよいということになる。

力以上に出世することはかえって不幸である。裸の王様の童話では、ふさわしくない地位につくことは、馬鹿と同じ位に不幸なことである。佐藤栄作さんは運がよかったから 8 年も総理大臣をしていて、大勲位だいくんいという最高の勲章くんしょうをもらったと言ったとのことであるが、実は運が悪かったから 8 年もふさわしくない地位についていたのである。自分の運の悪いのに気がつかないことが最大の不幸である。有名大学にはいつて出世してもつまらないことを、生徒に教えるのが教育である。夢中になって受験勉強をやらせることさえしなければ、こういうことは学問をすれば自然にわかるものである。何としてでも受験準備教育やを止めさせなければいけない。入試改善の目標はここになければならない。国立大学ではこれができないから、国立大学はますます悪くなって行く。私立大学でもできない。キリスト教主義大学がやらなければ他にやる所がない。キリスト教主義大学がキリスト教主義高校と協力して、高校では受験準備教育をしないで、高校本来の教育を行う。大学では学問のできる者を締め出して、できない者を入れるという愚かなことをやめる。人数を各高等学校に割り当て、その人数の選考を各高校にまかせる。そして入学後の成績で割り当て数を増減する。こうすればほんとうの教育を行なうこととなり、情実じょうじつに捉われぬ推薦すいせんをしないと、大学へ行ってからの成績が悪くなって、割り当て数を次第に減らされるから、教育が改善されて来る。こうしてキリスト教主義大学、高校でほんとうの教育が行なわれ、社会から信頼されるようになる。学力を与えないで、学歴だけを与える国立大学は次第に衰微しだいすい<sup>(27)</sup>して行くであろう。

もう一つのキリスト教主義学校の問題は、職員の信仰の問題である。全員信仰を持たなければならない。学問をほんとうにすれば必ずキリスト教の信仰に達するというのが私の確信である。信仰を持たないというのは、結局己が腹を神とするからである（ピリピ 3 章 19 節）。信仰は強制してはならない。しかし、学問を愛し真理を愛することは教育者には要求しなければならない。今日の学者は信仰を否定することによって、一廉ひとかど<sup>(28)</sup>の学者になったつもりになっている。こういう学者の学問の誤りが目に付いてしょうがない。第一にすべての信仰を理論的でないからといって迷信として否定しているが、その否定が理論的でないので、迷信として否定することが実は迷信である。唯物論ゆいぶつを科学的に証明できてないのにできていると誤って信じている。人間の理論には誤りがは入りやすいから、常に反省して誤りに陥あやまらないよう努力しなければならない。ソクラテスの言う如く、人間は己れの愚おのを悟らなければ学問はできない。今日の学問は、ソクラテス以前の詭弁きべん学派の学問に墮落だらくしてしまっている。学問を金儲けのためと考えるから墮落したのである。真理を愛する者、学問を愛する者は、必ずこの科学的迷信より脱出して、最高の真理なるキリスト教の信仰に、罪の赦ゆるしの十字架の福音ふくいんに達するであろう。ソクラテスの如き謙遜けんそんがなければ学問はできない。これはすべての人間に要求すべきことである。こうして、すべての職員が信仰を

持って、ほんとうのよい教育ができる。  
（「福音と世界」<sup>ふくいん</sup><sup>(29)</sup>、1977年10月号）

## 7-3 「独立時報」から

|                                       |     |                                |     |
|---------------------------------------|-----|--------------------------------|-----|
| 7-3-1 真の独立                            | 241 | 7-3-26 卒業生を送る辞                 | 277 |
| 7-3-2 クリスマスの声                         | 243 | 7-3-27 11周年記念式                 | 278 |
| 7-3-3 基督教独立学園の使命                      | 245 | 7-3-28 夢想ではない                  | 280 |
| 7-3-4 星を仰ぐ <sup>あお</sup>              | 247 | 7-3-29 献堂式                     | 282 |
| 7-3-5 隅の首石 <sup>おやいし</sup>            | 248 | 7-3-30 卒業生を送る辞                 | 284 |
| 7-3-6 環境と教育と文明                        | 249 | 7-3-31 火災について                  | 286 |
| 7-3-7 新年の希望                           | 250 | 7-3-32 復興感謝式の辞 <sup>ふっこう</sup> | 287 |
| 7-3-8 卒業生を送る言                         | 251 | 7-3-33 真の卒業証書                  | 289 |
| 7-3-9 罪の本質                            | 253 | 7-3-34 創立記念式に当たりて              | 291 |
| 7-3-10 最も貴いこと                         | 255 | 7-3-35 1月1日                    | 293 |
| 7-3-11 新年を迎えて                         | 256 | 7-3-36 卒業式の辞                   | 294 |
| 7-3-12 実践してわかる真理                      | 257 | 7-3-37 学問の価値                   | 295 |
| 7-3-13 卒業生を送る辞                        | 258 | 7-3-38 第15回卒業式の辞               | 297 |
| 7-3-14 新入学生を迎えて                       | 260 | 7-3-39 学年のはじめに                 | 298 |
| 7-3-15 基督教主義私立学校の使命                   | 261 | 7-3-40 第17回創立記念式               | 299 |
| 7-3-16 卒業生を送る辞                        | 263 | 7-3-41 第18回創立記念式               | 300 |
| 7-3-17 創立記念式(第8回)                     | 265 | 7-3-42 クリスマスの必然                | 302 |
| 7-3-18 起工式                            | 266 | 7-3-43 暴力否定の宣言                 | 304 |
| 7-3-19 矢内原先生講演会の時の挨拶 <sup>やないはら</sup> | 267 | 7-3-44 第21回入学式の辞               | 306 |
| 7-3-20 罪のおそろしさ                        | 268 | 7-3-45 クリスマス                   | 308 |
| 7-3-21 献堂について～献堂の祈り                   | 270 | 7-3-46 クリスマス式辞                 | 310 |
| 7-3-22 卒業生を送る                         | 272 | 7-3-47 農民と教養                   | 315 |
| 7-3-23 回顧十年 <sup>かいこ</sup>            | 273 | 7-3-48 卒業式式辞                   | 317 |
| 7-3-24 開拓者精神                          | 275 | 7-3-49 31期生入学式式辞               | 321 |
| 7-3-25 クリスマスの意義                       | 276 |                                |     |

## 7-3-1 真の独立

ある人が内村先生の「初夢」に王国という語があるといつて、不満の意を漏らして居りました。それは王国という言葉はすべて圧政を意味するように考えてしまっているからです。言葉の外見のみを考えていて内容を検討して論理を進めるということを致しません。これでは自説を主張することは出来ても、真理に到達する事は出来ません。注意しなければなりません。天国のもとの言葉は、天の王国でありまして、天の共和国でも天のソビエト連邦でもありません。王以上の絶対者なる神の支配し給う王国であります。自由平等を好む現代人には不満のようではありますが、実はこの事に大いなる恩恵が含まれているのであります。宇宙万物の支配者が正義と愛の神であり、私共の為に最もよいようにして下さるのであります。恩恵よりも自由を欲するといいますが、これは神の恩恵の何たるかを知らない者の言であります。また自由といつても神を離れて真の自由はありません。神を離れての自由は放縦<sup>(30)</sup>であります。罪の奴隷であります。神の律法のルールに乗って初めて人は自由になれるのであります。神は人に罪をさえ犯し得る自由を与え給いました。この自由意志をもって神に仕えしめんが為であります。この為に神の創造が失敗に見えることさえ避け給いませんでした。実に驚くべき自由であります。真の自由は神の御許にのみあります。平等も同様に神を離れてはありません。共産主義国においても民主国においても、その平等は限られたものであることは明らかな事実であります。神は偏り見給わずと聖書にあります。神の御前には万人が平等であります。神の御前には、法王も牧師も教師もありません。皆平等であります。真の平等は神の御許にのみあります。我らの学園の名前である独立も神に頼る独立であります。神に頼って初めて人に対して独立であり得ます。何物にも頼らずとは神にのみ依り頼むことでもあります。基督教独立学園としたのは、この独立が低い意味での独立ではなくして、神に頼る真の独立であることを現わす為であります。また真の独立は孤立ではありません。神を通して人が互いに助け合うことは独立に反することではありません。今日まで神にのみ依り頼んで来る事が出来ました。今日まで支えて下さった神はこれからも支えて下さいます。これからも神にのみ依り頼む真の独立を全う致しましょう。内村先生の「英和独語集」<sup>(31)</sup>の最初の言葉を思い出し暗記し我らの指針と致しましょう。

More than gold,  
 More than honour,  
 More than knowledge,  
 More than life,

O thou independence!

O ye kings,  
O ye princes,  
O ye bishops,  
O ye doctors,  
Ye are tyrants!

Alone with Truth,  
Alone with Conscience,  
Alone with God,  
Alone with Christ,  
I am free!

(「独立時報」第1号、1952年)

## 7-3-2 クリスマスの声

今は苦しみを受くれども後には闇なかるべし。昔はゼブルンの地ナフタリの地をあなどらしめ給いしかど、後には海に沿いたる地ヨルダンの向こうの地、ことくに人のガリラヤに榮をうけしめ給えり。暗きを歩める民は大なる光を見、死蔭の地に住める者の上に光てらせり。汝民をまし、その喜びを大にしたまいければ、かれらは刈入れ時に喜ぶが如く、獲物をわかつ時に楽しむが如く汝の御前に喜べり。そは汝彼らが負える軛と、その肩の笞と虐ぐるもの杖とを折り、これを折りてミデアンの日の如くなし給いたればなり。すべて乱れ戦う兵士のよろいと血にまみれたる衣とは、みな火の燃え草となりて焚かるべし。ひとりの嬰兒われらのために生れたり。我らはひとりの子とえられたり。政事はその肩にあり。その名は靈妙なる義士、また大能の神、とこしえの父、平和の君ととなえられん。その政事と平和とはまし加わりて限りなし。且つダビデの位にすわりてその国を治め、今より後とこしえに公平と正義とをもてこれを立て、これを保ち給わん。万軍のエホバの熱心これをなし給うべし。(32)

(イザヤ書 9章 1節～ 7節)

これは最もはっきりとクリスマス<sup>よげん</sup>を預言している所であります。キリスト教は悩める者、苦しめる者、貧しき者の宗教であります。これらの者に救いの希望と喜びと光明<sup>こうみょう</sup>とを与えるものであります。主イエスの御降誕<sup>ごこうたん</sup>(33)により、このことが実現したのであります。その故にクリスマスが喜ばしく楽しいのであります。今苦しんでいる者が後には榮え<sup>さか</sup>をうくるのであります。

私共の学園も貧しくて苦しみや悩みも多くあります。しかしこれも真の喜びと光明<sup>こうみょう</sup>とを与えられる為の神の大いなる恩恵でありまして、後には必ず喜びと光明<sup>こうみょう</sup>とが待っております。7月頃の様子ではクリスマスを迎える頃には経済的にも安定し多くの苦勞が取り去られるかと思われましたが、木工の方も石材採取の方も種々の障害の為に未だ経済的に安定するに至っておりません。しかし、苦しいながらも必要なものは与えられて、喜びと感謝の中にクリスマスを迎えることが出来ました。そしてこのクリスマスは更に大いなる御恩寵<sup>おおごおんちよう</sup>を期待させてくれるのであります。「今は苦しみを受くれども後には闇なかるべし」であります。多分今経済的に安定すると私共が安きに流れてしまって、進んで如何なる困難をおかしても神様の御用に立とうという気力がなくなるかもしれません。経済的安定に汚されないようになるまで、神様は安定することを抑えておられるのかも知れません。いずれに致しましても神様がお護り下さい

ます。神様によりすがっているならば、人の掘った水溜まりでなく、活ける水の源みなもとに連つらなっているならば（エレミヤ書 2 章 13 節）如何いかになりゆくとも安心であります。多額の基本財産を与えられるよりはるかに頼りになります。クリスマスを迎えましてこれまでお護まもり下さいましたことに対して感謝の念を深くすると共に、これからもお護まもり下さることを信じ、一層強いっそうく神様に依りよすがるように致いたしましょう。

（「独立時報」第 2 号、1953 年）

### 7-3-3 キリスト 基督教独立学園の使命

我は道なり、真理なり、生命なり、我によらでは誰にても父の御許に至るものなし。<sup>(34)</sup>

(ヨハネ伝、14章6節)

基督教は真理でありますが故に真理を求むる人は最後には必ず基督教の信仰に到達致します。到達しませんのは、その人が真理を求むる熱意が少ないからであります。勿論、基督教の信仰のない人にも立派な人が沢山あります。信仰を表明している人より多いかも知れません。しかし、それらの人々もなぜ信仰に至らないかをつきつめてみれば、真理を求むる心の不足に帰せざるを得ません。どんなに立派であってもどこかしら欠けたところがあります。知恵を愛する(フィロ・ソフィア)という言葉で、その真理に対する熱情を示したソクラテスは、人は自己の力では絶対の真理をつかみ得ない事を明らかにし、信仰を暗示しております。原子力利用をもってその偉大なる成果を示している近代科学もその真理の相対性や、不確定性をもって信仰による真の真理を指し示しております。(これらの事は政池・鈴木共著の「科学と基督教」、本書2-3「科学の本質と信仰」参照)。

宗教的要素の乏しい仏教の最高峰は何と言っても法然親鸞の浄土的信仰であります。哲学的には優れておりますが、信仰的要素の少ない仏教の經典の中から、よくもあんな立派な信仰をつかみ得たかと感嘆にたえません。弥陀の慈悲は神の愛に近いものであります。神の正義が欠けております。それでなお一步前進すれば、神の愛と正義の調和である罪の赦しの十字架の福音に達するであります。明治時代に法然上人の子孫の立石岐氏<sup>(35)</sup>が基督教信徒になり、本願寺<sup>(36)</sup>中興の祖<sup>(37)</sup>ともいわれる、蓮如上人<sup>(38)</sup>の子孫の亀谷凌雲牧師<sup>(39)</sup>が現に富山で伝道しておられるのはこの事を証明しています。これらの方々は伝統に捉われないで法然親鸞の精神を発展させたのであります。このように人がほんとうに真剣に真理を求むるなら、そして神の完全なる如く全からん<sup>(40)</sup>とする時には必ず十字架の信仰に至らざるを得ません。このように考えますと信仰を純粹に保つ一番よい道は、こわれ易い制度を支えるように種々な支柱を立てて保護することではなく、人々の真理を愛する心に委ねる事あります。福音の広く伝えられた今日、真理を強く愛する所には必ず信仰が燃え上がります。内村先生は信仰のなくなった教会の弊害の恐ろしいことを知って無教会主義を唱えられました。

信仰を純粹に保つには、フィロ・ソフィックな、即ち知恵を愛する態度が一番大切であります。教会を信仰の母体とするより、真理を求むることを主眼とする学校を

信仰の母体とする方がよいと思います。真実に真理を求むる学校を信仰の母体とすることが果たして可能であるかどうか、信仰の腐敗をこれによって防ぐ事が出来るかどうか、これを実証する事が我が基督教独立学園の使命の一つであります。基督教主義の学校は沢山ありますが、それはほとんど教会に附属したものであり、制度化された教会の一つの機関であります。我らの学園は他に何等の支柱もない。ただ神にのみ頼って真実に真理を求むることを目的とするものであります。これが信仰の一つの在り方を示すなら、これは実に大いなることであります。真理と信仰との為に闘った先人の残した未完成の大事業を一步でも完成に近づけることは大いなることであります。たとえ現世的には盛大にならずとも、これによって信仰の純粋を保ち得るなら、我が学園はその存在の使命を全うしたと言えます。私共学園に関係するものは職員も生徒も何はできなくとも真実に真理を求めていくことだけはできなければなりません。妥協を排し、ごまかしを捨て、飽くまで真理に向かって真実に突進して参りましょう。かくするならば紆余曲折はあっても最後には必ず純粋の十字架の信仰に到達します。

(「独立時報」第3号、1953年)

7-3-4 星を仰ぐ<sup>あお</sup>Hitch your wheels to the star!<sup>(41)</sup>汝<sup>なんじ</sup>の車を星につなげ

とは、Boys be ambitious!<sup>(42)</sup>と同じ意味のことをのべたもので、高貴な目的を持つということでもあります。一秒に地球を七廻り半する光が届くのに、何年何万何億年とかかるような遠方<sup>えんぽう</sup>の星のことなど人間と何の関係があるかといえばそれまでであります。そしてこれは、勿論<sup>もちろん</sup>お金を儲ける<sup>もう</sup>のには役だちませんが、天文学<sup>ほど</sup>程人類に大きな影響を与えている学問はありません。今日の文化の天文学に負う所は実に大であります。人は目前<sup>めさき</sup>のことばかり考えていては進歩が止まり、文化が衰<sup>おとろ</sup>えます。食うこと、飲むこと、儲ける<sup>もう</sup>ことのみ考えていては駄目<sup>だめ</sup>であります。人間は時には、目を永遠なるものに向け偉大なるものに向かって前進して行ってこそ人生の意味があるものです。星を見る天文学の最大の効用がこの点にあります。次に星の観測<sup>こよみ</sup>は曆の作成に必要欠くべからざるものであります。第三に星の観測は理論物理学<sup>(43)</sup>の主なる実験場であります。そこでは地球上では見られない何千万度の高温、何万気圧の圧力とが見られます。宇宙の創造と進化の学問もおもしろいものであります。いずれにしてもこの意義深い星を見ることを、星にしたしむことを覚えましょう。

(「独立時報」第6号、1953年)

7-3-5 すみ おやいし  
隅の首石<sup>(44)</sup>

「家造りらの捨てた石はこれぞ隅の首石となれる。これ主によりて成れるにて我らの目には奇しきなり」<sup>(45)</sup>（マタイ伝 21 章 42 節）と聖書にあります。これは大変大きな真理であります。イエス様は当時の学者、政治家、権力者達から無視せられましたが実は人類の救い主で在し給うたのであります。キリスト教が始まってその中心となったのはエルサレムの教会でありましたが、キリスト教が世界に広まる基をなしたのは、宗教的に言っては田舎であるアンティオキア<sup>(46)</sup>の教会であります。アンティオキア教会を根拠としてパウロの世界伝道が始められたのであります。世界の歴史を見ますと同じようなことが沢山見られます。中心ではなくて辺境において、期待せられた人によってではなくて無視せられた人によってこれまでほとんどすべての偉大なることがなされました。日本にキリスト教が入りまして真の日本のキリスト教の土台石となったのは北の涯<sup>(47)</sup>の札幌と西端の熊本、これは端ではありませんが横浜であります。そして札幌と熊本においては専門の伝道者によってではなくて学校の教師として米国より招いた人によってであります。札幌農学校においてクラーク先生は第一期生達<sup>(48)</sup>に「アンテオケ<sup>(49)</sup>教会となれ。」とよく申された由<sup>(50)</sup>であります、その理想の如く札幌より独立的信仰、形式や儀式によらないで、「神は霊なれば拝する者も霊と真とをもって拝する」真のキリスト教が始まりまして、75 年後の今日、日本を動かそうとして居ります。これらは家造りの捨てた石が隅の首石となった実例であります。我々の学校は最も辺りな所にあり、見すばらしい学校で誠に家造りらに捨てられた石であります。しかし、我等の心がけ次第でこれを隅の首石とすることが出来ます。我々が人に頼らず、神に依り頼む時は隅の首石となり新しき日本の土台石の一つとなれるのであります。沢山の事例がこれを示して居ります。偉大なる国家は偉大なる宗教の上に建設せられます。我らの果たさなければならぬ役割は非常に大きいのであります。われらと同じ理想の学校が日本に沢山出来ることを祈って止みません。既に岡山県津山<sup>(51)</sup>に出来ましたことをわれわれは見て参りました。この叶水の地において高等学校が成り立ち得るなら日本中どんな山の中でも高等学校が成立し得ます。われらの学校が成り立って初めて真の教育の機会均等が可能になります。辺りであればあるだけ、小さければ小さいだけ大きな務めがあります。「隅の首石」という言はわれらを非常に力づけ慰めてくれる言であります。

（「独立時報」第 8 号、1953 年）

## 7-3-6 環境と教育と文明

## 秋と河

秋<sup>いた</sup>到<sup>ごと</sup>る毎<sup>よ</sup>に余は河を思<sup>おほ</sup>う。二個の大いなる河を思<sup>おほ</sup>う。

その第一は石狩<sup>いしかりがわ</sup>川なり、森深く水静かに、鳶<sup>つた</sup>は弓形をなして深淵<sup>しんえん</sup>を覆<sup>おほ</sup>い、赤葉<sup>あか は</sup>その下にたれて紅灯<sup>こうとう</sup>の幽暗<sup>ゆうあん</sup>を照<sup>てら</sup>すが如<sup>ごと</sup>し。大魚<sup>たいぎょ</sup>流水<sup>りゅうすい</sup>に躍<sup>おど</sup>り、遠山<sup>えんざん</sup>その面<sup>おもて</sup>に映<sup>あ</sup>る。余は幾回<sup>いくかい</sup>となく独<sup>ひとり</sup>りその無人<sup>むじん</sup>の岸<sup>しんがし</sup>を追<sup>お</sup>遙<sup>とほ</sup>し、<sup>(52)</sup>或<sup>あるい</sup>は葦<sup>あし</sup>の中に隠<sup>かく</sup>れて余<sup>よ</sup>の靈魂<sup>れいこん</sup>の父<sup>ちち</sup>と語<sup>かた</sup>りぬ。

その第二はコネチカット<sup>がわ</sup>河<sup>がわ</sup>なり。之<sup>これ</sup>をホリヨーク山上より望<sup>のぞ</sup>んで銀河<sup>ぎんが</sup>の天上より地下<sup>ちか</sup>に移<sup>うつ</sup>されしが如<sup>ごと</sup>し。余はその岸<sup>しんがし</sup>に太古<sup>たいこ</sup>の鳥類<sup>ちゅうるい</sup>の足跡<sup>あしあと</sup>を探<sup>たず</sup>り、或<sup>あるい</sup>は楓樹<sup>ふうじゆ</sup>の下<sup>した</sup>に座<sup>ま</sup>し、或<sup>あるい</sup>は松林<sup>しょうりん</sup>の中<sup>なか</sup>に入りて、異郷<sup>いじやう</sup>に余<sup>よ</sup>の天<sup>てん</sup>の父<sup>ちち</sup>と交<sup>まじ</sup>わりぬ。

静<sup>しず</sup>かなる秋と静<sup>しず</sup>かなる河<sup>がわ</sup>！余はその岸<sup>しんがし</sup>に建<sup>た</sup>てられし余<sup>よ</sup>の母校<sup>もくこう</sup>を忘<sup>わす</sup>るゝ事<sup>こと</sup>もあらん。然<sup>しか</sup>れども秋<sup>あき</sup>到<sup>きた</sup>る毎<sup>ごと</sup>に、余<sup>よ</sup>に静<sup>しず</sup>かなる祈<sup>いの</sup>禱<sup>たう</sup>の座<sup>ざ</sup>を供<sup>たご</sup>せし河<sup>がわ</sup>を、余<sup>よ</sup>は死<sup>し</sup>すとも忘<sup>わす</sup>る能<sup>あた</sup>わざる也<sup>なり</sup>。(内村鑑三「所感十年」、1907年(明治40年)10月)

これは環境<sup>い か</sup>が如何<sup>いか</sup>に人間<sup>にんげん</sup>形成<sup>けいせい</sup>に大きな影響<sup>えいぎやう</sup>を与えるかを力強く述べたものである。内村先生の育成<sup>いくせい</sup>にこの二つの河<sup>がわ</sup>は札幌農学校<sup>さっぽろのうがく</sup>や、アマースト大学<sup>アマースト大学</sup>よりも役立ったのである。天然<sup>てんぜん</sup>の環境<sup>けいぎやう</sup>は、教育<sup>きういく</sup>には経済<sup>けいぎ</sup>的問題<sup>けんわだい</sup>以上に重視<sup>じゆうし</sup>されなければならない。現代<sup>げんたい</sup>の日本人<sup>にっぽんじん</sup>は特にこの事<sup>こと</sup>を忘<sup>わす</sup>れている様<sup>よう</sup>である。学校<sup>がく</sup>といえば都会<sup>とほ</sup>にのみある。多分<sup>たぶん</sup>パチンコ屋<sup>ぱちんこや</sup>のない所<sup>ところ</sup>にある高等学校<sup>こうとうがく</sup>は我<sup>われ</sup>らの学校<sup>がく</sup>だけではあるまいか。天然<sup>てんぜん</sup>の環境<sup>けいぎやう</sup>の中<sup>なか</sup>にある我<sup>われ</sup>らの学校<sup>がく</sup>の存在<sup>そんざい</sup>意義<sup>いぎぎ</sup>は大きい。ある西洋<sup>せいやう</sup>の学者<sup>がくしや</sup>が「地球上<sup>ちきゅうじゆう</sup>最も非生産<sup>ひせいさん</sup>的な所<sup>ところ</sup>は砂漠<sup>さぼく</sup>である。しかしアラビア<sup>アラビア</sup>の砂漠<sup>さぼく</sup>ほど生産<sup>せいさん</sup>的な所<sup>ところ</sup>はない。」と言<sup>い</sup>ったとの事<sup>こと</sup>である。モーセ<sup>モーセ</sup>も旧約<sup>きうやく</sup>の預言<sup>よげん</sup>者<sup>しや</sup>の多くもアラビア<sup>アラビア</sup>の砂漠<sup>さぼく</sup>で独<sup>ひとり</sup>り祈<sup>いの</sup>禱<sup>たう</sup>の神<sup>かみ</sup>の啓示<sup>けいじ</sup>に接<sup>せ</sup>したのである。キリスト<sup>キリスト</sup>も伝道<sup>でんどう</sup>の初<sup>はつ</sup>めに荒野<sup>あらの</sup>の試練<sup>しれん</sup>を受けられた。パウロ<sup>パウロ</sup>も回心<sup>かいしん</sup>した時にエルサレム<sup>エルサレム</sup>に行<sup>い</sup>かず<sup>ず</sup>にアラビア<sup>アラビア</sup>に行<sup>い</sup>ったと聖書<sup>せいしょ</sup>にある。マホメット教<sup>マホメット教</sup><sup>(53)</sup>もアラビア<sup>アラビア</sup>の砂漠<sup>さぼく</sup>で始<sup>はじ</sup>まったのである。今日<sup>こんにち</sup>の文明<sup>ぶんめい</sup>が物質<sup>ぶつしつ</sup>的<sup>てき</sup>文明<sup>ぶんめい</sup>まで信仰<sup>しんぎやう</sup>に負<sup>お</sup>うている事<sup>こと</sup>実<sup>じつ</sup>を考<sup>くわ</sup>えれば、真<sup>まこと</sup>にアラビア<sup>アラビア</sup>の砂漠<sup>さぼく</sup>はザール炭<sup>たん</sup>田<sup>でん</sup>地<sup>ち</sup>帯<sup>たい</sup><sup>(54)</sup>よりも生産<sup>せいさん</sup>的<sup>てき</sup>であると言<sup>い</sup>える。砂漠<sup>さぼく</sup>とまで行<sup>い</sup>かなくとも、もっと人間<sup>にんげん</sup>は田園<sup>でんえん</sup>の中<sup>なか</sup>に生活<sup>せいかつ</sup>すべきである。日本<sup>にっぽん</sup>の文化<sup>ぶんか</sup>に創造<sup>そうぞう</sup>性<sup>せい</sup>のないのは指導<sup>しうだう</sup>者<sup>しや</sup>等<sup>ら</sup>が深く考<sup>くわ</sup>えること<sup>こと</sup>の出来<sup>でき</sup>ない都会<sup>とほ</sup>に居<sup>お</sup>り、深く考<sup>くわ</sup>える事<sup>こと</sup>の出来<sup>でき</sup>る田園<sup>でんえん</sup>には、考<sup>くわ</sup>える力<sup>りき</sup>のない人<sup>ひと</sup>々<sup>ら</sup>が居<sup>お</sup>る為<sup>ため</sup>ではないか。鋤<sup>くわ</sup>を持つ農民<sup>のうじん</sup>に高<sup>たか</sup>い教養<sup>きやうやう</sup>を持たせるという<sup>いう</sup>のが我<sup>われ</sup>らの抱<sup>いだ</sup>いている夢<sup>ゆめ</sup>である。この夢<sup>ゆめ</sup>の実現<sup>じつげん</sup>の為<sup>ため</sup>に少しでも役立<sup>やくた</sup>てば我<sup>われ</sup>らの学校<sup>がく</sup>の目的<sup>もくひき</sup>は達<sup>たつ</sup>せられたのである。我<sup>われ</sup>らの夢<sup>ゆめ</sup>の実現<sup>じつげん</sup>する時<sup>とき</sup>に新<sup>あたら</sup>しい文明<sup>ぶんめい</sup>が起<sup>おこ</sup>るであらう。

(「独立時報」第9号 1953年)

## 7-3-7 新年の希望

どこを見ても嫌な事ばかりの世相である。平和憲法は無視せられている。再軍備が行われようとしている。国土は荒れ果てているのに保安隊<sup>(55)</sup>等に無駄な金が費やされている。日本の経済的基盤が非常にもろく今よりも危機が来そうである。アメリカが聖書にもっと従って共産主義を武力で弾圧する愚を止めれば世界の不安は除かれる、ソ連が共産主義にもっと確信を持ち、暴力によらなくとも成り立ち得ると考えるようになれば第三次大戦の憂い<sup>(56)</sup>はなくなる。どちらを見ても心配になる事ばかりである。この時に内村先生の「初夢」<sup>(57)</sup>を思い出す。

恩恵の露、富士山頂に降り、滴りてその麓をうるおし、溢れて東西の二流となり、其西なる者は海を渡り、長白山<sup>(58)</sup>を洗い、崑崙山<sup>(59)</sup>を浸し、天山<sup>(60)</sup>、ヒマラヤ<sup>(61)</sup>の麓に灌漑ぎ、ユダの荒野に到りて尽きぬ。其東なる者は大洋を横断し、ロッキー<sup>(62)</sup>の麓に金像崇拜の火を滅し、ミシシッピ<sup>(63)</sup>、ハドソン<sup>(64)</sup>の岸に神の聖殿を潔め、大西洋の水に合して消えぬ。アルプス<sup>(65)</sup>の嶺は、之を見て曙の星と共に声を放ちて謡い、サハラ<sup>(66)</sup>の砂漠は喜びて蕃紅の花の如くに咲き、斯くて水の大洋を覆うが如くエホバを知るの智識全地に満ち、この世の王国は化してキリストの王国となれり。我れ睡眠より覚め独り大声に呼ばわりて曰く、アーメン、然かあれ、聖旨の天に成る如く地にも成らせ給えと。

これは信仰に入ってより 30 年間暗誦しつづけて来たものである。ここに雄大なる構想をもって高貴なる理想が謳ってある。今までになかった新しい基督教的真理が日本に与えられて、これが全世界をうるおし、この世が神の聖旨に適う潔き所となり、喜びが全世界に溢れるのである。現実は何かに悪しくとも、愛なる神を信ずる我等は失望しないで大いなる理想を抱き高い夢を見る。神は必ず適当な時にこれを実現せしめて下さる。「己の御子を惜しまずして我等すべての為にわたし給いし者はなどかこれにそえて万物を我らに賜わざらんや」<sup>(67)</sup>（ロマ書 8 章 32 節）である。美わしき国土が神の恩恵を象徴している。法然、親鸞の如き宗教的天才が過去に出たことも希望を与える。内村先生は形式に依らないで霊と真とをもって神を拜することを欧米人が為し得ない程徹底せしめた。実は恩恵の露は既に降っているのである。これを日本に溢れしめ、全世界をうるおすことが後に続く我らの務めである。世は如何に暗黒に覆われるとも新年に当たり我らは希望を新たにす。我らの学校がこの内村先生の初夢の実現に少しでも役立てば本望である。

（「独立時報」第 10 号、1954 年）

### 7-3-8 卒業生<sup>(68)</sup>を送る言<sup>ことば</sup>

諸君はこの学校で多くの事を学びましたが、その中で最も諸君の一生に役立つものは聖書であります。このことは今は充分わからないかも知れませんが、諸君が社会に出て生活していくに従ってよりはっきりわかって参ります。これから先、一生の間に種々の困難に出合うことがあります。その時にそれを切り抜ける力を与えてくれるものは聖書であります。昔から数限りない人々が聖書によって力を得て苦難に打ち勝って参りました。聖書の真理は実践して初めてわかるものであります。頭で考えていたのではわかりませんが、実際<sup>おこな</sup>に行ってみてこれが人生の大きな真理であることがわかります。イエス様が山上の垂訓の最後に

さらばすべて我がこれらの言<sup>ことば</sup>を聞きて行<sup>さ</sup>う者を岩の上に家を建てたる賢き人にならずえん。雨ふり流れみなぎり、風吹きてその家をうてど倒れず。これ岩の上に建てられたる故なり。すべて、我がこれらの言<sup>ことば</sup>を聞きて行<sup>な</sup>ぬ者は、砂の上に家を建てたる人にならずえん。雨ふり流れみなぎり、風吹きてその家をうてば、倒れてその倒れはなはだし。<sup>(69)</sup>

と言って居られます。これは大きな真理を容易な言<sup>ことば</sup>で言い表したものであります。カントという哲学者は「実践理性批判」という本を著して難しくこのことを論じていますが、イエス様は誰にもわかり易く教えておられます。聖書の訓はその如く実行して初めて力あるものであることがわかります。聖書に沢山の真理が述べてありますが、卒業生を送るに当たってその一つを申し上げます。聖書に「宝を天につめ」ということをわかり易く教えてあります。「汝ら己が為に宝を地に積むな、ここは虫と錆とが損ない、盗人うがち<sup>(70)</sup>て盗むなり。汝ら己が為に宝を天に積み、かしこは虫と錆とが損なわず、盗人うがち<sup>(71)</sup>て盗まぬなり。」とあります。天に宝を積みとは自己中心の生活をするなということであり、地に宝を積みことが自己中心の生活であります。豊臣秀吉の如きは非常な才能を持っていて、その能力をすべて宝を地に積むことに費やした人であり、非常に宝を地に積みましたが、そこは虫と錆とが損ない盗人うがち<sup>(72)</sup>て盗む所でありました。その子の時にはすべてなくなってしまいました。秀吉程の才能はなくとも、つまらない人でも小さな宝でも、宝を天に積むならその生涯は貴いものであります。果たして世人<sup>(72)</sup>の大部分が考えている如く自己中心の生活がいいのか、または聖書が教えている如く人の為、世の為、神の為につくす宝を天に積む生涯がいいのか、これを諸君のこれからの生涯をもって実証して欲しいと思います。諸君は宝を天に積む生涯を送ってこの事がいいのだというこ

とを実証して欲しいと思います。これを実証する生涯しょうがいは実に貴い生涯とうと しょうがいであります。  
（「独立時報」第 12 号、1954 年）

## 7-3-9 罪の本質

5月1日に我らの間に盗難事件が起こった。盗難の難の字は、普通の盗まれた災難の意味ではなく、盗みという罪が我らの間に入って来た為の苦難の意味である。係りの者の不注意からではあったが、生徒自治会の金千余円<sup>(73)</sup>がなくなった。我ら全員の心痛は言いようがなかった。千余円の金は惜しくはないが、罪が我らの間に入り込んだことは実に恐ろしいことである。5月3日の予定だった米沢の山形大学工学部見学も中止しなければならないと決心した。しかし特別に団体割引の処置をしてくれた駅に対して中止することが出来ないの、全員買い物はしないこと自由行動をとらないことにして見学は実行した。5月4日には一同してヨハネ伝8章の姦淫の折捕らえられた女とイエス様の話の所を読み、我ら一同等しく罪人であり、罪を犯した人を石で打つ資格のないこと、我らは罪は憎むが罪を犯した人を憎んではならないことを思い起こした。罪を犯した人が神の御前に罪を犯したのであることを悟り、罪の恐ろしさを知り、神の御前に悔い改めることを祈った。まことに人々が罪を犯さなかったのは神の恩恵によるのであった。その日はなくなった時の事情を明らかにするために生徒一人一人と話し合いをした。罪を犯した人を責めることは出来ないが、罪をうやむやにしてはならないからである。罪を犯したと申し出る者はなかった。5月5日の休日の後、これ以上悪魔につけ込まれない為に、各人が「誰が盗ったろう」というようなことは話し合ったり考えたりしないように注意し、罪を犯した人が人には恥ずかしくて申し出られなくとも、神の御前に悔い改めるよう要望し、この問題を祈りによって解決することにした。罪を犯したことは恐ろしいことであるが、これによって神の御前に砕けたる悔いし心を持つことが出来るようになれば、この苦難が却って恩恵の基となるのである。「健康なる者は医者を要せず、ただ病める者之を要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来たり。」<sup>(74)</sup>と仰ったイエス様は砕けた魂を持つ者を喜んで迎えて下さる。我等一同この不幸により、改めて一層深く罪の何たるかを知り、イエス様に一層よりすぎることを学ばなければならない。砕けた魂を持つことが出来ることは何物にも優って貴い事である。生徒自治会の発案で投書箱を作り、全生徒に紙片を渡し全員が朝登校の際それに紙片を入れることにし、盗った人はその時一しょに盗った金を入れて貰うことにした。その結果、金も出て来て、かつ盗った人が深く罪を悔い改め、神に赦しを願っている旨を紙片に記して居ったので、我等は悪魔に勝ち得たことを知り一安心した。このようにしてこの不幸な事件も我等一同に罪の本質を一層強く知らしめるようになり、恩恵の基となることのできた。

しかしこれだけで問題は解決されなかった。それより約半月たって、ある集落<sup>(75)</sup>

において誰々が盗ったのであるという噂が出て、それを知った噂の当人が泣いて口惜しがった。確かな証拠もなくして人の心を傷つける如き言を語ることは恐ろしい罪である。金を盗むより遥かに大きな罪である。金がなくなった損害はたかが知れたものであり、また償うこともできる。しかし人の心を傷つける事はより深刻であり、また償いようがない。それにも拘わらず人は金を盗む罪が人に知られることは恐れるが、人の心を傷つける罪は平気で人前で犯す。人の悪口を言う罪は多くの人が犯しているから平気で居られるのであろう。しかしいくら他の多数の人が犯しているからと言ってもその罪の軽減にはならない。罪は絶対的なものである。群集心理<sup>(76)</sup>に惑わされて罪の意識をにぶらせてはならない。

噂をしたのは我らではないが、その源は我らであるから、もっと言動に注意し、罪に対してもっと真剣にならねばならない。なおまたこれより半月程してまた別の誰々が盗ったのであろうという噂が同じ集落で起こった。このような罪は日本の社会に深く根を下ろしているものである。日本人は良心によって道徳を維持しないで、恥とか外聞とかによって道徳を維持していると言われていたが、情けないことである。これが日本に福音が伝わり難い最大の原因である。自分が罪を犯さないのに誤って批難されることはそれ程口惜しくはないものである。神が見てい給い、いつかは潔白なことを明らかにして下さる。人に知られずとも罪を犯したことは恐ろしいことである。人にかくすことが出来ても神にかくすことは出来ない、神の御前に罪を犯すことの恐ろしきをもっと深刻に悟らなければならない。そして砕けたる悔いし心を持たなければならない。その時に罪の赦しの十字架の福音が我らに光明<sup>(77)</sup>を与える。

(「独立時報」第 13 号、1954 年)

### 7-3-10 最も貴いこと

霊的に最も貴いことはこの世的に最も卑しいことをすることである。イエス様も

「異邦人の君と認めらるる者の、その民を宰どり、大なる者の民の上に権をと  
 ることは汝らの知る所なり、されど汝らの中には然らず、かえって大な  
 らんと思う者は汝らの役者となり、頭たらんと思う者はすべての者の僕と  
 なるべし、人の子の来れるも仕えらるる為にあらず、かえって仕うることをな  
 し、また多くの人の贖償として己が生命を与えん為なり。」<sup>(78)</sup>

(マルコ伝 10 章 42 節～ 45 節)

と仰っている。人に仕えること、人の嫌がる仕事を為すことが真に貴いことであ  
 る。「後世への最大遺物」の中にマウント・ホリヨーク・セミナリーの事が書かれて  
 ある。メアリー・リヨン<sup>(79)</sup>という先生が居って「他人の行くことを嫌う所へ行け、  
 他の人の嫌がる事を為せ。」<sup>(80)</sup>と教えたので立派な女学校になったのである。

人は楽なこと、きれいなことをしたが、なお自分であることを嫌い、人に奉仕さ  
 せたがる。王侯<sup>(81)</sup>貴族はこのようにするが、決して貴いことではなくかえって卑し  
 いことである。人に卑しめられること、嫌がることを為すことの方が貴いことであ  
 る。アッシジ<sup>(82)</sup>の聖人フランシス<sup>(83)</sup>の生涯が王侯貴族の生涯より貴く美しいので  
 ある。私に一つの望みがあった。それは我らの学園において最も嫌がられる仕事を自  
 分でしたいというのであった。学校の出来る前は牛の肥出し<sup>(84)</sup>は大抵私がして居っ  
 た。汚いと思ったのは初めだけで、やってみればそれ程嫌な仕事でなかった。むしろ  
 きれいに積み上げるにはどうしたらいいか等と工夫しながらやると楽しいくらいで  
 あった。しかし高等学校が始まってからは学校運営の為に身心ともに忙しくなってそ  
 の望みが果たされないでいる。しかし幸いなことにこの希望が別な形で満たされて  
 いる。

これは榎子先生<sup>(85)</sup>が毎朝便所の掃除をして下さっていることである。榎子先生は  
 我が学園の最年長者でいらっしゃる、最も尊敬される方である。その榎子先生が一番  
 卑しいと思われる事をして下さることは、私達の理想が何であるかを最もよく現わし  
 ている。榎子先生にさせていただいてはもったいないと一時生徒が受け持ったことがあ  
 るが、またいつの間にか榎子先生の御仕事になってしまった。榎子先生の貴い御奉  
 仕により、一同に何が貴いかが真実にわかり、皆が卑しめられる仕事を先を争って  
 するようになりたいものである。

(「独立時報」第 15 号、1954 年)

## 7-3-11 新年を迎えて

新年おめでとう、と言うけれど一体どういう意味でめでたいのであろうか。年少の者であるならば、完成の時期にだんだん近づいて行くのであるからおめでとうといえるけれども、一人前になってしまうと新年が来ても少しもめでたくない。人間は一生かかって完成するものであるとしても、次第に人生の終わりに近づいて行くことは淋しいことである。一休和尚<sup>(86)</sup>は新年に骸骨を杖の頭につけて「門松は冥土の旅の一里塚、目出度くもあり目出度くもなし」<sup>(87)</sup>と言って、町を歩いて廻ったとのことである。何の考えもなく、新年だといって楽しむ人々への警告である。来世の信仰がないならば誠に新年はめでたくない。一年一年と滅亡の淵に向かって進んで行くのである。復活、来世、天国の信仰があるならば新年はほんとうにめでたいものとなる。一年一年とその美しい天国へ近づくのである。理想の岸辺に進んで行くのである。一年一年が天国へ行く為の準備となるのである。この世の人生の終わりが近づいても淋しいどころではなく、一層希望に燃えるのである。新年を真にめでたいものとするものは天国の信仰である。讃美歌の There's a land that is fairer than day<sup>(88)</sup>（日本語訳「はるかにあおぎ見る」、488番）の如くである。新年を迎えてこの信仰を一層強く掴む年でありたいものである。

（「独立時報」第16号、1955年）

### 7-3-12 実践<sup>じっせん</sup>してわかる真理

それでわたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢<sup>かしこ</sup>い人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても倒れることはない。岩を土台としているからである。またわたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。

(マタイ伝 7章 24節～27節)

イエス様は重大なことを大変<sup>やす</sup>わかり易い言葉でいつも仰<sup>おっしゃ</sup>る。この世の学者はつまらないことを難しく言う。難しいことを言えば何か偉いように考える。しかし深い真理をやさしい言葉で言い表すのが真に偉いのである。道徳的なこと信仰的なことは実践<sup>じっせん</sup>して初めてほんとうだとわかるものであることをどんな無学な人にもよくわかるようにこの譬<sup>たと</sup>えを仰<sup>おっしゃ</sup>った。この譬<sup>たと</sup>えの含む深い意味を理解するなら最も難しい哲学を理解することに等しい。カントは「実践<sup>じっせん</sup>理性批判」と「純粋<sup>じっせん</sup>理性批判」という二つの大変難しい大きな本を書いてこのことを明らかにしたのであるが、イエス様はこんなに誰にもよくわかるやさしい言葉ではっきりと教えられた。このような所にイエス様が人間業<sup>わざ</sup>ではない御力<sup>みちから</sup>を持って居られることが現われている。神様がいらっしゃるかどうかはいくら考えてもわからない。しかし、いらっしゃるとしてこの人生を生きていくなら、確かに活ける神が全宇宙を支配して<sup>い</sup>給うて、我らを護<sup>まも</sup>ってくださることがわかるのである。イエス様はこの譬<sup>たと</sup>えの前に大変<sup>うる</sup>美しい道徳を教えられたが、これが皆<sup>みな</sup>真実であることは実行してみてもよくわかるのである。イエス様は悲しむ者は幸福<sup>89</sup>なりと仰<sup>おっしゃ</sup>ったが果たしてそのとおりかどうか、それは悲しみに出会って神様に慰<sup>なぐさ</sup>められたことのある人は、イエス様のこの御<sup>み</sup>言葉が生きた真理であることを知るのである。真理がわかるには実行してみる必要がある。我々<sup>まこと</sup>はもっと真<sup>まこと</sup>と思うこと、正しいことを実行しなければならぬ。私共のまわりには真理が余<sup>あま</sup>り実行されていない。実社会ではそうはいかないといって正しいことを実行<sup>こん</sup>しない。今日の日本の病<sup>びょう</sup>弊<sup>へい</sup><sup>(90)</sup>はここにある。

真<sup>まこと</sup>なること正しいことを実行しないでもいいと考えている人が多い。正しいことが実行されないために、日本の国がだんだん困難<sup>おちい</sup>に陥<sup>おちい</sup>って行く。少なくとも私共だけでも実行しなければいけない。なすべきことは必ず実行することが大切である。

(「独立時報」第17号、1955年)

### 7-3-13 卒業生<sup>(91)</sup>を送る辞

諸君はこの三年間に多くのことを学びました。それらは諸君がこれからの人生を生きていく上に大いに助けとなるであります。しかしその中で最もいいものは信仰であります。このことは今ははっきりわかりませんが、これから年をかきねていくに従ってだんだんわかって参ります。詩篇 19 篇に「之を黄金にくらぶるも、多くのまじりなき黄金にくらぶるもいや増さりてしたうべく、之を蜜にくらぶるも蜂の巢のしたたりにくらぶるもいや増さりて甘し。」<sup>(92)</sup>とありますが、誠に人生の経験をつんだ人が信仰の真によいものであることを体験し、その良さを何とっていい表わしたらいいかわからない、何と言いい表わしても表わしきれないというその心持がよく表われて居ります。普通に想像し得る最もよいものをならべてみて、それらより遙かに優れたよいものだと申して居ります。今日の人々が求むるもの、富とか地位とか才能とかいうものも人を真に幸福にするものではなく、これらが人を幸福にする程度はたかが知れたものでありまして、これを苦心して得た人々が一様にそのつまらないものであることを述べて居ります。それにくらべて信仰は遙かにしたわしいものであります。

人生は悩み多きものであります。富も地位も才能も決してこの悩みを取り去ってはくれません。これを取り去ってくれる、苦難に打ち勝たせてくれるものは信仰より他にありません。昔からどれだけ多くの人々が信仰によって苦難に打ち勝って来たかわかりません。悩みや苦しみの最大のものは己の弱さから来て居ります。人間というものは弱いものであります。強そうに見えて居って案外弱いものであります。外から来る悩みや苦難は大したものではなく比較的容易に打ち勝つことが出来ます。自己の弱さから来る悩みや苦しみが最も強いものであります。この時に神に依りすがり、神に強くして貰うのが信仰であります。そして神に頼り強くなる時に、人は初めて真に強くなることが出来ます。どんな人間的に強い人より遙かに強くして貰えます。意志の弱い意気地なしが神に強くせられて立ち上がる時に、人間的などんな強さにも優って強くなります。誠に「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いから」(コリント前書 1 章 25 節)であります。自己の弱さを知り神に頼りすぎることを知る為なら弱いことが却って神の恩恵であります。

これから諸君は人生を生きていくに当たって多くの悩みや苦しみに出あうであります。そして自己の無力を弱さを心からなげく時が必ずあると思います。その時にどうか神に依りすがり、神に強くして貰って下さい。そして信仰が如何に黄金よりもしたわしく蜜よりも甘いかを体験して下さい。諸君が悩みの時に神によりすぎることを忘れずにいてくれるならば、安心して諸君を社会に送り出すことが出来ます。使徒

パウロがエフェソ<sup>(93)</sup>の長老をミレトス<sup>(94)</sup>に呼んで別れを告げた時の言葉が、そのまま私の諸君への<sup>はなむけ</sup> 餞 の言葉であります。

だから目をさましていなさい。そして私が三年の間夜も昼も涙を<sup>もっ</sup>以てあなたがたひとりびとりを絶えずきとして来たことを忘れないで欲しい。今私は主とその恵みの<sup>ことば</sup>言とにあなたがたをゆだねる。御言<sup>みことば</sup>にはあなたがたの徳を<sup>み</sup>たて、聖別<sup>せいべつ</sup>されたすべての人々と共に、御国<sup>み</sup>をつがせる力がある。  
(使徒行伝 20 章 31 節～ 32 節)

そして御言<sup>みことば</sup>のうちでも特に先に掲げました「神の愚かさは人よりも賢<sup>かしこ</sup>く、神の弱さは、人よりも強いからである。」という言<sup>ことば</sup>をなごもう一度卒業に当たり諸君におくります。

(「独立時報」第 18 号、1955 年)

### 7-3-14 新入学生<sup>(95)</sup>を迎えて

今年是一年に17名、二年に4名の新入学生を迎えて生徒総数は43名になりました。職員も五十嵐佐恭先生<sup>(96)</sup>と今野利介先生<sup>(97)</sup>に参加していただくようになりまして全部で9名になり、次第に陣容が整って参りまして喜ばしく思います。

新入生諸君の中には信仰を求めて来た人もありますし、卒業後就職の世話をよくして貰いたい為の人もあります。また遠くの高等学校へ行けないからという人もあり、いろいろであります。けれどここで学ぶものの中で一番よいものは信仰であります。信仰は強制すべきものではありませんから強制は致しませんが、少なくとも人生というものを深く考えて、私たちは如何に生くべきかということをしっかり握って卒業して貰いたいのであります。校舎も掘立て小屋のようなものであり、設備も不完全で職員の数も少ない、見すばらしい学校であります。何か取り柄があるとすれば、基督教に基づく宗教教育を自由に施し得るという点にあります。この学校の卒業生の就職率がいいと申しましても、真面目であって役に立つと思われるからであります。何でもかんでもこの学校の卒業生であればいいというわけではありません。勉強して三年間に所定の単位を習得すれば、卒業証書は差上げますが、それだけではなくこの学校の精神をつかんで欲しいのであります。紙に書いた卒業証書でなくて、心の中の紙に書かれた真の卒業証書を持つようになって欲しいのであります。聖書に

わたしたちの推薦状はあなたがたなのである。それはわたしたちの心にしるされていて、すべての人に知られかつ読まれている。そしてあなたがたは自分自身がわたしたちから送られたキリストの手紙であって、墨によらず生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく人の心の板に書かれたものであることを、はっきりあらわしている。

(コリント後書 3章 2節～3節)

とあるようになって貰いたいのであります。その為に入学の始めからその心掛けで勉強して欲しいのであります。

(「独立時報」第18号、1955年)

### 7-3-15 キリスト 基督教主義私立学校の使命

教育の普及ふきゅうということは日本の善い特長の一つである。米国の兵士の中には文字の読めないものがあるということを知って、敗戦後すべての点で引け目を感じている多くの日本人は、教育だけは米国アメリカに優まさっていると考え、これを唯一の誇りにした。しかし私はこれも誇りにはならないと思う。というのは普及ふきゅうはしているけれど効果がそれ程あがっていないからである。教育の効果は上級学校進学率や就職率では定められない。高い文化を築き上げることが出来るかどうかによって定まる。総合的に見て米国アメリカの方が文化が高いことは否定できない。それ故日本の教育は普及ふきゅうはしているが、質が劣おとって居おって効果があがらないということになる。従って日本の教育も誇りにはならない。

日本の教育が劣おとっている最大の原因は、日本の教育が明治以来主として官公立学校かんこうりつ (98)によってなされた為である。教育者が同時に己の出世を念願とする官公吏かんこうりであっては正しい教育が出来はずる筈がない。勿論官公吏である教育者の中にも立派な人はいる。十数年前に亡くなった私の知っているある先生は、当時の北小国村おぐに (99)に20年以上居おられて、「自分が教えた生徒のその子供を教えている。出世出来るからといって直すぐに他へ移りたがるのは教育者としての最大の喜びを捨てることである。」と居おった。しかしこういう方かたは例外であって、山間の僻村さんかんの校長は普通二年で転任する。生徒の為の教育ではなくて教育者が上司に認められる為の教育を行っている。研究授業やその他の教育研究が盛んに行なわれるけれども、それらは多くは世間せけんから認められる為の研究である。実質はともかく、外形を整えて外から見て立派らしく見えるようつと努める。これでは真の教育は出来ない。戦後多くの教育研究がなされたにも拘かかわらず、今日こんにち学力低下が問題になっているのはこの為であると考えられる。

教育は人格と人格との接触である。真の教育は愛を通して行われる。真の教育は教育の使命を自覚してこれに献身けんしんする教育者によって初めて行われる。官公立かんこうりつの学校では例え使命感をもって教育を始めたとしても、現在の官公吏かんこうりの立場上これを守り通すことは困難である。私立学校でも経営者との間に同様な事が生ずることはあり得るが、官公立かんこうりつ学校より遥かに教育の独立たもを保ち易い。それ故よい私立学校が沢山出来ることが日本の教育を建て直す為せひに是非必要である。ここに私立学校の使命がある。

なお私立学校では自由に宗教教育が行える。宗教教育の必要は誰も認めているがこれが十分に出来なかった。新憲法になってから特に出来ないが戦前でも問題であった。昭和の初め頃特に宗教教育の必要が叫ばれたがどうすることも出来なかった。米国アメリカでは家庭や教会で宗教教育が行われているから困らないが、日本ではそうは行かない。高い文化は宗教の基礎がなければ築かれない。教育の根底こんていにどうしても宗教が必要で

ある。ソ連や中共<sup>(100)</sup>の文化も宗教を取り入れないなら、いくら現在立派に見えても、やがて行き詰まるであろう。宗教教育を自由に行える私立学校の使命は大きい。

宗教教育というだけならどの宗教でもいい筈である。けれどもそれは高い文化を創造し得るものでなければならない。また教育者に真に人間を愛する愛を与えるもの、教育の使命を自覚させてこれに献身せしめるものでなければならない。それは「神がこのように私達を愛して下さったのであるから、私達も互いに愛し合うべきである。」  
といて、神の愛に励まされて愛する事が出来るようにしてくれる基督教以外にはない。ペスタロッチが重んぜられる理由である。ペスタロッチの研究が盛んであるが彼の信仰を無視したペスタロッチの研究くらい、無意味なものはない。外形は貧しくとも我らの基督教独立学園の使命は大きい。

(「独立時報」第 19 号、1955 年)

### 7-3-16 卒業生<sup>(101)</sup>を送る辞

卒業生諸君は三年間の勉学を卒えてこれから現実の世の中に出ようとして居ります。これまでは準備の時代でありましたが、これからは実際に人生を生き抜いて行くのであります。これまでは「天に宝を積み」ということを習って参りましたがこれからはその天に宝を積むことを始めるのであります。今諸君はこれから天に宝を積む一生を送ろうか、地に宝を積む一生を選ぶかという問題にぶつかって居ります。神と富とに兼ね仕えることはできません。どちらか一つを選ばなければなりません。神に仕える天に宝を積む生涯を選ぶか、富に仕える地に宝を積む生涯を選ぶかという分かれ道に立っているのであります。多くの人の考えるように眼前の利益を求めてあくせくし、地に宝を積むことに一生懸命になるか、またはそういう生活の愚かであることを知って、神の御用に立つ、人と神とに奉仕する天に宝を積むことに一生懸命になるか、これを実際に決めなければなりません。

日本の教育の欠点は真理を余り重んじないことでもあります。ほんとうはこうであるが実際の世の中ではそのとおりにしなくてもよいといって真理を少しまげても構わないように教育致します。嘘を言っは悪いことはどこでも教えます。けれども実際の世の中に出たら嘘も方便で言わなければならなくなっても仕方がないと教えます。その為に日本の国が今日のような困難に出会っているのであります。聖書に「わたしたちは真理に逆らっては何をする力もなく、真理に従えば力がある」とありますが、全く真理に逆らっては何も出来ません。真理を少しでも外れたら事は成就致しません。自然科学ではこの事が直に結果として現われますけれど、社会においては短い期間では、はっきりと現われません。その結果がはっきりするには長い期間が要ります。それで真理から外れてもやって行けるように考えますが、世の中のことで例外ではありません。真理から外れると駄目になります。ただ短期間に現われないのでやって行けるように見えるだけであります。自然科学者の中に比較的正しい人が多いのは、真理から外れたら何も出来ないことをよく知らされるからであります。真理の貴さを悟るからであります。

諸君はこれまで習った真理がほんとうに貴いものであることを身をもって経験するのであります。天に宝を積むことがほんとうに貴いのだということを生涯を賭けて知るのであります。天に宝を積む生涯を送ってやはりこれでよかった、種々迷うこともあったがやはりこの方が真理だったと喜ぶか、または地に宝を積む生涯を送って、初めはこれでなければやって行けないと思ってこの道を選んだがやはりつまらない生涯だった、我が一生は空の空なるもの<sup>(102)</sup>であったと後悔するか、いずれにしてもこれからの一生を賭けて体験するのであります。

この重大な時期に当たってどうか三年間学んだことを活か<sup>い</sup>し、真理に従う一生を送って下さい。天に宝を積む生涯<sup>しょうがい</sup>が地に宝を積む生涯<sup>しょうがい</sup>より真理に適<sup>かな</sup>ったものであることをこれからの諸君の生涯<sup>しょうがい</sup>によって実証<sup>あやま</sup>して下さい。そして今私共の周囲<sup>あふ</sup>に溢れている、真理から外れても構<sup>あやま</sup>わないという誤<sup>あやま</sup>った考えを少しでも正しくするように諸君<sup>しょうがい</sup>の生涯<sup>しょうがい</sup>をかけて闘<sup>おまも</sup>って下さい。神の御守り<sup>おまも</sup>によって強<sup>かしこ</sup>くせられ、賢<sup>かしこ</sup>くせられ、必ずこのことが出来ると確信<sup>いた</sup>致します。

あなたがたは自分のために虫が食<sup>ぬすびと</sup>い、さびがつき、また盗人<sup>ぬすびと</sup>らが押し入<sup>ぬすびと</sup>って盗み出すような地上に宝をたくわえてはならない。むしろ自分の為に虫も食<sup>ぬすびと</sup>わずさびもつかずまた盗人<sup>ぬすびと</sup>らが押し入<sup>ぬすびと</sup>っても盗み出すこともない天に財をたくわえなさい。

(マタイ伝 6 章 19 節)

だれも二人の主人<sup>か</sup>に兼ね仕<sup>つか</sup>えることはできない。一方を憎<sup>か</sup>んで他方を愛<sup>つか</sup>し、あるいは一方を親<sup>か</sup>しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは神と富<sup>か</sup>とに兼ねつか<sup>か</sup>えることは出来ない。

(マタイ伝 6 章 24 節)

(「独立時報」21号、1956年)

## 7-3-17 創立記念式（第8回）

今日第八回創立記念式を行う事が出来ることは大いなる喜びであり感謝である。この小さな学園が八年余り続いて来たのであって、多分これからも主の御腕に護られて続けて行くことが出来るであろう。誠に「私たちの目には不思議に見える」ことである。多くの困難はありましたがすべてこれらに打ち勝って来ることが出来た。先生方には全く現世的幸福を犠牲にして耐乏生活<sup>(103)</sup>をしていただいた。これが学園を今日まで続けることが出来た最大の力である。全く感謝の外はない。また多くの信仰の友人達が祈って下さっている。全能の神に祈って下さるに優る援助はない。多くの祈って下さる方々があることは、巨額の基本財産を持つことより有り難いことである。この意味で私達の学園は最も幸福な学園の一つである。

しかし何と申しても私共の学園が神と人とお役にたつものでなければ存在の価値がない。存在の価値のないものはいくら先生方に耐乏生活をしていただいても、また多くの方が祈って下さってもつぶれてしまう。存在の価値のあるものはいくらつぶそうとしてもつぶれるものではない。この世の中に必要なものなら必ず存続するものである。それでこの学園を続けて行くのに最も大切なことは生徒諸君が立派な人間になって、神と人のお役に立つものとなることである。世の中に必要なものとなる事である。内村先生の墓碑銘<sup>(104)</sup>がそのまま私達の精神でなければならない。

|                        |                            |
|------------------------|----------------------------|
| I for Japan ;          | 私は日本の為                     |
| Japan for the world ;  | 日本は世界の為                    |
| The world for Christ ; | 世界は基督 <sup>キリスト</sup> の為   |
| And All for God.       | そして万物 <sup>ばんぶつ</sup> は神の為 |

(6月27日、創立記念式にて)<sup>(105)</sup>

(「独立時報」第22号、1956年)

7-3-18 起工式<sup>(106)</sup>

エホバが家を建てられるのでなければ、  
 建てる者の<sup>きんろう</sup>勤労はむなしい  
 エホバが町を守るのでなければ  
 守る者のさめているのはむなしい。  
 あなたがたが早く起き、遅く休み、  
<sup>しんく</sup>辛苦のかてを食べることはむなしいことである。  
 エホバはその愛する者に、眠っている時にも、  
 なくてはならぬものを与えられるからである。<sup>(107)</sup>  
 (詩篇<sup>へん</sup> 127 篇<sup>へん</sup> 1 節～ 2 節)

世の中には式が<sup>たくさん</sup>沢山ある。結婚式<sup>そうしき</sup>とか葬式<sup>しゆじゆ</sup>とか種々ある。しかし大抵形式<sup>たいてい</sup>に流れて  
 しまって、ただその気分<sup>ひた</sup>に浸るとい程度で満足している。これではならないと思う。  
 私共はする以上は意義のあるものにしなければならない。

起工式<sup>きこう</sup>というならば起工<sup>きこう</sup>するまでに到<sup>いた</sup>ったことに対する感謝<sup>しん</sup>と、これから順調<sup>しん</sup>に進  
 捗<sup>ちよく</sup><sup>(108)</sup>するようにとの祈願<sup>きがん</sup>でなければならない。

多くの方々の愛<sup>きこう</sup>によって起工<sup>きこう</sup>するようになったことは誠<sup>まこと</sup>に大きな感謝<sup>まこと</sup>であって、  
 これによって示された多くの方々の愛<sup>よみ</sup>を神<sup>むく</sup>が嘉<sup>たま</sup>し、千倍<sup>むく</sup>し万倍<sup>たま</sup>し報<sup>むく</sup>い給<sup>たま</sup>わんと心か  
 ら祈る。

また詩篇<sup>へん</sup>の 127 篇<sup>へん</sup>の言<sup>ことば</sup>の通り神<sup>い</sup>がなさって下さるのでなければ、如何<sup>い</sup>に人間的<sup>か</sup>  
 力の限<sup>む</sup>りをつくしてもそれは無駄<sup>む</sup>である、神<sup>む</sup>が私達<sup>だ</sup>を通してなさってくださるのであ  
 れば私共<sup>い</sup>は如何<sup>い</sup>に不完全<sup>い</sup>であっても必ずうまくいく。神<sup>い</sup>がなさるといことは、私共<sup>い</sup>  
 が神<sup>み</sup>の御心<sup>み</sup>に叶<sup>かな</sup>う如<sup>こと</sup>く為<sup>な</sup>すことである。潔<sup>きよ</sup>く正<sup>な</sup>しくすべてのことを為<sup>な</sup>すことである。  
 そうしなければ家<sup>む</sup>を建て<sup>だ</sup>るのでも国<sup>む</sup>を守る<sup>だ</sup>のでも無駄<sup>む</sup>である。

正<sup>さ</sup>しくなくとも栄<sup>さ</sup>えるものがあるではないかという方もあるかも知れない。しかし  
 これは目<sup>あ</sup>先の<sup>さ</sup>ことしか見<sup>さ</sup>ていない考<sup>さ</sup>えであって、少<sup>あ</sup>し長<sup>さ</sup>い眼<sup>さ</sup>をもつてみればいかに  
 旭<sup>あ</sup><sup>(109)</sup>の昇<sup>さ</sup>るよ<sup>さ</sup>うな勢<sup>さ</sup>いであつても、正<sup>あ</sup>しくないものは思<sup>さ</sup>いの外<sup>さ</sup>早<sup>さ</sup>く倒<sup>さ</sup>れることがわ  
 かる。やはり聖書<sup>ほ</sup>の教<sup>ほ</sup>えは真<sup>ほ</sup>理<sup>ほ</sup>である。これから外<sup>ほ</sup>れては滅<sup>ほ</sup>びるより外<sup>ほ</sup>はない。

私共<sup>き</sup>この起工式<sup>きこう</sup>に当<sup>こ</sup>たりこの聖書<sup>ことば</sup>の言<sup>ことば</sup>を胸<sup>み</sup>に刻<sup>か</sup>み、すべてを神<sup>み</sup>の御心<sup>かな</sup>に叶<sup>か</sup>うよう  
 に、潔<sup>きよ</sup>く正<sup>な</sup>しく為<sup>な</sup>して行<sup>な</sup>く決<sup>き</sup>心を新<sup>き</sup>たにしなければならない。これが本<sup>き</sup>当<sup>こう</sup>の起工式<sup>きこう</sup>  
 の意義<sup>き</sup>である。

(「独立時報」第 22 号、1956 年)

### 7-3-19 矢内原先生講演会<sup>(110)</sup>の時の挨拶<sup>あいさつ</sup>

取るに足らない小さい私共の学校の為に、沢山の<sup>たくさん</sup>方々が御好意を示して下さいまして、新しい校舎が建築出来るようにして下さいましたことは、誠に有り難い<sup>まこと あ がた</sup>こと  
 ございまして心から感謝<sup>いた</sup>致します。そしてその記念の為に矢内原先生を山形市にお  
 迎えして講演会を開いて下さいまして誠に有り難う<sup>まこと あ がと</sup>ございます。

私共は教育技術は下手で、また設備も不完全であります、ただ一つ誇ることの出来  
 ますことは、宗教教育が自由に出来ることでもあります。信仰なくしては真の教育は  
 出来ません。宗教教育の必要はいつの時代でも強く感ぜられて<sup>お</sup>居りますが、日本の  
 現状では不可能であります。昭和の初め頃も強く叫ばれましたが、何も成果をあげる  
 ことは出来ませんでした。このことを考えますと、自由に宗教教育の出来ます私共の  
 学校の存在は意味があると信じます。そしてその特長<sup>いっそう い</sup>を一層活かすことが多くの方々の  
 私共に示された愛<sup>こた</sup>に応える道であると思ひます。

教育は真理を教え、真理に従って生きるように導くことでもあります。しかし日本の  
 学校では真理は教えますけれど真理に従わなくともいいような教え方<sup>いた</sup>を致します。正  
 直にしなければいけないことは教えます。けれども世の中はそうばかりは行かない。  
 政治家<sup>うそ</sup>は嘘を言ってもいい。商人<sup>うそ</sup>は嘘を言わなければやって行けないと教えます。敗  
 戦の苦痛<sup>くつじょく</sup>と、屈辱<sup>くつじょく</sup>とはこの為であります。滅びないのは神の恩恵<sup>おんけい</sup>によります。

矢内原先生は単に大きな大学の総長でいらっしゃるというだけでなく、ある意味で  
 日本の精神的支柱<sup>しちゆう</sup>であります。日本を真理に従わせる重き職務を持って<sup>お</sup>居られます。  
 元来<sup>がんらい</sup>大学は国民に真理を示し、真理に従わせる為のものであります。その先生を山形  
 にお迎えし、小さな学校の為の記念講演<sup>お</sup>を御願<sup>わたくし</sup>いするのは、先生を私<sup>わたくし</sup>する<sup>(111)</sup>きらい<sup>(112)</sup>  
 がないでもありません。しかし私共が先生を迎えて、真理に従って生きる決意  
 を新たにすれば、先生をわずらわしたことが無意味でなくなります。私共の学校  
 が真理<sup>とうと</sup>を貴<sup>いっそう</sup>ぶ教育<sup>いた</sup>を一層徹底<sup>いた</sup>致しまして、日本を真理に近づける為に、少しでも役  
 立つならば先生を私<sup>わたくし</sup>することにならなくなると信じます。またここにお集まりの皆  
 様がおのおのの立場において日本が真理に従う国となる為に努力なされるならば、山形  
 まで御出<sup>おいで</sup>下さった先生の<sup>むくい</sup>労に、報ゆることが出来ると思ひます。

私共は宗教教育を一生懸命に行うと共に真理の尊厳<sup>そんげん</sup>を教<sup>お</sup>えて、大方<sup>おおかた</sup><sup>(113)</sup>の御好意<sup>ご</sup>に  
 応じたいと切に願<sup>お</sup>って居ります。

(「独立時報」第 23 号、1956 年)

## 7-3-20 罪の恐ろしさ

罪の恐ろしいのはそれが知れわたって人々から批難ひなんされるからではない。あらわれて罰せられなくとも、罪はその犯した人をむしばむ恐ろしいものである。イエス様も「口に入るものは人を汚けがすことはない、却かえって口から出るものが人を汚けがすのである。」と仰おっしゃって、なお説明なさって

口に入ってくるものは皆腹みなの中に入り、そして外へ出て行くことを知らないのか。しかし口から出て行くものは心から出てくるものであってそれが人を汚けがすのである。というのは悪い思い即すなわち殺人、姦淫かんいん、不品行ぎしょう、盗み、偽証ごし、誹りそしは心の中から出てくるのであって、これらのものが人を汚けがすのである。

(マタイ伝 15 章 17 節以下)

と仰おっしゃって居られる。罪が人を汚けがすのである。罪は人格を滅ぼしてしまうから恐ろしいのである。罪が人を地獄に落とすから恐ろしいという表現は幼稚に見えるかも知れないが、罪に対して誤あやまった考えを持っている現代人の考えより遥かに正しい。盗まれた人の損害は盗まれた物だけに限られたかが知れているが、盗んだ人は盗んで得た物等と比較にならない大きな害を自己という人格に与える。ここに罪の恐ろしさがある。これがわかれば今日の社会に普通行われている内緒こんじちのこと、隠そうとすることがなくなり、どれだけ世の中が明るくなるか知れない。罪はそれに付け加えて虚偽きよぎという罪を重ねる。小さな罪が次第に大きな罪になって行くことも罪の恐ろしさを大きくする。

この罪の恐ろしさが気づかれない所に日本の社会の欠陥けっかんがある。正しい信仰が伝わり難い原因がある。正義なる神を知ると罪の恐ろしさがわかり、また罪の恐ろしさがわかれば神の實在たもし給うことがわかる。罪の恐ろしさを知って真剣に罪より逃れようとする時、罪の赦ゆるしの十字架の福音ふくいんがわかる。イエス様を十字架にかけて我を救って下さる神の愛がわかる。恐ろしい罪より救われる道は、人間的には愚かに見える十字架の福音ふくいんより他にない。

罪を罰するのは報復の為ではない。罪の恐ろしさを知らせる為の愛の答むちである。罪と血みどろの戦いをさせ給う為に神は苦難たまを与え給う。ヘブル書の 12 章 4 節以下に

あなたがたは罪と取り組んで戦う時まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない。又子たちに対するように貴方がたに語られたこの勧めの言葉すすを忘れていない、「私の子よ、主の訓練しゅを軽んじてはいけない。主に責められる時弱り果てては

ならない。主は愛するものを訓練し、受入れるすべての子を笞打たれるのである。」あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として取扱っておられるのである。いったい父に訓練されない子があるだろうか。誰でも受ける訓練があなたがたに与えられないとすれば、それこそあなたがたは私生子<sup>(114)</sup>であってほんとうの子ではない。

とある。神は愛する者を笞打ち給う。私達も愛すればこそ罪より逃れて貰いたい為に罰するのである。自分ばかり罰せられると考えたりしてはならない。罪の恐ろしさを知ってこれより逃れようと一生懸命になって欲しい。私たちは罪は憎むけれど罪を犯した人をば憎まない。共に手を取りあって罪より救われようとしている。罪を悔い改めて神の御前に謙遜な心を持つ人はむしろ尊敬する。

近頃私達の間で起こった悲しい出来事も私達の間から罪を除く為に役立つなら神の恩恵である。皆で力をあわせて罪より逃れるように一生懸命になろう。自分の力で罪に勝とうとしても失敗する。私達を救う為に十字架にかかって下さったイエス様を仰ぎ見、よりすがろう。罪に打ち勝つ道は他にはない。

(「独立時報」第 27 号、1957 年)

7-3-21 献堂<sup>けんどう</sup>について～献堂<sup>けんどう</sup>の祈り<sup>(115)</sup>

神は万物<sup>ばんぶつ</sup>を造り<sup>つく</sup>給<sup>たま</sup>いてこれを御旨<sup>みむね</sup>のままに支配<sup>たも</sup>してい給<sup>たま</sup>うのである。それ故<sup>ゆえ</sup>神<sup>さき</sup>に献<sup>さき</sup>げるとい<sup>さき</sup>うことは、それ自身<sup>みむね</sup>意味<sup>たも</sup>のないことである。献<sup>さき</sup>げても献<sup>さき</sup>げなくとも神<sup>さき</sup>はこれ<sup>さき</sup>を御<sup>ご</sup>自<sup>み</sup>分<sup>むね</sup>のものとして御旨<sup>たも</sup>のままに使用<sup>たも</sup>し給<sup>たま</sup>うのである。しかし人<sup>たも</sup>の側<sup>さき</sup>からこの<sup>さき</sup>ことを自<sup>ご</sup>覚<sup>よう</sup>して進<sup>さき</sup>んですべ<sup>さき</sup>てを献<sup>さき</sup>げて神<sup>さき</sup>の器<sup>ごよう</sup>として神<sup>さき</sup>の御<sup>ご</sup>用<sup>よう</sup>に立<sup>さき</sup>たせてい<sup>さき</sup>ただ<sup>さき</sup>くことは<sup>さき</sup>美<sup>う</sup>わしいこと<sup>さき</sup>であり、神<sup>たも</sup>の喜<sup>たも</sup>び給<sup>たま</sup>うことである。この意味<sup>さき</sup>でこの新<sup>さき</sup>たに出来<sup>さき</sup>上がった校<sup>さき</sup>舎<sup>ごよう</sup>を神<sup>さき</sup>に献<sup>さき</sup>げ神<sup>さき</sup>の御<sup>ご</sup>用<sup>よう</sup>に立<sup>さき</sup>たせてい<sup>さき</sup>ただ<sup>さき</sup>こうとしてい<sup>さき</sup>るのである。ここに献<sup>けん</sup>堂<sup>どう</sup>式<sup>しだい</sup>を行<sup>さき</sup>いこの決<sup>し</sup>意<sup>だ</sup>を新<sup>さき</sup>たにする次第<sup>しだい</sup>である。

聖書<sup>せいしょ</sup>に「家造<sup>かぞ</sup>りらの捨<sup>す</sup>てた石<sup>いし</sup>が隅<sup>すみ</sup>のかしら石<sup>いし</sup>とな<sup>な</sup>った。」とい<sup>い</sup>うこと<sup>な</sup>がある。神<sup>たも</sup>は人<sup>な</sup>に知<sup>たも</sup>られない片<sup>かた</sup>隅<sup>すみ</sup>のつま<sup>な</sup>らないもの<sup>たも</sup>を用<sup>な</sup>いて大<sup>な</sup>きなこ<sup>な</sup>とを為<sup>な</sup>し給<sup>たま</sup>う。イエス様<sup>たも</sup>も当<sup>な</sup>時<sup>たも</sup>の世界<sup>な</sup>の中心<sup>な</sup>のローマ<sup>な</sup>でなく<sup>な</sup>て、片<sup>かた</sup>隅<sup>すみ</sup>のユダヤ<sup>かたすみ</sup>の国<sup>かたすみ</sup>のそ<sup>な</sup>のまた片<sup>かた</sup>隅<sup>すみ</sup>のベツレヘム<sup>かたすみ</sup>で生<sup>な</sup>まれ給<sup>たま</sup>うた。キリスト教<sup>たも</sup>が世界<sup>たも</sup>に拡<sup>ひろ</sup>がるた<sup>たも</sup>めに一<sup>な</sup>番<sup>な</sup>役<sup>な</sup>立<sup>な</sup>ったのは、アンティオキア<sup>な</sup>教会<sup>な</sup>であ<sup>な</sup>って中心<sup>な</sup>のエルサレム<sup>な</sup>教会<sup>な</sup>ではな<sup>な</sup>かった。社会<sup>な</sup>がよ<sup>な</sup>くなる為<sup>な</sup>には世<sup>な</sup>に知<sup>な</sup>られない、縁<sup>えん</sup>の下<sup>な</sup>の力<sup>な</sup>持<sup>な</sup>ちのよ<sup>な</sup>うな<sup>な</sup>もの<sup>な</sup>が必要<sup>な</sup>である。この小<sup>な</sup>きな学<sup>な</sup>校<sup>な</sup>が隅<sup>すみ</sup>のかしら石<sup>いし</sup>の一<sup>な</sup>つとな<sup>な</sup>って神<sup>さき</sup>の御<sup>ご</sup>用<sup>よう</sup>にた<sup>さき</sup>ち得<sup>さき</sup>るよ<sup>さき</sup>うに神<sup>さき</sup>に献<sup>さき</sup>げるのである。神<sup>さき</sup>に献<sup>さき</sup>げる時<sup>さき</sup>にはその力<sup>さき</sup>以上<sup>さき</sup>の大<sup>さき</sup>きなこ<sup>さき</sup>が出来<sup>さき</sup>る。

新<sup>しん</sup>しい校<sup>しゆ</sup>舎<sup>しやう</sup>が多<sup>い</sup>くの人の愛<sup>い</sup>によ<sup>い</sup>って出来<sup>い</sup>た。始<sup>い</sup>めに静<sup>い</sup>岡<sup>せ</sup>の方<sup>かた</sup><sup>(116)</sup>が主<sup>しゆ</sup>唱<sup>しやう</sup>され<sup>い</sup>て一<sup>い</sup>石<sup>い</sup>献<sup>い</sup>金<sup>せき</sup>の会<sup>かい</sup>が出来<sup>い</sup>、次<sup>い</sup>に山<sup>ほ</sup>形<sup>き</sup>に募<sup>ほ</sup>金<sup>き</sup>発<sup>ほ</sup>起<sup>き</sup>人<sup>にん</sup>会<sup>かい</sup>が出来<sup>い</sup>、また東<sup>あ</sup>京<sup>が</sup>後<sup>が</sup>援<sup>が</sup>会<sup>かい</sup>が出来<sup>い</sup>まして多<sup>あ</sup>くの方<sup>が</sup>が寄<sup>あ</sup>附<sup>が</sup>して下<sup>あ</sup>さ<sup>が</sup>った。寄<sup>あ</sup>附<sup>が</sup>金<sup>が</sup>そのものも有<sup>あ</sup>り難<sup>が</sup>いが、それと共<sup>あ</sup>によ<sup>あ</sup>せられた愛<sup>あ</sup>がよ<sup>あ</sup>り難<sup>あ</sup>いのである。寄<sup>あ</sup>附<sup>あ</sup>金<sup>あ</sup>は足<sup>あ</sup>りな<sup>あ</sup>かったが必<sup>あ</sup>要<sup>あ</sup>なもの<sup>あ</sup>が次<sup>あ</sup>々<sup>あ</sup>に与<sup>あ</sup>えられてこ<sup>あ</sup>こに完<sup>あ</sup>成<sup>あ</sup>を見る<sup>あ</sup>に至<sup>あ</sup>ったのはこの愛<sup>あ</sup>によ<sup>あ</sup>る祈<sup>あ</sup>りに支<sup>あ</sup>えられてである。愛<sup>あ</sup>は金<sup>あ</sup>銭<sup>あ</sup>以上<sup>あ</sup>のこ<sup>あ</sup>とをす<sup>あ</sup>る。また羽<sup>は</sup>田<sup>だ</sup>建<sup>は</sup>築<sup>だ</sup>事<sup>は</sup>務<sup>だ</sup>所<sup>じよ</sup><sup>(117)</sup>では無<sup>は</sup>料<sup>だ</sup>で設<sup>は</sup>計<sup>だ</sup>して下<sup>は</sup>さ<sup>は</sup>った。請<sup>う</sup>負<sup>け</sup>者<sup>お</sup>佐<sup>う</sup>藤<sup>け</sup>工<sup>お</sup>業<sup>い</sup>、金<sup>う</sup>田<sup>け</sup>建<sup>お</sup>設<sup>い</sup>は営<sup>う</sup>利<sup>け</sup>を離<sup>お</sup>れて奉<sup>う</sup>仕<sup>け</sup>的<sup>お</sup>にや<sup>う</sup>って下<sup>う</sup>さ<sup>う</sup>った。これ<sup>う</sup>まで出来<sup>う</sup>れば予<sup>う</sup>定<sup>け</sup>の二<sup>う</sup>階<sup>け</sup><sup>(118)</sup>も講<sup>う</sup>堂<sup>け</sup>も比<sup>う</sup>較<sup>け</sup>的<sup>お</sup>容<sup>う</sup>易<sup>け</sup>に与<sup>う</sup>えられ<sup>う</sup>ると思<sup>う</sup>う。また多<sup>う</sup>くの愛<sup>う</sup>に支<sup>う</sup>えられてい<sup>う</sup>るので、献<sup>う</sup>堂<sup>け</sup>の精<sup>う</sup>神<sup>け</sup>から離<sup>う</sup>れるこ<sup>う</sup>となくや<sup>う</sup>って行<sup>う</sup>けるよ<sup>う</sup>に護<sup>う</sup>られ<sup>う</sup>ると信<sup>う</sup>ずる。新<sup>う</sup>校<sup>す</sup>舎<sup>み</sup>の隅<sup>す</sup>のかしら石<sup>いし</sup>に多<sup>い</sup>くの愛<sup>い</sup>によ<sup>い</sup>ってと附<sup>い</sup>け加<sup>い</sup>えられてい<sup>い</sup>るが、これ<sup>い</sup>が私<sup>い</sup>共<sup>い</sup>にと<sup>い</sup>って何<sup>い</sup>よりの宝<sup>い</sup>である。

御<sup>み</sup>旨<sup>むね</sup>にか<sup>み</sup>ない、多<sup>み</sup>くの愛<sup>そ</sup>に背<sup>そ</sup>か<sup>む</sup>ないよ<sup>そ</sup>うにして行<sup>そ</sup>くこ<sup>そ</sup>とは困<sup>そ</sup>難<sup>む</sup>なこ<sup>そ</sup>とである。し<sup>そ</sup>かし常<sup>へん</sup>に詩<sup>へん</sup>篇<sup>へん</sup> 121 篇<sup>ごと</sup>にある如<sup>へん</sup>く、最<sup>へん</sup>も確<sup>へん</sup>かな助<sup>へん</sup>け手<sup>ごと</sup>でいら<sup>へん</sup>っし<sup>へん</sup>やる神<sup>へん</sup>を見<sup>へん</sup>上<sup>へん</sup>げて神<sup>へん</sup>の御<sup>お</sup>護<sup>まも</sup>り<sup>も</sup>の下<sup>も</sup>にあるならば、弱<sup>お</sup>き私<sup>も</sup>共<sup>も</sup>にもこ<sup>お</sup>れが出来<sup>お</sup>ると信<sup>お</sup>じ、大<sup>お</sup>いなる決<sup>お</sup>意<sup>お</sup>をも<sup>お</sup>ってこの新<sup>お</sup>しい校<sup>お</sup>舎<sup>お</sup>を神<sup>お</sup>に献<sup>お</sup>げる。

けんどう  
献堂の祈り

天地万物の造り主に在しました我ら一人一人の父なる真の御神様、今この多くの方の愛によって出来ました新しい校舎を貴方に献げます。どうかこれを貴方のものとして聖め、御旨のままに用い給わんことを祈り奉ります。

貴方はつまらないものでも用いて大きなことをさせ給います。どうかこの小さな校舎が貴方の大きな御役に立ちますよう、隅のかしら石の一つとなることが出来ますよう御護り下さい。これを自分達のものであるかの如く考えて御旨に反するようを使うことはありませんようお護り下さい。人の目に美わしく使うことなく貴方に喜ばれるように使うことが出来ますよう。常に貴方を見上げ、貴方の御導きの下にすべてをなして行くことが出来ますよう。どうかここにおいて貴方の最も喜び給う信仰が第一に学ばれますよう。どうかここにおいて真の真理が学ばれますよう。そしてここで学びました者が真理に従って生活するものとなりますようお護り下さい。私共の為に多くの愛を注いで下さった方々に貴方の御祝福を豊かにして下さらんことをお願い致します。私共を今日まで御導き下さいましたことを感謝し奉ります。

この足らざる献堂の祈りを、我らの救い主イエス・キリストの御名によって捧げ奉ります。アーメン。

(「独立時報」28号、1957年)

7-3-22 卒業生<sup>(119)</sup>を送る

今学年は外形的にも内面的にも多事<sup>たじ</sup>であったので、何だか十分な教育がしてあげられなかった様な気がする。それで卒業式<sup>ふさわ</sup>に相応しくないかも知れないが信仰の根本について語る。

価<sup>あたい</sup>なくして神の恵によりキリスト・イエスによる贖<sup>あがない</sup>によって義<sup>ぎ</sup>とされるのである。

(ロマ書 3 章 24 節)

「信ずると救われる」というと何かある代価<sup>だい か</sup>を払って、その反対給付として救いを受ける事と考えられ易い<sup>やす</sup>。インチキ宗教では教団に入会し会費を払うとそれに対して利益を約束する。インチキでない宗教では良い行為をするとその酬<sup>むく</sup>いとして救われると教える。仏教では善根<sup>ぜんこん</sup>をつめと言う。旧約聖書もそうであって、律法を守る事によって義<sup>ぎ</sup>とせられると教えている。しかし律法を完全に行う事は出来ないので、救い主待望と言う事が旧約聖書を一貫<sup>いっかん</sup>した精神となっている。イエス・キリストによってこの待望が満たされたのであって、キリストは私共の代わりに十字架の苦しみを受けて私共を罪より贖<sup>あがな</sup>い出して下さった。キリストの十字架という歴史的事実によってすべての人が救われたのである。信ずるという事は、この事を素直に受けることである。信じないのは、救ってくれる等といってもそれでは余<sup>あま</sup>り話がうますぎるからと言って救いの手を押しつける事である。それ故救いは神の恩恵<sup>おんけい</sup>として価<sup>あたい</sup>なくして受けるのである。人間の側<sup>せう</sup>の善行<sup>ぜんこう</sup>によらない。信仰の行為によってその反対給付として救われるのではない。私は悪人で信ずる資格がないという人があるが、それはこの事を知らない言<sup>ことば</sup>である。信ずるのには資格は要らない。そこには何らの差別もない。どんな人でも救われているのである。ただ人はその事を知らないで苦しんでいる。伝道とは救われている事を知らせることである。諸君はこれから人生の旅路<sup>たびじ</sup>に乗り出して行って種々の経験<sup>しゅじゅ</sup>をするであろう。ある時には自己に失望する。その時に失望に終わらないで自分の救いは既に二千年前にイエス様の十字架によって完成している事を思い出して欲しい。絶望より希望に移る道が開かれている。人生の危機において諸君を救ってくれるものはこの信仰である。どうか卒業するに当たってこの事だけは胸にしまっていたきたい。これさえもっていつてくれるなら、諸君を社会に送り出しても安心である。

(「独立時報」第 29 号、1958 年)

## 7-3-23 回顧十年

この小さな学校が十年続いて来ました。神に頼る他は、何も頼るものがない学校であります。多くの方が何か有力な後援団体があるのかと思っていました。しかし、信仰の友人が神に祈って下さる以外には何もありませんでした。経済的支持物もありませんでした。職員一同が耐乏生活を覚悟して居りますので、経済的事由によっては仲々つぶれませんでしょうが、実に弱い存在であります。一寸指で押せば倒れそうなものであります。例えば私が病気でたおれてもつぶれてしまいます。私でなく榎本先生<sup>(120)</sup>がたおれてもつぶれてしまいます。こんな偶発的なことで倒れないようなものに早くしたいと思って居りますが仲々思うようになりません。

それなのにこれが十年続いたのであります。「二羽の雀は一アサリオンで売られているではないか。しかもあなたがたの父の許しがないければその一羽も地に落ちることはない。」<sup>(121)</sup>とイエス様も仰いました。父なる神に護られて今日まで続いて来ました。吹けば飛ぶような存在であっても、神が護り給うならばいくらつぶそうとしてもつぶれませぬ。我々のこの学校が十年続いたことは神が生きて居給う一つの証拠であります。今にもつぶれそうなこの学校が十年続いたことは「それは主がなされたことで、私たちの目には不思議に見える。」ことであります。多くの困難がありました。不思議にそれらに打ち勝って来ました。外部からの圧力に抵抗することは比較的容易であります。一番恐ろしいのは私共が墮落することです。内から崩れることです。最大の困難は近頃ジャーナリズムに乗せられて、世間からもはやされたことです。これは私共の墮落の大きな危険をはらんで居りました。しかしこれにも地上のものを見ずに天上のものを見上げることによって打ち勝つことが出来ました。多くの愛によって新校舎が与えられた昨年度が、教育という本来の使命から見て一番失敗の多かった年でありました。しかし失敗によって一層上を仰ぎ見ることが出来ました。一層神によりすぎるようになりました。何事をするにも同じであります。最もよい運営法は神に頼ることです。現世的なものはいくら確かなようでも駄目です。不確かのようにも最も確かなことは、目に見えないける神に頼ることです。

理事や監事の方々は経済的支援が出来なくて残念だと申して居られますが、全能に在し給う神に祈って下さるに勝る支援はありません。私共は最もよき後援者達を持っていたのであります。この故に十年続いて来る事が出来たのであります。役員諸兄<sup>(122)</sup>に心より御礼申し上げます。

予言者サムエル<sup>(123)</sup>がペリシテ人の侵略を防いだ時に、一つの石をたてて助けの石（エベン・エゼル）と名づけ、エホバこれまで我らを助け給えり<sup>(124)</sup>と申しました。

私共にとり毎日毎日が心の中にエベン・エゼルを立てる日であります。昨年の記念日にもエベン・エゼルを心の中に立てて神の御助けを感謝致したました。この十周年に当たっても、サムエルにならってエベン・エゼルを立て、これまでエホバ我らを助け給えりと神に感謝致したます。

（「独立時報」第 30 号、1958 年）

## 7-3-24 開拓者精神

人には安易<sup>あんい</sup>を求める傾向がある。他の人が苦心して築いた土台の上に立って、楽をしようとする。他の人がやって成功したことを真似たがる。有名大学に入り、官庁<sup>(125)</sup>とか大会社に就職したがるのもこの傾向の為である。今日の入学難、就職難もこの為である。基督教の中にあっても他人が開拓伝道をした後に行き、既に信仰に入った人を自分の教会に引き入れようとするのがよく行われる。

基督教の精神がほんとにわかればこのようなことはない。使徒パウロは「私の望んだところは、他人の土台の上に建てることをしないで、キリストの御名がまだ唱えられていない所に福音を宣べ伝えることであつた。」(ロマ書 15 章 20 節)といっている。この他人の土台の上に建てることをしないという精神はほんとうに貴いものである。この精神があつたからパウロがあのような健全な信仰を持てたのである。

この世的な目に見える成功を欲しないで、神の御前に立派な生涯を送ろうとする者は成功をあせらない。成功するしないは問題でない。如何に生きるかということが大切である。如何なる生涯を送ろうかと真剣になる。自分の天職は何であろうか。自分は何の為に生まれて来たのだろうかと言ふと真剣に反省する。

如何につまらない存在であろうとも神に創造されたものである。自分が生まれて来たのはそれだけの理由があり、目的がある。他の人で代用されない天職がある。それを発見しその為に一生懸命働いてこそ初めて生まれて来た甲斐がある。手っ取り早い成功を求めて他人の真似をし、他人の築いた土台を横取りするようなことはその他人を傷つけるだけでなく、自分を殺すことであり自分の生涯を台なしにすることである。

どんなに小さいことでも、他人のやらないことをやって初めて生き甲斐がある。他の人の土台の上に建てないこと、人の真似をしないで新しい分野を切り開いて行くことが、真の意味の開拓者精神である。これによって人類の進歩が行われる。

多くの方は田舎から都会に出る。しかし私は反対に東京から田舎に来た。私の事業は少しも成功しなくとも私は人のやらないことをしただけでも満足である。

開拓者精神に燃えている人を待っている仕事<sup>たくさん</sup>が沢山ある。開拓者精神があるならば農村<sup>じ</sup>の二、三男問題<sup>(126)</sup>等は問題でなくなる。これからの農村を向上させる為の仕事<sup>たくさん</sup>が沢山ある。土地を所有しなくとも出来る仕事を開拓して行くのである。

二、三年生は北海道へ修学旅行に行った<sup>(127)</sup>。北海道は日本の中で最も開拓者精神に富んだ所である。開拓者精神の一端に触れて来た訳である。生徒諸君は一層開拓者精神を培って諸君の生涯を勇ましい高尚なもの<sup>(128)</sup>にして欲しい。

(「独立時報」第 31 号、1958 年)

## 7-3-25 クリスマスの意義

クリスマスを迎えて感謝と喜びに溢れる。失敗もし、苦しいこともあったが、信仰をもってこの一年を生きて来て、一層神の生きて居給うことを体験した。そして神が私達の罪を贖う為に御子をこの地上に降誕せしめ給うたこの記念の日を迎えて喜びに溢れるのである。

マルクス論者は信仰も観念論だといって排撃する。しかし真のキリスト教の信仰は観念論ではない。最も具体性を持った客観的なものである。私達の信仰は宗教家の空想ではない。学者の空想でもない。神の御子が人間の形をとってこの世に生まれ給うて、私達と同じようにこの大地を踏まれたことを事実だと信ずるものである。ここにクリスマスの重要な意義がある。クリスマスによって神と人との関係が具体化されたのである。神が単なる自然の力ではなくて、ペルソナ（人格）を持った方で宇宙の完成の為に今もなお働き給うている。そして御子を降誕せしめ給うて人類救済の大事業を完成し給うたのである。

神の生きてい給うこと、神が愛で在し給うこと、これらは私達の内なる光によって示されることであるが、これは内面的であり、主観的である。これが客観的であり歴史的事実であることを示すものがクリスマスという今より二千年前に起こった歴史的事実である。これがクリスマスの重要な意義である。それだからこそ聖書にもカエサル・アウグストゥス<sup>(129)</sup>の時の人口調査の時に生まれ給うたので、これはキリニウス<sup>(130)</sup>がシリアの総督<sup>(131)</sup>だった時の最初の人口調査だと明らかに記してあるので<sup>(132)</sup>。私達の持つ喜びや希望が単なる夢想ではなくて、しっかりとした根拠があることを具体的に現すものがクリスマスである。私達の信仰はクリスマスという歴史的事実に基づく信仰である。

（「独立時報」第 32 号、1959 年）

7-3-26 卒業生<sup>(133)</sup>を送る辞<sup>じ</sup>

今日ここに 17 名の卒業生を社会に送り出し、これから先のその生涯<sup>しょうがい</sup>をすべて主に  
 委ね<sup>ゆだ</sup>奉<sup>たてまつ</sup>るに当たり、心に浮かぶ御言<sup>みことば</sup>はヘブル書 12 章の

主<sup>しゅ</sup>は愛する者を訓練し、  
 受け入れるすべての子を  
 むち打たれるのである。

というのである。社会に出てこれから先の長い生涯<sup>しょうがい</sup>を送って行く時に必ず多くの苦  
 しみに出会う。何の為にこんな苦しみがあるのだろうかと思<sup>わづら</sup>い煩<sup>わづら</sup>う時が来る。

しかし、私達をこの上なく愛して下さっている神様は、いつも護<sup>まも</sup>っていて下さり、  
 私達に一番よいようにして下さっているのである。私達を苦しみにあわせ給<sup>たま</sup>うのは、  
 私達を訓練<sup>み</sup>して御心<sup>かな</sup>に適<sup>きよ</sup>うような聖<sup>きよ</sup>い正<sup>きよ</sup>しい者として下さる為である。主<sup>しゅ</sup>は私達を愛  
 するが故<sup>ゆえ</sup>に苦しみを与えて下さるのである。私達が苦しみにあい、悩<sup>しゅ</sup>むのは、主<sup>しゅ</sup>  
 が愛して下さる証拠である。子として受け入れて下さっているからである。このこ  
 とをはっきりとこの御言<sup>みことば</sup>が教えてくれている。訓練はその時は喜ばしいものとは思  
 われない。しかし苦しみの中にあっても、主<sup>しゅ</sup>に愛されているのだと思うと苦しみに耐え  
 る力が出て来る。苦しみと闘<sup>しゅ</sup>うのに目標が示され、勇気が出て来る。そして主イエス  
 を仰<sup>あお</sup>ぎ見<sup>よ</sup>つつ、主イエスに依<sup>しゅ</sup>りすがって闘<sup>よ</sup>うことが出来る。卒業生諸君が、イエス様  
 に依<sup>よ</sup>りすがってくれさえすれば安心である。主<sup>しゅ</sup>はすべてを善<sup>よ</sup>きに導<sup>たま</sup>き給<sup>たま</sup>う。どんな  
 に社会<sup>あらかみ</sup>の荒海に出しても安心出来る。どうかこの御言<sup>みことば</sup>を常<sup>とど</sup>に心に留<sup>とど</sup>めていただき  
 たい。苦しみに遭<sup>あ</sup>えば遭<sup>あ</sup>う程、悩<sup>しゅ</sup>めば悩<sup>しゅ</sup>む程主<sup>しゅ</sup>が愛して下さっているのだというこ  
 とを、思い出して苦しみに打ち勝<sup>しゅ</sup>って下さい。

主<sup>しゅ</sup>は愛する者を訓練し  
 受け入れるすべての子を  
 むち打たれるのである。

と、何と慰<sup>なぐさ</sup>め多い御言<sup>みことば</sup>ではないか。

(「独立時報」第 33 号、1959 年)

## 7-3-27 11周年記念式

詩篇 121 篇<sup>(134)</sup> (私訳)

都もうでの歌

私はあの山々に向かって目を上げる  
 わが助けはどこから来るであろうか  
 わが助けは天と地の造り主であるヤーウェから来る  
 彼はあなたの足の動かされるのを許し給わない  
 あなたを守る者はまどろむことがない  
 見よイスラエルを守る者はまどろむこともなく眠ることもない  
 ヤーウェはあなたを守る者  
 ヤーウェはあなたの右の手をおおう陰である。  
 昼は日があなただを撃つことなく  
 夜は月があなただを撃つことはない  
 ヤーウェはあなたを守ってすべての災いを免れさせ  
 またあなたの魂を守り給う  
 ヤーウェは今からとこしえに至るまで  
 あなたの出ると入るとを守り給うであろう

私達の学校が創立されてから満 11 年たちました。この間、多くの困難がありましたが、不思議に守られて来ることが出来ました。誠に「わが助けは天と地の造り主であるヤーウェから来る」でありました。天地の造り主なる神に守っていただくに優る幸福はありません。神は私達が眠っている時でも眠らずに守っていて下さいます。私達の想像を越えた方法をもって、常に私達をあらゆる災いから守って下さいます。そしてこの小さな学校が 11 年守られて来ましたが、神のこの大いなるお守りの一つの証拠であります。神が実在し給うかどうか、神が愛で在し給うかどうかはただ考えて居ってはわかりません。実在し給うようにも思えるし、存在しないようにも思われます。しかし神にすべてを委ねて、現実に人生を生きて見ると、はっきりと神が在し給うことがわかります。神が、私達の髪の毛の数まで知っていて給う神が守って下さっていることがわかります。「見よ、イスラエルを守る者はまどろむこともなく眠ることもない。」と最大の確信をもっていうことが出来ます。過ぎ去った 11 年を振り返ってみると、ただただ感謝に溢るるばかりであります。そして過去 11 年間お守り下さった神はこれからも必ず守って下さるという確信が湧き上がって参ります。「ヤーウェは今からとこしえに至るまで、あなたの出ると入るとを守り給うであ

ろう。」とある如くであります。スミルナ<sup>(135)</sup>の殉教者ポリュカルポス<sup>(136)</sup>は、過去 80 年間愛して下さった主にどうして背くことが出来ようかといって殉教の死を遂げました。神が愛して下さったという事実が彼をあの如くに強く致しました。11 年間守って下さったという事実が、私達に希望と勇気とを与えます。11 年を終えて 12 年目に入るに当たって、否来る年も来る年も新しい希望と勇気とをもって前進して行きたいと思ひます。

(「独立時報」第 34 号、1959 年)

## 7-3-28 夢想ではない

8月が近くなると原爆を記念する為に平和運動がさかんになる。しかし政治家はこれを見捨てて戦争準備に一生懸命である。政治家は平和主義等は宗教家の夢想に過ぎない。現実には国を護ることが必要であるといっている、果たして国を護ることが出来るかどうかはわからない軍備に夢中になっている。

平和主義が果たして宗教家の夢想であって、軍備をすることが確実なる国を護る方法であるかどうか反省してみる必要がある。戸締りをしない家はないとか、軍備のない独立国家はない等という議論で片づけてしまってはならない。戸締りが必要だとしても軍備が戸締りの役をするかどうか検討しなければならない。戸締りをしたつもりで居て実は戸を開け放って入口に刀でも吊るしてこれで泥棒は入らないと安心して居るようなものかも知れない。強い軍備を持った国が長く栄えるかどうか歴史を振り返って見る必要がある。ローマ帝国のような軍隊の力で維持されて来た国は決して国家の在るべき形ではない。ローマ皇帝は何時誰かに殺されて帝位を奪われるかわからないといわれていたが、これは決して健全な国家の姿ではない。昔から軍隊の力で短期間に強大になった国程早く亡びている。バビロンやアッシリアの昔からナポレオンやヒトラー<sup>(137)</sup>や東条<sup>(138)</sup>の近代に至るまでこれには例外がない。それなのにどうして政治家は軍備をしようとするのか、愚かにも程がある。決して平和主義は宗教家の夢想ではない。現実には世界に行われている真理である。

今日は共産主義を防ぐ為に軍備が必要であるといっている、政治家は軍備をしようとしている。無数の戦死者戦災死亡者の犠牲、寡婦や孤児の涙によって購われた貴い平和憲法をも捨て去ろうとしている。共産主義者が暴力革命の夢を捨てきれないでいることは残念であるが、暴力では大したことは出来ない。帝政ロシア<sup>(139)</sup>の没落は、暴力革命の為にというよりは内部の腐敗の為にであることは明らかである。そして共産主義者も暴力の無力を悟りつつある。共産主義者の暴力はそんなに恐れるには当たらない。それよりも、軍備の為に富の偏在<sup>(140)</sup>が生じ、社会不安が起こることが共産主義の拡大の原因になる。今日の軍備は共産主義を防ぐ為には役立たず、却って助長する。日中戦争<sup>(141)</sup>、大東亜戦争が防共の戦争になってしまった。その為に中国まで共産国になってしまったのではないか。この事のわからない政治家は盲目<sup>(142)</sup>であるといわなければならない。軍備等に無駄な金を使わずに、社会保障や産業開発に努力するならば、共産主義等の入り込むすきがなくなり最も賢い防共である。

このように、少し深く反省すれば、平和主義が決して宗教家の夢想でないことが明らかになる。これは宇宙を貫く大きな真理である。これにのっとらなければ国は亡びるのである。その他信仰の真理はすべて現実には世界を動かしている真理である。宗

教家の間だけで通用するものではない。夢想、空想ではなくして最も現実的なものである。

生徒諸君の中には信仰が果たして人生に必要なか、信仰がなくては生きて行けないものかと迷う者もある。しかし宇宙を貫く真理であるが故に、これなしではほんとうに生きることはできない。信仰なしで生きている人は沢山あるようであるが、これらの人はすべて、最後にはある諦めをもって人生を終わる。信仰の真理に外れたら、実は生きて行けないのである。多くの人はいくらかの不正をしなければ生きて行けないように考えているが、実は不正をしては生きて行けないのである。真理に従わなければ生きて行けない。

信仰の真理は現実的なものである。人生に最も大切なものである。

(「独立時報」第 35 号、1959 年)

7-3-29 献堂式<sup>(143)</sup>

ヤハウエが家を建てられるのでなければ  
 建てる者の勤労はむなしい  
 ヤハウエが町を守られるのでなければ  
 守る者のさめているのはむなしい  
 あなたがたが早く起き遅く休み  
 辛苦しんくの糧かてを食べることはむなしいことである  
 ヤハウエはその愛する者に眠っている時にも  
 なくてはならぬものを与えられるからである  
 (詩編 127 篇 1 節、2 節)<sup>(144)</sup>

天地万物ぼんぶつは神のものであります。神はこれを御心みのままに用い給います。神のものでないものはありません。それ故ゆえに神に献ささげるということは無意味であります。私の私有物を王様のような者に献ささげるといのはわかりますが、元来がんらい神のものを神に献ささげるといことは出来ません。神は私達が献ささげても献ささげなくとも、これを御自分ごのものとして御心みのままに用い給います。

それにも拘かかわらず私達は献堂式けんどうを行います。この新たに出来ました二階の講堂を神に献ささげます。これは普通の意味の献堂式ではなくて、この講堂が神のものであるということを確認する事であります。私達はともすると、すべて自分の物のように考えがちであります。その時に献堂式を行って、これが元来がんらい神のものであること、神の御役に立つように使うべきであることを確認する必要があります。これが献堂式けんどうの真の意味であります。

なお献堂式けんどうに当たり感じますことは、2 節にある如くごとに神はなくてならぬものを与え給うということであり、不必要なものを与えられることは却かえって禍わざわいであり、しかし神は愛する者に必要なものを必ず与え給たまいます。与えられないのは必要でないからで、与えられないことが実は神の恩恵おんけいであります。神はすべてを委ねて生きる者には、神は最もよいようにして下さるといふ安心と喜びがあります。一昨年多くの方々の愛によって、地下室と一階が出来て堅固な教室が与えられました。実験室を教室に使用することによって、一応授業はすべて新校舎で行うことが出来まして、私達は感謝あふに溢れたのでありますが、合同授業や朝礼の時せまくて困おって居りました。クリスマスの時等二つの教室を打ち抜いて一つに使ってもせまくて困りました。バラックでもよいから広い講堂が欲しいとは一同の切なる願いでありました。しかし、これがこんなに早く与えられようとは職員も生徒も夢にも思っておりませんでした。

この三月に昨年度の決算を致しましたら 10 万円近い剰余がありました。黒沼先生<sup>(145)</sup>より山形募金会に約 13 万円残金がありますと伺い、30 万円位で出来るなら天井などはなくてもいいから建てようということになり急に計画を始めました。羽田建築事務所の御好意により、二階の設計変更が出来上がり、木材の手配を致しました。その他の資材は神町の小関兄の主にある愛により安く得られました。大工の仕事は卒業生の叔父様が、塗装は菊竹敏光君<sup>(146)</sup>が奉仕的にやって下さいました。それで床と基礎がいらなかったとはいえ 24 坪が 30 万円で天井もはれて立派に出来上がりました。そのうえ黒沼先生が熱心に募金して 10 万円新たに集めて下さいましたので、借り入れ金もせずすみしました。この二階が与えられましたことを振り返ってみますと、ほんとうに神は必要なものを必ず与え給うということを深く感じます。

(注・詩篇の原文には「なくてはならぬもの」という語はなく、文語訳には「眠を<sup>ねむり</sup>与え給う」となっている。眠を<sup>ねむり</sup>与え給う<sup>たま</sup>ということは深い意味があり、私はこの方をとるが「眠を」か「眠っている時にも」かは学者の間に議論のあるところで口語訳では後説をとって「なくてはならぬもの」を付け加えたのでしょう。神がなくてはならぬものを与え給うことは明らかなことなので口語訳によって神の御恩恵を述べました。)

(「独立時報」第 36 号、1959 年)

7-3-30 卒業生<sup>(147)</sup>を送る辞<sup>じ</sup>

エホバ<sup>(148)</sup>はわが<sup>ぼくしや</sup>牧者なり  
 われ<sup>とぼ</sup>乏しきことあらし  
 エホバは我を緑の野にふさせ  
 いこいの水際<sup>みぎわ</sup>に伴い<sup>ともな</sup>給う<sup>たも</sup>  
 エホバはわが<sup>たましい</sup>魂をいかし  
 み名の故<sup>ゆえ</sup>をもて我を正しき道<sup>たも</sup>に導き給う  
 たとえ我死<sup>われ</sup>の蔭<sup>かげ</sup>の谷<sup>か</sup>を歩むとも<sup>わざわい</sup>災<sup>わざわい</sup>を恐れじ  
 なんじ我と共に在<sup>いま</sup>せばなり  
 汝<sup>なんじ</sup>の答<sup>むちなんじ</sup>汝<sup>つえ</sup>の杖<sup>なぐさ</sup>われを慰む  
 汝<sup>なんじ</sup>わが<sup>あだ</sup>仇<sup>えん</sup>の前にわが<sup>えん</sup>為<sup>もう</sup>に宴<sup>えん</sup>を設け  
 わが<sup>こうべ</sup>頭<sup>たも</sup>に油<sup>あぶら</sup>を注ぎ給う  
 わが<sup>さかずき</sup>杯<sup>さかずき</sup>はあふるるなり  
 わが世にあらん限りは必ず  
 恵<sup>あわ</sup>みと憐<sup>あは</sup>れみと我にそい来らん<sup>きた</sup>  
 我は永遠<sup>とこしえ</sup>にエホバの宮<sup>みや</sup>に住まん  
 (詩篇第 23 篇)<sup>(149)</sup>

この詩篇はダビデが少年時代羊を飼っていた頃の<sup>へん</sup>ことを思い出しつつ、神が羊飼いらが羊を守る以上に守って下さっていることを歌ったものである。天地万物の造り主<sup>ばんぶつつくぬし</sup>であるエホバの神に守っていただくに勝る安心はない。決して乏しいことはない。最もよいようにお守り下さる。羊に緑の草とよい水が最も必要である如く、最も必要なものを常に備えて下さる。特に肉体を守って下さる以上に<sup>れいこん</sup>靈魂を守って下さる。神の御心に<sup>みかな</sup>適う正しき道を歩むように守って下さる。その為には時に患難をも与えて私達を鍛えて下さる。死の蔭の谷を歩むような災いにも合わせ給う。神は私達を春の野の緑の草の上にのみ置いて下さるのではない。吹き荒れる嵐の中に立たせ給うこともある。しかし神が共にいて下さるので少しも恐れることはない。神が私達を<sup>いまし</sup>警め給う為の愛の答も、種々の困難な時に支えて下さる杖も、ほんとに私達にとって<sup>なぐさ</sup>慰めである。苦しみの中にあってもなお真の喜びを持つことが出来る。私達の喜びは満ち溢れる。過去においてこのような事実を<sup>たくさん</sup>沢山体験したので、私は永遠にエホバの宮に住まおうという決心が必然的に起こる。

ダビデは長い人生の経験をとおして、苦難の中にも神がお守り下さることを知り、少年時代羊を飼って居った時のことを思い出しつつこの詩篇を作った。今ここに 14

名の卒業生を社会に送り出すに当たって卒業生諸君をこのようにお守り下さるエホバの神の御手に委ね奉る。神は諸君を常に緑の野に伏させ、憩いの水際に伴い下さるであろう。しかしこれは決して諸君の生涯が平穩<sup>(150)</sup>なものであるというのではない。時には死の蔭の谷を歩むようになることもある。しかし真の神に依り頼むなら如何なる苦難にも打ち勝つことができる。神と共に歩む生涯にまさる安心な生涯はない。諸君が神に頼って生きていってくれるなら、安心して諸君を送り出すことが出来る。迷える羊の譬えをイエス様がなされた。迷い出しても、神は手をひろげて待っていて下さる。否、積極的にさがし求めて下さる。どうか迷い出しても、神のふところの外に安らかな所がないことを思い出して一刻も早く帰って欲しい。苦難の中であってなお神の愛を知る所に信仰の偉大さがある。諸君がこれから先の長い生涯において多くの体験をとおして、特に苦難をとおしてこの神の守りを知るであろう。どうかエホバの神が諸君の真の意味の牧者であることを忘れずにこれから先の生涯を生きて行って欲しい。これが諸君を三年間育てた私の切なる願いである。

(「独立時報」第 37 号、1960 年)

7-3-31 火災<sup>(151)</sup>について

火災にあつて第一に心に浮かんだことはルカ伝 13 章の初めにあるイエス様の言<sup>ことば</sup>であつた。イエス様はここでピラトの犠牲<sup>ぎせい</sup>になつたガリラヤ人とシロアムの塔が倒れて死んだ人の例をあげて、これらの人々が特に罪深かつたのではない、人は皆悔い改めなければならないと教えて居られる。この度の火災<sup>たび</sup>でも直接<sup>しつか</sup>の失火者だけの責任ではない。私をはじめ学園の全員の責任である。嘘<sup>うそ</sup>を言った人、学業<sup>なま</sup>を怠けた人、愛の足りなかつた人が焼いたのである。我らの学園が墮落<sup>だらく</sup>して居つたのに対する神の御警告である。火災は多くの悪条件がかさなつて初めて大事になるのであつて、一つの過失だけで起こるものではない。もっとひどい過失でも大事にならないことが沢山ある。すべては神の御旨<sup>みむね</sup>によつて起こるのであるが、これらのことを考えると一層深くこの度の火災<sup>たび</sup>が神の御警告<sup>ご</sup>であることがわかる。我ら全員が各々罪<sup>おのおの</sup>を悔い改めなければならない。

復興<sup>ふっこう</sup>の第一歩は、私たちが神の御前<sup>みまえ</sup>にもつと潔く正しくなることである。多くの方々の物質的<sup>ご</sup>精神的<sup>ご</sup>御援助<sup>ご</sup>によつて外形<sup>がいけいじょう</sup>上<sup>ふっこう</sup>は復興<sup>ふっこう</sup>しつつあるが、まずその前にその愛を受けるに相応<sup>ふさわ</sup>しい者とならなければならない。神の御前に潔く正しくなるとは罪を悔い改めてイエス様の十字架<sup>ご</sup>に寄りすがることである。我らの罪<sup>つぐな</sup>を償<sup>な</sup>う為<sup>ため</sup>に十字架の苦しみを受けて下さつたイエス様を仰ぎ見ることである。これ以外に私達<sup>きよ</sup>の潔くなれる道はない。この事がわかつて私たちの学園がよくなつて行くなら、焼いて失つたものなど少しも惜<sup>お</sup>しくはない。多くの方々に御心配<sup>ご</sup>をかけ御迷惑<sup>ご</sup>をかけたことは誠に申し訳ないが、私達<sup>むく</sup>がよくなつていくならこれらの愛にお報い<sup>むく</sup>することが出来る。私達は真剣<sup>まこと</sup>に反省<sup>おのおのおの</sup>し、各々己<sup>ご</sup>が罪<sup>く</sup>を悟り悔い改めなければならない。

(「独立時報」第 37 号、1960 年)

7-3-32 復興感謝式<sup>(152)</sup>の辞

去る一月私共が大きな過失を犯し多くの方に心配と迷惑とをかけましたにも拘わらず、村の方々を始め多くの方の愛により一時も飢えることも凍えることもなく過ごすことが出来、その上あり余る程お金と物とを与えられまして、ここにこのように立派に復興することが出来ました。村の方々を始め、全国の友人達の愛が如何に大きいかを今更の如く深く知りました。私共にこのような大きな愛を注いで下さった多くの方々と、愛の試練を与えそれと共に逃るべき途を常に供えて下さっている父なる神に心より大きな感謝を捧げます。

物質的にはこのように立派に復興出来ましたが、信仰的に復興することが一層大切であります。私共が神の御前に罪を悔い改め、真に潔く正しくなることがこのように愛を注いで下さった方々への真の御礼であります。私共学園に連なる者は、それぞれの立場において神が与え給うたこの試練の意義を反省し御旨に適う者とならなければなりません。

私自身について一番反省させられることは、私が独立ということ余り固執しすぎるのではないかとあります。独立ということは非常に大切なことでもあります。特に独立の信仰の為にあのような戦いをなされた内村先生に教えられたものとして最も重んずべきことでもあります。この学園の名に独立という語をつけているのもその為であります。独立とは何物にも依り頼まないということではありません。人間的なものに依り頼まないで、神にのみ依り頼むことでもあります。詩篇の31篇の初めの部分は神により頼む事を教えて居ります。人間的なものに依り頼むこと即ち独立を失うことは一種の偶像に依り頼むことでもあります。純粋な信仰を保つには、独立は是非必要であります。人間的なものに依り頼まないことは経済的独立を意味します。信仰的独立が大切であります。経済的独立と信仰的独立とは切り離せません。信仰上の真理は、学問上の真理の如く普遍的な論理によって得られるものではありません。神よりの啓示によります。啓示でないもの、経済的事情によるものを神よりの啓示と思い誤る危険があります。それ故に神のみに依り頼む真の独立が必要であります。

私はこの独立を余り固執する為でありましょう、寄附金を受けること、人の厄介になることが嫌いであり。今度の火災で第一に頭に浮かびましたことは、人に奉仕せんと欲しているのに反対に人の厄介にならなければならないことの幸さでありました。しかし独立を守ることが形式的になってしまつてはなりません。独立を守りさえすればよいと独立のみ考えて神の御旨に従うことを忘れてはなりません。独立を守ることが傲慢になってはいけません。独立を守るということに頼って、神に頼ることを忘れてはなりません。ロマ書においては愛の他何物をも負うなど教えて居ります。

愛は負<sup>お</sup>うべきであります。愛は神から出たものであります（ヨハネ第一書 4 章 7 節）。  
愛を負<sup>お</sup>うは神に依<sup>よ</sup>り頼<sup>たの</sup>むことでもあります。即<sup>すなわ</sup>ち真<sup>ま</sup>の独立<sup>どく</sup>であります。こう考えて心  
より愛を注<sup>つ</sup>いで下さ<sup>くだ</sup>った方々に感謝<sup>かん</sup>出来<sup>こ</sup>ます。愛を負<sup>お</sup>うて益々<sup>ますます</sup>独立<sup>どく</sup>を全<sup>ま</sup>うするこ  
が出来<sup>こ</sup>ます。この度<sup>たび</sup>の火災<sup>むち</sup>という愛の答<sup>こた</sup>はこのことを私に悟<sup>さと</sup>らしめられました。やは  
り神<sup>おほ</sup>の大<sup>おほ</sup>いなる恵<sup>めぐ</sup>みでありました。

心からなる感謝<sup>かん</sup>をもってこの復興<sup>ふっこう</sup>感謝<sup>かん</sup>式<sup>しき</sup>を行<sup>お</sup>い、神と人<sup>ひと</sup>とに復興<sup>ふっこう</sup>の感謝<sup>かん</sup>を捧<sup>た</sup>げます。  
（「独立時報」第 38 号、1960 年）

7-3-33 真の卒業証書<sup>(153)</sup>

<sup>ただいま</sup>只今渡した卒業証書は形式的なものに過ぎない。ほんとの卒業証書は聖書に

あなたがた自分自身が私たちから送られたキリストの手紙であって、<sup>すみ</sup>墨によらず生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく人の心の板に書かれたものである。

(コリント<sup>こうしょ</sup>後書 3 章 3 節)

とある如く<sup>ごと</sup>、卒業生諸君自身である。諸君の心に書かれたもの、<sup>すみ</sup>墨ではなくて生ける神の霊によって書かれたものである。諸君がここで身につけたもの、学んだものが、それが卒業証書である。ここで学んだ真理に従って諸君が生活する時に、初めて諸君がこの卒業生であることがはっきりと現われるのである。独立学園の卒業生は少し違うとって社会から喜ばれているのは、諸君の先輩が心に書かれた卒業証書をちゃんと持っていてくれるからである。

ここで学んだものの内で最大のものは<sup>ゆる</sup>信仰である。罪の赦しの<sup>ふくいん</sup>十字架の福音である。今は充分にわからないでも、この<sup>いか</sup>信仰が如何に有効な卒業証書であるか、これから先諸君が人生の<sup>たびし</sup>旅路を進んで行くに従ってわかってくる。生ける神の霊によって書かれた生きた<sup>ご</sup>信仰である。私達を救う為に御自身の<sup>みこ</sup>御子をさえ<sup>お</sup>惜しまないで死に渡されたその神の愛を信ずる<sup>はげ</sup>信仰である。この神の愛に励まされて他の人を愛するようになる生きた<sup>ゆえ</sup>信仰である。愛を行う故に救われるのではなく、この信仰があるから愛することが出来るのである。信仰は<sup>しゅじゅ</sup>種々な形で現われる。勇氣、忍耐、節制その他種々の形で現われる。しかし愛において最もよく現われる。勇氣も忍耐もすべて愛の形を変えたものといってもよい。

この卒業証書は愛という具体的な生活に現われた生きた信仰である。それでイエス様も

私は新しい<sup>いまし</sup>戒めをあなたがたに与える。互いに愛し合いなさい。私あなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。それによってあなたがたが私の弟子であることをすべての者が認めるであろう。

(ヨハネ伝 13 章 34 節、35 節)

と<sup>おっしや</sup>仰っている。互いに愛し合うなら、それによって諸君がこの学校の卒業生であることを社会が認めるであろう。どうか諸君も紙に書かれた卒業証書でなく、諸君の心

に書かれた真の卒業証書をしっかりと持ってここから巣立って欲しい。  
（「独立時報」第 40 号、1961 年）

## 7-3-34 創立記念式に当たりて

第 13 回創立記念式を迎えることが出来てただ感謝に溢るのみである。自分たちの力でこれまで歩いて来たのではない、その証拠にはこれまで失敗だらけであった。人間的に見るならとつくの昔につぶれてしまっている筈であった。それが今日まで続いて来たのである。「神は我らを生きながらえさせ、我らの足のすべるのを許されない。」(詩篇 66 篇 9 節)とある通りであった。このような小さな学校をも神は支えて下さった。この学校の使命は何であろうか、神は我らに何をなさしめんとし給うのか。

今年は内村先生誕生百年の記念の年である。内村先生の信仰の流れを汲むものとして、先生によって創められた純福音の実証が我らの天職である。形式によらず、霊と真とをもって神を信ずる信仰である。神に依り頼めばどんな人でも立派に信仰を保って行ける。僧職や教会制度等の形式は要らない。共産主義が多く欠陥を持っているにもかかわらず、多くの人を引きつけているのは、人間の平等という点である。しかしこれは物質の平等である。たかが知れている。しかもこれさえうまく行っていない。純粋の信仰により一層大切な霊の平等を教えている。神は人を偏り見給わない。万人を等しく愛し恵み給う。この大きな真理を人々に告げなければならない。

また純福音の信仰は真理であるから、人間的な組織や制度で支えなくともちゃんと存続して行く。科学的真理と同じである。科学的真理が宇宙到る所で行なわれる如く信仰の真理も行なわれる。内村先生の文章に

われわが国を去って他国に行かんか、神かならずそこにあり、われこの地球を去って木星または水星に至らんか、彼かならずそこにあり。彼はオライオン星<sup>(154)</sup>にあり、プライアデス星<sup>(155)</sup>にあり。そして遠くこの宇宙をはなれて他の宇宙に至るもわが父はまたそこにあり云々」

(『一日一生』<sup>(156)</sup>の一月一日)

とある。基督教が真理でないならいつでも捨てる、基督教と真理とどちらをとるかといえば真理をとる。これが内村先生の精神である。

内村先生の没後 30 年、多くの聖書研究の集会と雑誌や著述による伝道で、教会制度によらない信仰が行なわれて来た。万人平等、真理なる信仰が確立されて来た。学校を母体としての信仰も一つの在り方である。無祭司の、あるいは万人祭司の信仰、真理なる信仰を確立することが我々の使命である。

内村先生は神に示されてこの大きな真理を与えられた。これが単に特別な才能を与

えられた偉人だけに可能なのではなくて、万人が、平凡な人が神に頼りすぎるならこれ  
が出来るのである。誰でもこういう信仰を持つことが出来ることを実証することが後  
に残された我らの使命である。この事を思う時に私はいつもリンカーンのゲティス  
バーグの演説<sup>(157)</sup>を思い出す。「我らの前にこれまでかくも貴くすすめられた未完成  
の大事業が」残されている。この為に身も魂も献げることが残された我らのなすべ  
き事である。

少しでも完成に近づけて次の人々に渡すのである。これがこの学校の使命である。  
内村先生誕生百年の年の創立記念式に当たり、神の御護りの下にこの使命が達せられ  
ることを祈る。

(「独立時報」第 41 号、1961 年)

## 7-3-35 一月一日

季節の変化を表す一年という周期が人間の生活に深い関係があることはいうまでもない。一年という単位毎に反省し、計画を立てることは意味がある。年の始めをいつにするかということは古来から行われた暦法<sup>(158)</sup>によって異なるが大体北半球における人間の活動の弱まる冬期を選んでいいる。古い暦で3月を年の始めとしたものも多いようである。第7月という意味のセプテンバーが9月を意味するのはこの名残りである。ユダヤ暦でも3月に当たるニサンの月<sup>(159)</sup>を始めにしている。現在の年の始めはユリウス・カエサル<sup>(160)</sup>の時に近日点<sup>(161)</sup>通過の日としたのであるが、歳差<sup>(162)</sup>という現象の為に春分点<sup>(163)</sup>が移動するのを、いつも3月21日とする為に狂って来て今日では1月3日頃が近日点通過になっている。それで今日では1月1日には何の意味もない、十日位早めて冬至を1月1日にしたらいいという案もある位である。これは特定の日に意味をつけることの無意味なことを示していると思う。

しかし年の始めをいつにしてもよいから一年という区切りをつけて年の始めに希望を新たにすることはよいことである。

今年の新年の集会では皆でイザヤ書 60 章を読みたいと思う。ここの「あなた」は現実のエルサレムを指すのであるが、実はこれをとおして天国における新しいエルサレムの事をいっているのである。地上のエルサレムについて予言されていることは新しきエルサレムにおいて初めて完全に成就するのである。それ故に黙示録 21 章の終わりに 60 章より引用してある。一年一年と時が経つに従って天国が近づくのである。私達の希望が実現されて行く。新しい年を迎える毎に喜びが増す。

また初めの方の「あなた」は私達自身を指すと解してもよい。信仰により私達に真の光が与えられる。また小さな私達の信仰でも、もって神の栄光をあげ奉ることが出来る。「起きよ、光を放て」である。まことにこのイザヤ書 60 章は私達を励まし力づけてくれる。主に力づけられてこの一年の歩みを大きく歩もう。

(「独立時報」第 45 号、1963 年)

7-3-36 卒業式の辞<sup>(164)</sup>

これから渡す卒業証書は形式的のものである。私達の学校のほんとの卒業証書は信仰である。罪の赦しの十字架の福音を信ずる信仰である。この信仰を持って学校を出て、この信仰に立って生きて行って初めてこの学校のほんとの卒業生といえるのである。信仰は強制すべきものではないから形式的な卒業証書は差し上げるが、これだけではほんとの卒業証書とはいえない。

信仰は目に見えないものである。これが愛という目に見える形をとってあらわれて、信仰がほんとのものだったことが明らかになる。「キリスト・イエスにあっては割礼があってもなくても問題ではない。尊いのは愛によって働く信仰だけである。」とガラテヤ書5章6節にある。割礼はユダヤ人たる卒業証書のようなものである。

愛を行うことによって救われるのではない。救われたが故に愛を行いたくなるのである。私達を救って下さる為に御子を犠牲にして下さった神の愛の大きさを知って、その愛に励まされて愛を行うようになるものである。愛という実を結ばない信仰は真の信仰ではない。それは十字架によって現われた神の愛を信ずる信仰ではない。人は元来愛のないものである。愛が行えない為になげく。愛が行えない罪人なる我を救って下さる神の愛の大きさを知って、その愛の千分の一でも万分の一でも行いたくなるのが神の愛を信ずる信仰である。自分の努力によって愛を行うのではなく神に行えるようにしていただくのである。愛が行えないことに気づいたら神により頼るのである。これが信仰の秘訣である。ほんとの卒業生となる秘訣である。

ヨハネ伝 13章 34節、35節に

私は新しい戒をあなたがたに与える。互に愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならばそれによって、あなたがたが私の弟子であることを、すべての者が認めるであろう。

とある。神の愛を信ずる信仰が具体的になったものである愛という卒業証書によって、すべての人があなたがたが基督教独立学園の卒業生であることを認めるであろう。

(「独立時報」第46号、1964年)

## 7-3-37 学問の価値

学問の<sup>とうと</sup>貴さは学問することによって人間が育成されるからである。学問をして真理を<sup>はあく</sup>把握して人格が築き上げられて行くのである。学問は<sup>せんじん</sup>先人の発見した真理の積み重ねられたものである。真理を教えられて人は感激する。私は40年前に内村先生より人生の真理を示されて喜びに<sup>あふ</sup>溢れた。読書のよいのは<sup>せんじん</sup>先人の発見した真理を教えてくれるからである。今の青年は読書を<sup>あま</sup>余りせず、この感激を知らないことは気の毒である。

自然科学の真理でも人間を高める。アルキメデス<sup>(165)</sup>が王冠のような複雑な形の体積を求むる方法を、風呂に入って湯がこぼれたことから発見して裸で、「ユーレカ・ユーレカ<sup>(166)</sup>」(私は発見した。)と叫びながら浴場より帰った話は、<sup>いか</sup>如何に真理の発見が人を喜ばすかをよく現わしている。自然科学の価値はその応用にあるのではない。<sup>こんにち</sup>今日科学の応用がすばらしい成果をあげていて、それが科学の価値のすべてのように考えられているが、科学の応用がもたらす価値は案外小さいものである。時には害毒さえ生ずる。科学の応用の進歩によって人間は幸福になれないといわれている。自然科学の価値も他の学問と同じくそれが真理であって、真理が人間を高めしてくれる点にあるのである。

学問の目的は受験の為でも就職の為でもない。真理を悟って真の喜びを持つ為である。日本においては受験の為、就職の為と考えているから教育が毒され、真の学問が忘れられようとしている。試験はよく出来るが、その学問がよくわかっていないという事態が生じている。ある有名な高等学校で、父親がこの学校では人生の目的についてどう教えているかと質問したのに対して、そんなことはできない生徒が考えることだと答えたとのことである。これでは頭のよい生徒程<sup>かわい</sup>可哀そうだということになる。

来年度の入学者を選考する時期に当たり思うことは、独立学園志望者は真の学問をし人間形成を欲して志望するのであるが、中には学問よりは人間形成の<sup>ほう</sup>方が大切だからといって、成績が<sup>あま</sup>余りよくないから志望するという人もある。成績のよい人は進学率の高い<sup>いわゆる</sup>所謂名門校を志望し、そこでどんな学問が学ばれているかは問題にしない。ただ入学出来さえすればよいと考える。学問でない単なる受験技術の習得でも構わない。<sup>いわゆる</sup>所謂出世コースが無意味であり、望ましいものではないことに気付かない。それ故日本のインテリくらい物を知らない者はない。パルテノン<sup>(167)</sup>はアテネのアクロポリスの丘にあり、パンテオンはローマの<sup>れいぞくこく</sup>隷属国<sup>(167)</sup>の<sup>しよしん</sup>諸神<sup>(168)</sup>を<sup>まつ</sup>祀ったもので、ローマにあるのにアテネのパンテオンという人が日本の知識人の中に実に多い。

近年成績のよい人も独立学園を志望するようになって、大変よい傾向であると喜んでいる。学問に対する理解が増したのである。独立学園に入ったら人格の<sup>とうや</sup>陶冶<sup>(169)</sup>が

主であるから、勉強しなくてもよい等と考えてはならない。独立学園であるからこそ、一心に勉強して貰<sup>もら</sup>わなければならない。学問を熱心にやってこそ、人格の陶冶<sup>とうや</sup>が出来るのである。人間形成の大切な要素であるから、学問が貴<sup>とうと</sup>いのである。独立学園では学問のよさ、面白<sup>おもしろ</sup>さがわかって、試験の為の勉強ではなくて真の学問をやって貰<sup>もら</sup>いたいと一生懸命になっている。しかし中学までの勉強が試験の為であったので、それがなかなかわかって貰<sup>もら</sup>えず、多くの生徒は三年たつてやっとわかるという風<sup>ふう</sup>である。

受験準備をしないといって大学へ入れないことを心配する必要はない。現に卒業生の三分の一以上進学している。受験準備でない真の学問をしたものを喜んで受け入れる大学がある。そしてそういう大学はだんだんに増すであろう。

世の風潮<sup>ふうちょう</sup>にも拘<sup>か</sup>らず独立学園の生徒は真の学問をして貰<sup>もら</sup>いたい。受験勉強以上の熱をもってやってほしい。そして真の価値ある人生を進んで貰<sup>もら</sup>いたい。

(「独立時報」第 48 号、1964 年)

7-3-38 第十五回卒業式の辞<sup>し</sup>

三年間真理を求むべきことを教え、真理を教えて来た。しかし諸君の多くは真理を<sup>とうと</sup>尊ばなかった。勉強を十分にしなかった。職員の力が足りなかったことを申し訳なく思うが、勉強を軽く見た人もある。不必要に学校を休んで、受くべき試験を受けなかったり、レポートを出せと言われても出さなくてもいいものだと考えたりした者もあった。それで二名は卒業が遅れることになった。これは単に二名だけの責任ではなくて、このような風潮<sup>ふうちよう</sup>を作った全体の問題である。受験本位の教育の波がこの学園にも押し寄せたのである。高等学校本来の勉強を正しくやってさえいれば進学する道は必ず開ける。それであるのに本来の勉強を軽んじて、真の学問をしなかった。真理を愛さなかった。ヨハネ第一の手紙 2 章 15 節以下に

世と世にあるもの<sup>もの</sup>とを愛してはいけない。もし世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。すべて世にあるもの、すなわち肉の欲、目の欲、持ち物の誇りは父から出たものではなく世から出たものである。世と世の欲とは過ぎ去る。しかし神の御旨<sup>みむね</sup>を行う者は永遠にながらえる。

とある。消えてなくなる世の欲を求めたのである。しかし私は失望しない。この学校で真理を教えて来た。人生を真剣に考えるように入学の時に要求したことは十分に受け入れられなかったが、ここで教えた真理が一つでも、二つでも諸君の心の中に残っているなら、それは時が来れば諸君を動かすであろう。世と世の欲、肉の欲、目の欲、持ち物の誇りが消え去るものであることに気づき真剣に真理を求むる時が来る。その時にここで学んだ真理が役立つ。これからの生涯において、肉の欲、目の欲、持ち物の誇りが大切か、真理が大切かを試されるであろう。出来るだけ早く真理に達するよう神のお護り<sup>まも</sup>を切に祈る。

卒業にあたり、古き友人の好意により内村先生の肉筆の複製「神に<sup>さき</sup>献げよ」<sup>(170)</sup>を贈る。ここに一つの大きな真理が述べられている。これに度々<sup>たびたび</sup>ふれて、真理の力の大きなことを体験されるよう切に望む。

(「独立時報」第 49 号、1965 年)

## 7-3-39 学年のはじめに

学年の始めに諸君に、特に一年生<sup>(171)</sup>に申したい事はよく勉強して欲しいという事である。この学校では受験勉強はしないが、ほんとうの勉強は他の学校より一生懸命にやって欲しい。受験準備教育の為に日本の教育が毒されているので受験勉強はしないが、勉強しなくてもよいということではない。

ほんとうの勉強は進学や就職の為ではなく立派な人間になる為である。職業も賃金<sup>しゅじゅ</sup>を受ける為でなく、その職業をとおして自分という人間を立派にする為である。種々な学問を勉強するが、それは一口<sup>ひとくち</sup>に言えばほんとうの事を学ぶことである。ほんとうの事を真理という。ほんとの道理というような意味である。真理を学び真理に従って生きていくのが人間の生涯<sup>しょうがい</sup>である。

数学の真理も、信仰の真理も、真理に従って生きなければならないことは同じである。2円のもの<sup>2</sup>と2円のものを買って3円しか払わなければお店では怒る。4円下さいという。数学の真理ははずれるといけないことが直<sup>すぐ</sup>にわかるけれど道徳の真理は、はずれても直<sup>すぐ</sup>にはいけないことがわからない。それで嘘<sup>うそ</sup>を言ってはいけないという真理にそむいても平気でいる人もあるが、嘘<sup>うそ</sup>をいってはほんとは生きて行けないものである。真理にそむくと亡<sup>ほろ</sup>びる。

高等学校で学ぶ真理はどの学科も皆<sup>みな</sup>大切であるから、どれもよく勉強してほしい。勉強のよく出来る人と出来ない人とあるが出来ない場合にそれが所謂<sup>いわゆる</sup>頭が悪いというのであるなら心配は要らない。一生懸命にやれば出来るようになる。困るのは教師のことをよく聞かないことである。授業中に、他のことを考えてはいけない。それでは出来ないのが当然である。一生懸命に勉強しなければならない。気が散ってよく聞いていられないならば、その癖<sup>くせ</sup>に打ち勝つように努力する事が大切である。

この学校で学ぶ一番大きな真理は信仰の真理である。これを掴み得て人生は初めて成功といえる。これは何物<sup>なにもの</sup>にも換え難い宝<sup>がた</sup>である。そして真剣に人生を考えるならば必ず与えられる。他の学問も信仰がなければほんとは出来ない。直接金もうけにならない学問でも神の造り給うたものについての真理であるので喜んで研究したくなる。このような学問によって今日の文化<sup>こんにち</sup>が築き上げられたのである。真の教育も信仰がなければできない。この学校が基督教<sup>キリスト</sup>独立学園と呼ばれる理由である。

(「独立時報」第50号、1965年)

## 7-3-40 第17回創立記念式

17年間の神のお護り<sup>まも</sup>を思う時にただ感謝<sup>あふ</sup>に溢るのみである。第17回創立記念式を迎えるにあたり考えることは我等<sup>われら</sup>がこの神の御恩恵<sup>おんけい</sup>に値するかということである。神の御旨<sup>みむね</sup>に添うよう学園の運営が行われんことは我等<sup>われら</sup>の切なる願いであり、その為に一生懸命に努力して来たのであるが、我等<sup>われら</sup>の力足りずして御旨<sup>みむね</sup>に反することが多くはなかったかと心配する。

特に心配するのは大きくなり、現世的になってしまいはしないか、ということである。高校生急増の問題に協力する為に定員を二回だけ30名にして全生徒<sup>だいせい</sup>84名の<sup>たい</sup>大世帯<sup>たい</sup>になったことが教育が理想通りに行えなかった一つの原因であると思う。これからは小さくするように一生懸命にならなければならない。学校は真理を教え、真理に従って生きなければならないことを教える所である。しかるに今日の教育<sup>こんにち</sup>は真理を重く見ない。学校で学ぶことをそのとおりに実行しなくてもよいと考える。嘘<sup>うそ</sup>を言っはいけないことは教えるが、少しは嘘<sup>うそ</sup>を言っても差し支え<sup>つか</sup>ないと考える。英語でthの発音は歯と歯の間に舌を出すのであることは教えるがそのとおりにしなくてもよいと考えている。また金銭<sup>ばんのう</sup>万能的<sup>しんとう</sup>の考えが社会に根強く浸透<sup>けっかん</sup>している。これらの最大の欠陥<sup>われ</sup>が我等<sup>われ</sup>の間にも入り込む恐れがある。

教えられることが重んぜられなくなる。見つからなければ罪を犯してもよいと考える。あるいは真理をまげて罪を罪でないとする。英語の発音をちゃんとしようとしな<sup>われら</sup>い。このようになってしまったら我等<sup>われら</sup>の学校の存在の意義がなくなる。この世の流行に押し流されてはならない。真理は真理、生活は生活となってしまうてはならない。我等<sup>われら</sup>は飽くまで真理に従って生きなければならない。それでなければこれまでお護り<sup>まも</sup>下さった神の御恩恵<sup>ごおんけい</sup>に値しない。この世の力に負けてしまわないように、真理に従って生きることが出来るようにもっともっと真剣に真理なる神によりすがらなければならない。鹿の谷川の水<sup>した</sup>を慕いあえぐように、神を求め<sup>(172)</sup>、神によりすがらなければならない。詩篇<sup>へん</sup>42篇<sup>へん</sup>の言<sup>ことば</sup>、またこれから歌う讚美歌500番<sup>(173)</sup>の心が今の、第17回記念日を迎える我等<sup>われら</sup>の心でなければならない。職員生徒全員心を合わせて、一生懸命に神を求め、神にのみよりすがって行こう。この決意を新たにして第18年目に向かって前進しよう。

(「独立時報」第50号、1965年)

## 7-3-41 第18回創立記念式

神の恩恵の下に満 18 年の間この基督教独立学園高等学校が生きて来る事が出来た。大いなる感謝である。神はこの小さな学園に何を為さしめようとして 18 年間存続せしめ給うたのであろうか。この学園の果たすべき使命は何であらうか。我らは我らの使命を悟って、その達成に邁進しなければならない。

一般に宗教には儀式と、教会とか教団という組織がなくてはならぬものと考えられている。しかし真の宗教はこのような形式的なものを必要としない。イエス様がヨハネ伝 4 章 24 節で「神は霊であるから、礼拝する者も霊と真実とをもって礼拝すべきである。」と仰って居られる如く、霊なる神は霊と真実とをもって拝すべきである。義にして愛なる神を拝するとは罪の赦しの十字架を信ずることに他ならない。罪の赦しの十字架の福音は最大の真理である。真理なるが故に何物もこれを滅ぼすことは出来ない。ローマ帝国の巨大な国家権力さえもこれを倒すことが出来なかった。また真理なるが故に外からの物的、人間的支えも保護も必要としない。真理は真理なるが故に永久に存続する。我らは基督教が真理なるが故に基督教を信ずる。真理でないことが明白になればいつでもこれを捨てる。基督教と真理といずれを取るかといえれば真理をとる。

この事を明らかに教えてくれたのが内村先生である。基督教はもともとこういう儀式も組織もないものであった。初めにはクリスチャンとか基督教という名称もなかった。弟子達とかこの道とかいわれて居った。それだのにこの世に受け容れられると共に物質的世俗的に陥ってしまった。ルターの宗教改革によって純粋なものと姿にもどされたが充分に出来ないで、教会組織と洗礼と聖さん式とが残された。今日、基督教が無力になっているのはこの僅かに残っている形式主義の為に信仰の純粋さが失われた為である。これを内村先生が純粋な霊と真実とをもって神を拝する基督教にもどしたのである。これは実に重大なことである。日本が世界の文化に貢献し得る一つの偉大なものである。内村先生の「初夢」がこのことを示している。富士山頂に降った恩恵の露とはこの純粋に霊的な信仰の真理を指す。儀式もなく組織もなくただ真理そのものを信じ、真理に従って生きて基督教信徒としての生涯を全うすることは真に大きな事である。

真理なる基督教を実証することがこの学園の使命である。内村先生の唱えられた真理が活きた真理であることを実証するのである。ここには宗教的組織はない。信仰を押しつけない。ただ人生を真剣に考え、真理を真実をもって求めることを教える。真剣に真理を求むるならば十字架の福音に達せざるを得ないことを実証する。学校は真理を教え、真理を求むることを教える所である。学校が信仰の母体となることは真理

なる<sup>キリスト</sup>基督教に<sup>ふさわ</sup>相応しいことである。

この使命達成の為に我らは 19 年目を<sup>いっそう</sup>一層の熱情をもって踏み出そうではないか。  
これが 18 年の間加えられた神の<sup>おんけい</sup>恩恵に<sup>こた</sup>応える道である。

(「独立時報」第 53 号、1966 年)

## 7-3-42 クリスマスの必然

神は愛である。愛でない神はたとえ如何なる形をとろうとも真の神ではない。故に人間を救い給う神でなければならない。

しかし同時に神は義の神で在し給う。そしてこれは神は愛なりということから必然的に結果する。義の伴わない愛は真の愛ではない。卑近<sup>(174)</sup>な例をもって示すならば親の盲目的な愛は愛ではない。盲目的な愛をもって子を甘やかし、我が儘な意気地なしの人間にしてしまったならこれは愛ではないことは明白である。子が正しい人間になるように一生懸命になるのが真の親の愛である。

主は愛する者を訓練し、受け入れるすべての子を笞打たれるのであるとヘブル書 12 章 6 節にある。それ故に神は義にして愛なる神である。ある人々は旧約の神は義の神であり、新約の神は愛の神であると言うがこれは誤りである。旧約の神も義にして愛の神であり、新約の神も義にして愛の神である。神には変わりはない。ロマ書の 11 章 22 節に神の慈愛と峻厳<sup>(175)</sup>とを見よとある。

またキリストの十字架というような残酷<sup>(176)</sup>なことはユダヤ思想である、浄土仏教の如くただ、南無阿弥陀仏と継るだけで罪を赦す方が大きな愛であるという考えが世に行われている。しかしこれも大きな誤りである。義を無視して、ただ罪を赦すのは真の愛ではない。故に神が真の愛の神であり、義にして愛に在し給うならば十字架の贖いということが必要である。罪の少しもない方の犠牲が必要である。神が人間の形をとって世に現われなければならない。父なる神の他に子なるキリストがなければならない。ここに三位一体でなければならない奥義がある。神が別の人格的形をとり、罪を犯した人間の為に犠牲にならなければならない。罪を罰するという神の義を通してのみ救いが可能になる。十字架は神の義を全うする為のものである。ロマ書 3 章 24 節以下に

彼ら(すべての人)は徃なしに、神の恵により、キリスト・イエスによる贖いによって義とせられるのである。神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべき贖いの供え物とされた。それは神の義を示す為であった。……こうして神みずから義となり、さらにイエスを信ずる者を義とされるのである。

とある。

神が義にして愛で在し給うならば十字架の贖いが必然であり、十字架にかかり給う神の子がこの世に生まれ給う事が必要である。

ここにクリスマスの意義がある。  
（「独立時報」第 54 号、1966 年、クリスマス式辞）

## 7-3-43 暴力否定の宣言

クリスマスは暴力否定の宣言である。クリスマスを最もよく予言しているイザヤ書 9章に最大の暴力である戦争を否定している力強い言<sup>ことば</sup>がある。5節の

すべての戦場<sup>ほ へい</sup>で歩兵のはいた靴と  
血にまみれた衣<sup>ころも</sup>とは  
火の燃え草となってやかれる。

である。こういう事<sup>こと</sup>が一人の嬰<sup>みどり</sup>児<sup>ご</sup>が我らの為に生まれることによって実現するとい  
うのである。イザヤ書 53章 7節に

ほふ<sup>ほ</sup> 屠<sup>ぼ</sup>り場<sup>(177)</sup>にひかれて行く小羊のように  
また毛を切る者の前に黙っている羊のように口を開かなかった。

とある如<sup>ごと</sup>き真<sup>ご</sup>の救い主の御誕生である。

にゆう<sup>わ</sup> 柔<sup>わ</sup>和な人たちはさいわいである。

と仰<sup>おっしゃ</sup>り、無抵抗を教えられたキリストの御降誕<sup>ご こうたん</sup>である。御降誕<sup>ご こうたん</sup>そのものが暴力否定  
の大いなる宣言である。それ以後の歴史的事実が非暴力こそ偉大なる真理であることを  
実証している。キリスト教はローマ帝国の迫害<sup>はくがい</sup>にも非暴力をもって対し、遂<sup>つい</sup>にこれ  
に打ち勝った。暴力をもって暴力に应ぜず、敵をも愛する愛によって史上最大の国家  
権力に打ち勝った。これは驚くべき事実である。300年経ってローマ帝国の方が降参<sup>ほう</sup>  
した。しかしローマ帝国の保護を受けようになつたから、キリスト教が世俗<sup>せぞく</sup>的になり、  
物欲<sup>ぶつよく</sup>に捉<sup>とら</sup>われて墮落<sup>だらく</sup>した。

キリストの御降誕<sup>ご こうたん</sup>の時に「地には平和」と天使が歌ったが、御降誕<sup>ご こうたん</sup>以来 2000年、  
地上に平和が来ないのではないかという人がいる。しかしその時の天使の歌は

いと高き所では神に栄光があるように  
地の上ではみ心<sup>みこころ</sup>にかなう人々に平和があるように

である。キリストの教えに従う、み心<sup>みこころ</sup>にかなう人々に平和が来るのである。暴力に対  
して暴力<sup>もち</sup>を用いない人々に平和が与えられる。自衛と称して暴力には暴力をもって応

ずることは暴力主義に降参することである。暴力によって相手を打ち破っても平和にはならない。やがて相手は力を養<sup>やしな</sup>って報復するであろう。こんな自明の事が世界の偉い指導者達、政治家達にわからないで暴力によって国を護<sup>まも</sup>ろうとするので地上に戦争が絶えない。キリストに従って暴力を否定して初めて地上に平和が来るのである。

暴力を用<sup>もち</sup>いることは自己の立場が真理でないことを表明することである。真理は暴力をもって護<sup>まも</sup>る必要はない。真理ならばそれ自身存続する。真理に従えば国家も滅<sup>ほろ</sup>びない。マルクス主義の学者がいくら偉くとも暴力革命の理論を修正しない限り真理ではない、学問ではない。毛沢東<sup>(178)</sup>がいくら中国の大衆から偶像<sup>ぐうぞう</sup>に祭り上げられても、暴力主義を修正しない限り、真理の敵、人類の敵である。

(「独立時報」第 57 号、1967 年、クリスマス式辞)

### 7-3-44 第21回入学式の辞<sup>し</sup>

創立以来満 20 年経過して、21 回目の入学生 25 名を迎えて、第 21 年目を発足<sup>ほつそく</sup>することは大いなる感謝<sup>おお</sup>である。特に今年は入学生を 25 名にすることが出来て喜ばしい。高校生急増問題に協力する意味で二回程 30 名にしたために、もとに戻すのに苦労した。

学校は学問を教え、それによって人格完成を行うものである。コリント後書<sup>こうしょ</sup> 13 章に「私たちは真理に逆らっては何をする力もなく、真理に従えば力がある。」とある。学問とは真理を学び真理を探究することである。そして真理<sup>つか</sup>を掴んで、それに従って生きて行くのが人生である。それ故卒業したらもう勉強しなくともよいというのではない。卒業後学校で学んだ学問<sup>ゆえ</sup>を基<sup>もと</sup>にして、なお勉強していくのが真の人生であり、職業とはその勉強をするところである。人は職業を通して勉強して行くのである。学校が人間形成の場であるというのはその基<sup>もと</sup>を作る所という意味である。

徳育<sup>とくいく</sup>が人間形成のためであって、知育は有利な職業につくためであるとの考えが広く世に行なわれているが、それは誤<sup>あやま</sup>りであって知育も徳育<sup>とくいく</sup>のうちである。知育によって、学問することによって、人間形成が、徳育<sup>とくいく</sup>が出来るのである。数学でも、生物学でも、それをよく勉強すると人間が出来て行くのである。先年、東大生<sup>けいだい</sup>と慶大生とが卒業直前に、就職することになっている会社の金庫を盗んだということがあった。大学で知育<sup>とくいく</sup>だけして、徳育<sup>とくいく</sup>をしないからこんなことが起こるのだ、有名大学へ入れたのだから学問は出来るのだろうと世間の人は考えるけれども、それは大きな誤<sup>あやま</sup>り、このような学生は学問も出来ないのである。数学でも何でもちゃんと出来るなら、金庫泥棒をしてどうなるか位わからない筈<sup>はず</sup>はない。何もわからないからこんな愚かなことをするのである。本当の学問をすることが人間を、人格を完成して行くのである。人生とは学問をして、一生かかって自分の人格を完成して行くものである。

独立学園で精神教育を主とするというとは普通の勉強はしなくてもよいのかと考える人があって困るのである。勉強嫌いだから独立学園に行くという人がもしあったならそれは大きな間違いで他の学校より一層よく勉強しなければならない。数学でも生物学でも教えられることは何でも一生懸命に勉強する。それが大切な徳育<sup>とくいく</sup>になるのである。学問とは考える力を養<sup>やしな</sup>って、考えて真理を求めて、そして真理に従って生きるようにさせるものである。人間が真理に従って生きて行くようになることが人格完成あるいは人間形成である。それ故どの学科でも一生懸命勉強しなければならない。

今日<sup>こんにち</sup>、日本で教育が受験準備教育になってしまい、本当の勉強をしない。そのために学校卒業者が学力がなく、考える力がなくて、多くの困ったことが起こっている。中学卒業生の学力も劣<sup>おと</sup>って来て、私共も教育に骨<sup>お</sup>が折れるようになって来た。その学

力低下を補<sup>おぎな</sup>うためにも一層<sup>いっそう</sup>諸君は一生懸命に勉強しなければならない。よく勉強するというのは先生のいうことをよく聞いて、よく考えることである。よく勉強して正しい考え方が出来るようにならなければならない。金庫泥棒をすればどうなるか位のことをわからないような、考える力がない人間になってしまっは困るではないか。

諸君はこれまでは勉強というものは試験のためにするものだ、試験で良い点をとるために、面白<sup>おもしろ</sup>くもない勉強を一生懸命にやって来た。これからは学問<sup>どうと</sup>は尊<sup>とうと</sup>いものであるから一生懸命に勉強するといふのでなければいけない。尊<sup>とうと</sup>いものであるから学問<sup>どうと</sup>は面白<sup>おもしろ</sup>いものである。学問<sup>どうと</sup>の本当<sup>おもしろ</sup>の面白<sup>おもしろ</sup>さがわかって、一生懸命に勉強するようになって欲しい。学問<sup>どうと</sup>をすることは本当<sup>おもしろ</sup>に面白<sup>おもしろ</sup>いものである。パスカルは偉い人である。偉い数学者、物理学者であり、偉い神学者、偉い哲学者でもあった。そのパスカルが12歳の時に独力<sup>どくりよく</sup>で三角形の内角の和は二直角になることを証明したといつて非常に喜んだということである。どんな三角形でも三角形の三つの角を合わせると一直線になるのである。これは諸君も習って知っていることと思うが、それを自分で証明出来たことが嬉しかったのである。勉強するといふことは本当の喜びを与えてくれる。どうか勉強の喜ばしさ面白<sup>おもしろ</sup>さを悟って、試験のためではなくて、勉強をやりたくてしようがないといふようになって欲しいのである。

本当に諸君が学問を愛し、真理を愛すること、このことが諸君が立派な人間になることである。虚偽<sup>きよぎ</sup>を憎み真実を愛することが真の人間<sup>どうと</sup>の尊<sup>とうと</sup>い姿である。だから学問が人間形成に役立つのである。どうか諸君は試験でよい点をとって誇るためではなく、学問<sup>どうと</sup>の尊<sup>とうと</sup>さ面白<sup>おもしろ</sup>さが出来るだけ早くわかってそのために喜んで一生懸命に勉強するといふようになって欲しい。そして本当の勉強をして欲しい。これが新しい一年生に対する私の最大の願いである。

(「独立時報」第58号、1968年<sup>(179)</sup>)

## 7-3-45 クリスマス

世界は今荒れ狂っている。戦争がベトナムにおいて、中東において行われている。その他の所でも危険な対立があって今にも戦争が起こりそうである。日本国内でも内乱が起こっているという良い。ゲバ棒<sup>(180)</sup>を振るう学生達を機動隊<sup>(181)</sup>が弾圧している。自衛隊が内乱の為の訓練をする。力と力の対決の世界である。道理を通すことができないから力に依るといっておる。そしてキリスト教のような弱いものでは、今の世界では駄目であるという声が聞こえてくる。大学を封鎖しておいた学生が、神は死んだと方々に落書きをしておいたということである。そして争いが益々激しくなってくる。世界は益々暗黒に覆われて行く。偉いといわれておる学者も、政治家もどうすることも出来ないで、ただ目前の問題を取り繕って行くことに浮身をやつして<sup>(182)</sup>おる。政治が誤っていることはいうまでもないが、今日の学問も誤っている。大学紛争も大学において行われている学問が間違っているから起こったのである。機動隊による弾圧で平静になっているようであるけれど、これは表面だけであって、問題は解決されていない。これはすべて人間の罪の結果である。マルクス主義者は、社会が悪いのは資本家の罪の故だ、これを倒しさえすればよいと言っている。しかし、自分達も罪人であることを忘れておる。それ故にマルクス主義者が権力を握ると必ず内部争いが起こってくる。ソ連でも、中国でも、例外なく内部争いが起こった。日本の学生の間でも、内ゲバという言葉がある通り、ひどい内部争いが起こっておる。力によっては少しも問題は解決されない。戦争に依っても目的を達することが出来ない。アメリカのような大きな軍隊の力を持ってしても、ベトナムの問題を解決することが出来ないでおる。争いが益々深刻になって行く。これは制度の問題でなくて、人間の問題であることを示している。人間の罪のためである。人間がよくなれば封建制度でも理想の世界が実現する。内村先生が上杉鷹山のことを書いて人間が良ければ封建制度でも、こんなに良くなるんだと、そういうことを教えている。人間の罪の問題が解決されなければどんなに良い制度でも駄目である。

そして人間の罪の問題はなかなか解決されない。罪が人間の魂を根強く捕らえておるからである。人間の罪というものは誠に根深いものである。この罪を除くことが第一の最大の問題である。このために神の御子が降誕するということが必要になる。人間の罪を除くには、罪のない神の御子が自分を犠牲にして十字架の死を遂げるといふことが必要である。人間の罪が贖われて、人が神の愛に励まされ、力づけられて、愛が行い易くなって、初めて天国が実現するのである。そのためにまず私達一人一人が罪より救い出されなければならない。神の与え給う平和は、罪の赦された人々のうちにまず与えられ、そういう人々が多くなって初めて地上に真の平和が来るのであ

る。ルカ伝 2 章に羊飼いが、天の軍勢が歌っているのを聞いたことが記されている。その歌に、地には平和、主の喜び給う人々にあれという言葉がある。地上にただ平和は来ない。人間が神の喜び給う者になって、初めて平和が来るのである。御旨に叶う人々というのはキリストの教えに従う人々である。キリストの教えに従う人々が多くなって初めて、地上に平和が実現するのである。それ以外には、理想の社会が実現する道がない。そのことを今日の世界の情勢が良く示しておる。今は力の世の中であって弱々しいキリスト教では駄目な世の中だというのは最も大きな間違いであって、今ほど私達はキリストの教えに従わなければならない時はないのである。人間はすべてキリストに従わなければならないことを判然と示して下さるために、神様はこのような混乱した状態の世界を私達の前に示して下さっているのだと思う。このような状態にあるということも、神様が私達に罪の赦しの十字架の福音を求めなければならないことを教えて下さるための大きな恩恵である。

私共はこのクリスマスを迎えるに当たって、御子の御降誕がどういう意味をもっているかということ深く考えて、そしてまず、自分の罪の贖われることを願い、1969 年前にこの地上に生まれ給うた神の独り子の十字架に頼り続けることを一生懸命にしなければならぬ。そのことを私共に教えてくれるのがクリスマスである。

(「独立時報」第 60 号、1970 年)

7-3-46 クリスマス式辞<sup>しきじ</sup>

今日は激動の世界であるといわれています。そしてこのような世界にあっては信仰等という暢気なことは考えてはられないと多くの人は考えている。しかしこれは大きな誤りである。この激動の世界というのは人が神から離れたから起こったのである。

偉い学者や偉い政治家がいろいろと人間的に考えて自分勝手なことをしてこういう激動の世の中になったのである。人間的な計画、予定、そういったものが皆外れてしまつて、それで困った困ったといつて偉い学者も偉い政治家も何もすることが出来ないで困っておるのである。人間の力をもってしてはどうすることも出来ない世の中になって、それで激動の世であると騒いでおるのである。これは神から離れたからで、今こそ神に帰らなければならないときである。

人間の活動の中で経済活動が一番大きな割合を占めておる。今日の経済学の始まりであるアダム・スミスはその国富論において人間の経済活動は人間の儲けようとする心に任せておいてよい。そうすると自然にうまく調節されてよい経済活動が出来るといったのである。けれども、アダム・スミスは立派な信仰を持っておつた。そして人間の経済活動の裏には神さまがすべてをよきに導いておられて、人間が信仰を持って経済活動すれば、それでうまくいくのだといつておるのである。

ところが今の経済学者は信仰を持たず、何でも儲けさえすればよい、企業は儲けるのが目的で儲けないことは罪だとそういつておる。私の知っているある小さな企業の社長が、何でも儲けさえすればよいという学者の言葉を聞くのは嫌だ、もしそうならばこういう仕事をしている意味がないとよく私にもらしておりました。けれどもこのような人は極めて稀れで、今日すべての企業が企業とは儲けるのが目的で、儲けるためには手段を選ばずということをやっており、それが今日の混乱の基になっておるのである。

人間はただ儲ければよいというのではいけないのである。神を信じて、神の御心に従うような生活をしなければならぬ。経済活動も真理に従ってなされなければ混乱に陥るのは当然でありこのような激動の世界になるのは当然である。今日ほど私達は神に帰らなければならないことを痛切に感ずる時はないのである。

しかし人間は罪を犯している。罪に汚れた人間はこのままでは聖なる神の許に帰ることは出来ない。人を罪から救う罪の赦しの十字架の福音ということは絶対に必要なことである。

旧約聖書を一貫している精神というのはメシア<sup>(183)</sup>待望である。メシアはキリストのヘブライ語でキリストはギリシャ語で救い主を意味する。だから救い主待望という

ことが旧約聖書を一貫している精神ということになる。神の子が人間の形をとって地上においてということが絶対に必要である。聖書がこのことの実現したことを記しておく。歴史上のある時点においてこの地球上のある地点に神の子がお生まれになった。そして成長なされて十字架の死を遂げられて復活なされ、人間を罪から救うという大事業を完成されたのである。

ルカによる福音書第2章に、イエスはキリニウスがシリアの総督であった時の最初の人口調査の時にユダヤのベツレヘムでお生まれになったと明らかに記されている。これまでの世界の歴史はすべてこれを中心にして動いてきた。キリストがこの地上にお生まれになった時に非常に不思議な出来ごとが起こった。それは当時の世界で一つの言葉が通用し、世界中が一人の支配者の下にあるという歴史上たった一遍しか起こらなかったことが起こったのである。

ギリシャ文化というものは非常に偉いものである。そのギリシャ文化がアレクサンドロス大王の世界帝国建設によって世界中に広まったのである。アレクサンドロス大王とその世界帝国はすぐ瓦解したけれども、ギリシャ文化は世界中に広がったのである。何処へ行ってもギリシャ語が通用するという現象が起こった。今日英語が世界中に通用するといわれておいても、まだまだ世界のほんの一部にしか通用しないのであって、この時のギリシャ語がほとんど世界中に通用したというのには比ぶべくもない。何処へ行っても話が出来た。当時の世界で何処へ行っても不自由なく話が出来るといことは珍しいことである。

それから地中海世界がローマ皇帝の支配下にあったから、ローマ帝国内は何処へでも行けた。もちろん交通機関が発達していなかったから歩かなければならなかったけれどもとにかく何処へでも行けた。今日非常に交通機関が発達して韓国へは二時間足らずで行ける。けれども行くためにはパスポートやビザを得るために非常に面倒な手続きが要る。中国へはなかなか行けない。けれども今から二千年前は泥棒に出会うとかの危険なことはたくさんあったけれど、行こうと思えば何処へでも行け、そして何処へ行っても話が通じるという実に珍しいことが、この人類の歴史で一度だけ地上に実現し、この時にキリストがこの地上にお生まれになったのである。

以上のように考えると、それまでの世界の歴史というものは、神がキリストをこの地上に生まれさせるためになされた準備だと考えざるを得ない。

余計なことであるが、今日の学者の学問や政治家の政治が駄目になり、そしてこういう時代になったと先程申しましたが、学者の学問が駄目である例を一ついいます。

キリニウスがシリアの総督になったのは紀元6年であり、イエスはヘロデ王の時に生まれており、ヘロデ王は紀元前4年に死んでおるから、イエスの誕生は紀元前6年ごろでなければならない。これはルカの書いていることと合わない事実だからルカはいい加減のことを書いたのである、と学者はいつておるのである。しかしこれは学者

の大きな間違いである<sup>(184)</sup>。

ローマ時代に総督と呼ばれる者に三種類がある。即ちローマの元老院管轄の州の総督と、ローマ皇帝直轄州の総督と、それからユダヤのような小さい州の総督との三種類である。そしてその各々の総督という言葉が違っているのである。ルカはその言葉の使いわけをちゃんとやっておるのである。聖書には皇帝直轄州の総督が出ていないのでそれを何というのかわかりませんが、元老院管轄州の総督は使徒行伝 13 章のキプロス島の総督と 18 章のアカイア州の総督とに出ておって、ちゃんと元老院管轄州の総督（アンテュパトス）の言葉を使っておる。それからユダヤのような小さな州の総督は聖書にはたくさん出ておって、それはそれで特別の言葉（ヘーゲモン）を使っておる。そこでキリニウスがシリアの総督であったという個所は問題のところなので除けて、ポンティオ・ピラトが総督であったとき、それからフェリクスがユダヤの総督であったとき、あるいはフェストゥスがユダヤの総督であったときを調べてみると、どれも小さな州の場合の総督という言葉を使っている。ちゃんと言葉使いを区別しているのである。

ルカによる福音書のキリニウスがシリアの総督であったという個所の総督は、小さな州あるいは偉い総督の下の総督という意味の言葉で、ポンティオ・ピラトやフェリクスやフェストゥスの場合と同じ言葉を使っておるのである。であるから、イエスが生まれたのはキリニウスがシリアという皇帝直轄領の一番偉い総督であった紀元 6 年の時のことでないことは明らかである。

一方、ヨセフス<sup>(185)</sup>という歴史家が紀元 6 年にキリニウスがシリアの総督になったときのことを書くのに、ルカによる福音書にあるのと違う言葉を使っており、キリニウスと同時にコポニウスという人がユダヤの総督になったと書いているがその総督という語はルカによる福音書のキリニウスがシリアの総督……という総督と同じ言葉なのである。

であるから、ルカの書いたキリニウスがシリアの総督だったという時は、キリニウスがシリアの一番偉い総督になった紀元 6 年の時のことではなく、それより前のある時期、二世紀の学者の記述によるとキリストはサトルニスという人がシリアの総督だった時に生まれたとあるので、サトルニスがシリアの一番偉い総督でキリニウスがその下の役をしておったらしく、その時のことであるらしいのである。偉い学者がそういう言葉の区別を忘れて勝手に紀元 6 年の皇帝直轄領の最高の総督になった時だと解釈し、ルカは時期を間違えたといっておるわけである。キリニウスがシリアの総督の下の役をしておった時というのは何時か、そのはっきりした記録がないのでわからないが、いろいろなことからしてイエスは紀元前 6 年か 8 年にお生まれになったことが確かなようである<sup>(186)</sup>。

これをもって見ても今日の学者がいい加減の学問をしておるということがよくわか

るのである。経済学の方でも自然科学の方でも、本当に今日の学者がちゃんとした研究をしないから、それも今日のこの混乱のもとになっているわけである。

さてついでに申しますと、今日の紀元を決めたのは紀元 500 年頃<sup>(187)</sup>ディオニュシウス・エクシグウス<sup>(188)</sup>という人が歴史の学問を使ってでありました。歴史の学問が発達していない今から 1400 年前に、それよりも 500 年前の年代をちゃんときめるといふことは非常に難しいことであって、6、7 年の違いで決めたのは相当の出来ばえであると思う。これを紀元元年にキリストが生まれていなかったということで非難するのは学問というものをよく知らない人のすることである。歴史の学問が発達した今日でも 500 年前のある出来事の時を決めるといふことはなかなか難しいことです。幸いはっきりした記録が残っておれば割合に楽に決められるが記録が残っていなければなかなか難しい。それを今から 1400 年前に 6、7 年の違いで決めたといふことは余程偉いことである。

今日の紀元はキリストの誕生の年をもって決められたのであるが、そういう訳で 6、7 年間違いはしましたけれども、キリストが紀元前 6 年から 8 年にかけてのある年に生まれたことは、確かである。誕生の日はさっぱりわかりません。今日 12 月 25 日をキリストの生まれた日としておりますが、それはローマの冬至祭<sup>(189)</sup>の影響を受けて大部後になってから決まったのである。だから日は何時でもよい。とにかくキリストがこの地上にある時期に確かにお生まれになったということが大事なことである。何時であるかはっきりわからないけれどもイエスが確かにこの地上にお生まれになった、そして私達人間と同じくこの地上を歩かれて生活なさり、最後に十字架の死を遂げて人類を罪より解放するという大事業を完成されたのである。キリストがわたしたちの罪を贖って下さらなければ私達如何に神に帰りたくても帰れないのである。であるから、キリストがこの地上にお生まれになったといふことは、私達にとって最も大事なことであり、私達の喜びの基であり本当に私達が祝うことが出来る心からおめでどうといふことの出来ることである。

何時の年でも私達はもちろんそのことを知って、私達のために神の御子を犠牲にして下さるといふ神の愛の大きいことを思い感謝に溢れるのであるけれども、今日のよきに激動の世にあっては一層そのことを強く感ぜざるを得ないのである。神に頼らなければならぬけれども只では神に頼る道がない。ただ一つキリストを通しての罪の赦しということによらなければならないのである。だから今日程クリスマスが人間にとって如何に有り難いことであるか。喜ばしいことであるかを感じざるを得ない時はないのである。

こういう年に際し、私達は何時の年よりもより一層の喜びと感謝をもってクリスマスを迎えたいと思うのである。よくクリスマスの本当の意味を考えて、私達本当の喜びを持ち、希望を持ち、心からクリスマスを祝うことの出来る幸いをもってこのク

リスマスを迎えたいのである。  
（「独立時報」第 65 号、1974 年）

## 7-3-47 農民と教養

## 1 教養の必要

昔から百姓には学問は要らないといわれてきた。今でもそう考えられている。お前は学力がないから農学校へ行けという風である。しかしこれは大きな間違いで農業程学問の必要な仕事はない。農業をほんとうにするにはよく考えてしなければならない。考える力を養うにはほんとうの学問をしなければならない。学問とは事物をよく見て、よく考えて、ほんとうのことを見出すことである。こうして得た真理を集めたものが学問である。農民が必要とする学問は考える力を養うところのほんとうの学問である。単なる農業技術についての知識ではない。そういう農業技術を生み出した考え方即ちほんとうの考え方を教える学問である。40、50年前の話であるが、その頃でも裕福な農家では子弟を学校へやった。学校で習った農業技術を条件の違った自宅の農場でそのまま実施するのでうまくいかず、親達に学問したって駄目じゃないかといわれるということがあった。それ故直接の農学でなくとも英文学でも、他の学科でもよい、考える力を養うほんとうの学問ならなんでもよい。農民には学問が必要である。戦後妙高山<sup>(190)</sup>の麓で農業して成功した英文学者の話を聞いた。私の友人で、戦前東京都立大学の前身である工専<sup>(191)</sup>の機械科を出た人で、戦後山形県最上町で開拓農業<sup>(192)</sup>をやっている人がある。機械技術をもって会社に勤めれば楽をして収入が多く得られるので、何回か止めようとした。君のような教養のある人が百姓をやることは大変意義があることだから止めないようにと勧めた。私が励ましたばかりではないでしょうが、止めないでやりとおして、今は希望を持ち、余裕をもって楽しく農業をやっている。考えないでただ役人の指導によってやるからうまくいかないのである。戦後役人の指導によって開拓農業をした人はほとんど皆失敗している。米価<sup>(193)</sup>を高くして貰うことを喜ばないで、米を安く生産出来る態勢をつくることを要求すべきであった。考える力がなく、自主性がないから、政治家や経済学者にだまされるのである。家畜にしろ、作物にしろ、生きているものを扱うのであるから、生命のないものを扱う工業生産より遙かに高い教養を要する。トマト作りの名人があった。多くの人がどんな肥料をやるのかと尋ねるがその人は答えなかった。これこれの肥料をやればよいという問題ではない。作物を愛することが先決問題であるからである。山の中の農家でも最良の肥料は主人の足跡であるといわれている。よく見に行く百姓がよい収穫をあげるのである。手間が十アール<sup>(194)</sup>当たりどの位かかるとか、省力ばかり考えてはよい作物は出来ない。学問とか教養とかいうものは自然科学的のものであっても物質的よりも精神的なものが大切だということを教えている。農民にはほんとうの学問が必要である。

## 2 農業は教養を高めるもの

農業は教養を高めやすい職業である。金銭の奴隷<sup>どれい</sup>になっておっでは教養を高めることは出来ない。金儲け主義<sup>かねもう</sup>ではほんとの学問は出来ない。今日の日本の学問が墮落<sup>だらく</sup>したのは学問が金儲け<sup>かねもう</sup>に使われているからである。教育は学問を教えることによって行われる。教育も金儲け主義<sup>かねもう</sup>では出来ない。大学紛争は大学にほんとの学問と教育がなくなったから起こったのである。機動隊で押さえるからおさまったように見えるが、実は根深くなってきたので、日本の社会にとって恐ろしいことである。

農民は金銭の奴隷<sup>どれい</sup>にならないでも暮らせる。金銭が少なくても、あるいは金銭がなくとも生活に必要なものを作ることが出来るから独立の生活が出来る。日本の経済に捲き込まれないでもやって行ける。それ故、暇<sup>ひま</sup>を作って、自分の教養を高めることが出来る。また自然の中にいるので、静かに、深く考えることが出来る。それ故ほんとの学問が出来る。都会の人はみかけは立派な風<sup>ふう</sup>はしているが、誰が損をした、誰が儲けた<sup>もう</sup>というようなバカらしいことばかり考えているのである。都会のやかましきの中<sup>うち</sup>にいると深く考えることが出来ないでしまう。それ故ほんとの学問が出来ない。

農民は土地に執着<sup>しゅうちやく</sup>して、損をしているとよくいわれる。高く土地を売って、安い土地に農地を移転して楽に農業をしたらいいという。しかし農民はなかなか土地を売らない。農民はその周囲の自然から受けるものを高く評価しているからで、金銭に換えられない貴いもの<sup>とうと</sup>のあることを知っているのである。大地に根を下ろしたものとすることも農民がしっかりした考え方が出来やすいからいわれるのである。学校を出てない農民でも暇<sup>ひま</sup>を作って勉強する人はなかなか高い教養を身につけている。晴耕雨読<sup>せいこううどく</sup><sup>(195)</sup>という言葉<sup>ことば</sup>がある。働けない時に学問をするのである。自然の中にあつて、深く考えることの出来る所で学問をするからよい学問が出来る。農民文学などといって、その作品が高く評価されることがあるが、農民が自然の中にあつて生活し深い人生経験をするからよい文学が生まれるのである。

農民は自然科学的な学問でも、実際の経験に基づく、なかなかしっかりした学問をしていることがよくある。それを百姓には学問は要らないからといって、無理にほんとの学問をすることを押さえるような風潮<sup>ふうしやう</sup>がある。今日の社会は農民を精神的、経済的圧迫<sup>あつぱく</sup>によって無理に物質的にしようとしている。農村における一番困った問題であるところの出稼ぎ<sup>でかせ</sup><sup>(196)</sup>問題でも物質的利益を見せびらかして<sup>(197)</sup>農民をつるから起こるのである。欲深くさえないで、出稼ぎに行く時期に学問をさせるならば、豊かな余裕のある農業が出来るようになる。また教養があるなら自然の中の生活を本当に楽しむことが出来る。それ故農業は教養を高めるのに最も適した職業である。農民が教養を高めることによって日本の文化が高められるであろう。

(「独立時報」第 67 号、1974 年)

7-3-48 卒業式々辞<sup>しきじ</sup> (198)

一年生 28 名、二年生 28 名、それぞれ二学年、三学年に進級いたします。三年生 26 名のうち、24 名本日卒業いたします。2 名は卒業延期にいたしまして家庭教育を受けるようにいたします。家庭において家庭教育を受けられる見込みがつきますればいつでも卒業の手続きをいたします。

今日の教育は崩壊しています。学校は学問を教えて教育することを忘れて、受験技術<sup>こうしゅ</sup>を身につけさせることに専念するので、学校教育も放棄<sup>ほうき</sup>されてしまっております。その結果、学力のない卒業生ができて困っているのでありまして、今日の日本の非常に困った状態はそこに原因しているのであります。受験準備教育はまた家庭教育をも奪ってしまったのであります。人間にとって家庭教育<sup>すなわ</sup>即ち親の下で成長するということは非常に大事なことであります。それを今日の日本の教育から奪ってしまったのであります。そして、小学校に入る前から受験準備教育をするようになり、今日の教育の破壊がいつそう激しくなったのであります。

2 名の者は教育の崩壊の害を最も多く受けたのでありますが、2 名の家庭におきましては家庭教育の欠けているのを補<sup>おぎな</sup>うことができると認められましたので延期することにしたのであります。ですから延期された者の方が、延期されなかった者より劣っているということはないのであります。その方がほんとうの教育を受けるのに都合がよいと考えてそういう処置をとったわけでありまして。あるいは卒業いたします者の中にもそういう処置をとった方がよいという者があるかもしれません。けれどもそういうことがよいという確信がないためにそれをしないだけであります。どちらが幸いかということとはわからないことであります。

人間の評価を正しくするということは非常にむずかしいことであります。そしてそのでき難い評価を無理にいたしますので今日教育の困難が起こったのでありまして、大学は入学試験で学問のできない人を入学させ学問のできる人を締め出すということをしております。それゆえに今日の大学教育がだめになってしまっておるのであります。教育が崩壊してしまっておるので、中学卒業生の学力が年々劣ってまいりました。学園の教育でも年々教育の困難を強く感じるようになってきております。いま卒業する人も高等学校の課程をきちんと卒業したといえないのであります。それですから全員卒業延期をするべきでありますけれども、社会全体において学力のない人を卒業させております。それで世間一般の考えでの卒業という意味で、今日卒業するということにしたのであります。そういう意味で卒業式を行ないますので、形式的な卒業証書は式後事務室でお渡しすることにいたします。世間ではそれだけに値うちを置きますが、卒業証書という紙切れなどは意味のないものであります。

ほんとうの卒業証書というのは紙切れではなくして、それは諸君自身であります。コリント人への第二の手紙の3章<sup>(199)</sup>にこうあります。

わたしたちは、またもや、自己推薦<sup>すいせん</sup>をし始めているのだろうか。それとも、ある人々のように、あなたがたにあてた、あるいはあなたがたからの推薦状<sup>すいせん</sup>が必要なのだろうか。わたしたちの推薦状<sup>すいせん</sup>はあなたがたなのである。それは、わたしたちの心にしるさされていて、すべての人に知られ、かつ読まれている。

推薦状<sup>すいせん</sup>というものは、あなたがた自身なんだ、そしてあなたがたの心にしるさされていること、それがほんとうの推薦状<sup>すいせん</sup>だといっているのであります。卒業証書というのはいわば学校から出す推薦状<sup>すいせん</sup>のようなものです。

そして、あなたがたは自分自身が、わたしたちから送られたキリストの手紙であって、墨<sup>すみ</sup>によらず生ける神の霊によって書かれ、石の板にでなく人の心の板に書かれたものであることを、はっきりとあらわしている。<sup>(200)</sup>

石の板とはモーセがシナイ山において神から十戒<sup>じっかい</sup>を授けられた時に二枚の石の板にそのことを書きしるした<sup>(201)</sup>とある如く昔は石の板にも書いたのである。その石の板にではなくて、人の心の板にとありますが、これは少し訳<sup>やく</sup>がまずいのでありまして、元の言葉は「肉の心の板」なのです。石という死んだものではなくて、血のしたたる生きたものに書かれたということを表わす言葉であります。ただ聖書のほかのところで霊と肉<sup>たいしょう</sup>ということを対照<sup>たいしょう</sup>させまして、霊は尊<sup>とうと</sup>いもの、肉が悪<sup>あ</sup>しものというふう<sup>と</sup>に説いておるところがありますので、それに引きづられて、肉という言葉<sup>と</sup>を避けて「人の心の板」としたのでありますが、やはりこれは元の通り、「肉の心の板」と書いた方がよいです。鋤物<sup>こうぶつ</sup>の死んだ石ではなくて、血のしたたる「肉の心の板」に書かれたもの<sup>と</sup>だということをいっているのです。

ほんとうの卒業証書は、諸君の心に書かれたものでなければなりません。諸君自身の身体が卒業証書であります。そしてその卒業証書には何と書かれてあるべきかと申しますと、それは「砕けた悔<sup>くだ</sup>いた心<sup>く</sup>」と書かれなければならないものであります。詩篇<sup>へん</sup>51篇<sup>へん</sup>の終わりのところ<sup>(202)</sup>に、

あなたはいけにえを好まれません  
たといわたしが燔祭<sup>ほんさい</sup>をささげても  
あなたは喜ばれないでしょう

とあります。このいけにえとか燔祭<sup>ほんさい</sup>というのはユダヤの祭りでありますけれども、これはいいかえれば善行<sup>ぜんこう</sup>ということです。善<sup>よ</sup>い行いをして神様に喜ばれようとするのです。けれどもそれではほんとうに神様に喜ばれることはできません。

神の受けられるいけにえは砕けた<sup>くだ</sup>魂<sup>たましい</sup>です。  
 神よ、あなたは砕けた<sup>くだ</sup>悔<sup>く</sup>いた心を  
 かるしめられません

人間にとりまして最も尊<sup>とうと</sup>いことは砕けた<sup>くだ</sup>悔<sup>く</sup>いた心を持つことでもあります。最も美しいことは砕けた<sup>くだ</sup>悔<sup>く</sup>いた心を持つことでもあります。

この詩篇<sup>へん</sup> 51 篇はダビデ王の作といわれております。ニクソン<sup>(203)</sup>でも田中角栄<sup>(204)</sup>でも大統領や総理大臣なら悪いことをしても見逃<sup>みのが</sup>されると、権力をもつものはそう考えやすいのに、ダビデ王はそう考えないで、自分の罪を悔<sup>く</sup>い、砕けた<sup>くだ</sup>悔<sup>く</sup>いた心を持ったのであります。この砕けた<sup>くだ</sup>悔<sup>く</sup>いた心を持つということが最も神様の喜ばれることであり従って最も尊<sup>とうと</sup>いことであり、美しいことでもあります。

砕けた<sup>くだ</sup>悔<sup>く</sup>いた心を持つことができ、人間はほんとうに学問をすることができます。今日の学問の元は、ソクラテスが、人間は自分の愚かさを悟らなければ学問はできないのだということを教え、それが元になって今日の偉い文化が築き上げられたのであります。聖書は、罪を自覚してキリストの十字架の贖<sup>あがな</sup>いにすがるなければ、人間はほんとうに強くなれないんだ、ということを教えております。

砕けた<sup>くだ</sup>悔<sup>く</sup>いた心を持たなければ、人間は信仰を持つことも学問をすることもできない、人間として本当に生きることもできないのであります。砕けた<sup>くだ</sup>悔<sup>く</sup>いた心を持つということが人間にとり一番大事なことであります。砕けた<sup>くだ</sup>悔<sup>く</sup>いた心を持つことができるならば学力の足りないのも補<sup>おぎな</sup>われます。そういう心を持つ人はほんとうに学問ができますから、今学力がなくともほんとうの学問をすることができます。人間として立派な生き方をすることができ、何よりもキリストの十字架によって罪を潔<sup>きよ</sup>められてほんとうに清くなることのできる。どんな義人<sup>ぎじん</sup>といわれている人でも人格者といわれている人でも、そういう人達は皆罪<sup>みな</sup>にけがれたものでありまして、キリストの十字架によってのみ人間はほんとうに清くなることのできるのであります。

今年度はこの砕けた<sup>くだ</sup>悔<sup>く</sup>いた心を持つことができやすい、そのことがわかってもらいやすい年でありました。それは昨年<sup>(205)</sup>の4月に数名の生徒がタバコを吸ったことが明らかになったことに始まります。このことは学園にとり非常なショックでありましたが、私自身はそれほど驚きませんでした。というのは、人間というのは罪を犯しやすいものだから常に罪を犯さないように一生懸命にならなければならないということを考えております。だから、罪を犯した人が出てそんなに驚きませんでした。

それどころではなく、もしこのことによりまして、多くの人が罪の恐ろしさを知り、砕けた悔いた心を持つことができるようになるならば、この苦難も神の恩恵である、とそう思ったのであります。それですから、そのことを諸君にわかってもらうように一生懸命指導したのであります。

これはタバコを吸った人だけの問題ではありません。吸わない人もやはり同じ罪人です。そのことを悟らなければいけないのであります。タバコを吸うという失敗といえますか、そういうものはみんなが持っているのであります。吸わなかった人はただ偶然そのことをしないで済んだというだけでありまして、吸わなかった人も同じ罪人であるということを諸君に申しました。そして諸君全体が砕けた悔いた心を持つことを強く願って、砕けた心を持つように導いたのであります。この心を持つことができれば、それがほんとうの卒業であります。その心が「肉の心の板にしるされたもの」であります。

今年度はそういう意味において教育の効果がいつそうよく上がるかと、大きな期待を持っていたのでありますが悪魔の力は非常に強いのであります。どうも諸君の間に罪の意識が薄くなったのではないかと思われ、心配になることが沢山あるのであります。「なに、一度吸っただけだ」とか「ちょっと好奇心で吸ってみたのだ」とかいろんないい訳をする心が諸君の中に芽生えてきたのではないかと心配されます。また吸わない人でも自分も吸った人と同じく罪人であることを忘れて、「俺は吸わなかったから偉かったんだ」と思う心が出来たのではないかという心配になるのであります。ですから今日諸君が「肉の心の板」にちゃんと書かれた卒業証書を持って卒業できるかどうか、そのことははっきりいえないのであります。

しかし、これはたいへん大事なことであります。今、諸君にそのことがハッキリわからないならば、一生懸命わかるようになって、罪の恐ろしさを知り、自分が罪人の首であるということを悟って、そして諸君の「肉の心の板」にほんとうの卒業証書を書いていただきたい。諸君にそのことがわかったときが諸君の卒業のときであります。形の上の卒業証書は、形式的に今日渡しますけれども、ほんとうの卒業というのは諸君が砕けた悔いた心を持つことができた時であります。そう思って、どうか諸君に一日も早くほんとうの卒業証書を持っていただきたいのであります。また諸君自身が卒業証書であるという言葉の意味もそこにあるのでありますから、これは一生かかってでもわからなければならない問題であります。どうぞそのことを一生懸命考えて、そして一日も早くほんとうの卒業証書を持って欲しい。諸君自身が卒業証書になって欲しい。どうか諸君、普通ならばこんなことをいわないことが卒業式の常識であるかも知れませんが、そういう非常識なことをいわれたことを深く考えて、そして一日も早くほんとうの卒業証書を持つようになって欲しいのであります。

(「独立時報」第 70 号、1976 年 3 月 17 日)

7-3-49 31期生入学式々辞<sup>しきじ</sup>

ツアダ ツーシーレ ーエウアヤ ツアルイ←

## ראת יהוה ראשית דעת

この学園が満 30 年続いてくることが出来まして、31 年目を新しい一年生 26 名を迎えて出発できますことをほんとうに感謝<sup>いた</sup>致します。1978 年度の勉強をこれから始めるについて、私たちの心構えを一言申します。新しく出来ました校舎<sup>(206)</sup>の正面に書いてある箴言<sup>しんげん</sup>第 1 章第 7 節<sup>(207)</sup>の言葉について考えて見ます。訳は口語訳聖書と少し違<sup>ちが</sup>いまして「神を恐<sup>おそ</sup>るゝは学問の始め」としました。もとの言葉はこれでありま<sup>す</sup>。ヘブライ語は右から左へと読みます。

読み方は少し難しいのでありますが、できるだけもとの発音に近いように仮名をつけました。イルアツは恐れということでヤアウエー<sup>(208)</sup>は神の名であります。出エジプト記 3 章のモーセがイスラエルの人々をエジプトから連れ出すように神様から命ぜられた時の記事であります。あなたのお名前は何と申すのですかとモーセが聞いた時に神様は「私は在<sup>あ</sup>って在<sup>あ</sup>る者」と答えられた。もとの言葉では「エイエイ・アシエル・エイエイ」、英語に訳すと I am what I am. です。それを名にしてヤハウエというのですが、一口<sup>ひとくち</sup>にいえば「唯一の存在者」という言葉です。ヤハウエと発音したらしいのですが、モーセの十戒<sup>じっかい</sup>第三条に「あなたはあなたの神ヤハウエの名をみだりに唱<sup>とな</sup>えてはならない」<sup>(209)</sup>とありますので、必要な時も一切唱<sup>とな</sup>えてはいけないとしてしま<sup>っ</sup>て、ヤハウエと読まないでアドナイ（主<sup>しゅ</sup>という意味）と読んで居<sup>お</sup>った。ヘブライ語は子音だけ記して母音は記憶で読んでお<sup>っ</sup>たのですが、次第<sup>しだい</sup>に母音の記号をつけるようになったが、そうなってもアドナイと読んでお<sup>っ</sup>たので読み方がわからなくなった。16 世紀以来ヤハウエの子音とアドナイの母音と組み合わせてエホバと言ってきた。近頃学者が研究しまして、ヤハウエと読むのだろうということになりました。レーシーツというのは始め<sup>(210)</sup>ということ。ダアツというのは知ること、知識と訳してもいいのですが、単なる知識ではなくて、勉強して知ったところのもので学問とした方がいいので学問と書きました。ほんとの学問は神を恐れる心がなければ出来ない<sup>ので</sup>あります。

ほんとの神、ヤハウエは唯一<sup>ほんぶつ</sup>の存在者であるから、天地万物の創造主であります。完全に聖なる、義<sup>ぎ</sup>なる愛なる神でなければなりません。このような神を知ると、人間は自分が愚<sup>おろ</sup>かで、無力で、罪<sup>けが</sup>に汚れたものであることに気がつき、恐れおののきます。神を恐れるとは自分の罪に気がつき、自分の愚かさに気がつくことであります。これがなければ学問は出来ないし、立派な人間となることも出来ない<sup>ので</sup>あります。ソクラテスは真の神は知らなかったが人は己<sup>おのれ</sup>の愚かさを悟らなければ学問は出来ない<sup>とい</sup>うことを教え、ほんとの学問の基礎<sup>おのれ</sup>をつくりました。

学問は金儲<sup>かねもう</sup>けをする為のものではありません。今日<sup>こんにち</sup>の人々は学問は有名大学に入り

有名会社や官庁に入り、出世するためのものだと考えておりますが、これは大きな間違いで、学問は真理を探究し、真理を愛し真実になり、真理に従って生きようになるためであります。これが人生の目的であります。学問は人間として完成する為にするもので、それ故<sup>ゆえ</sup>学問を教えて教育をするのであります。いくら出世しても、金を儲けてもつまらないことです。人間は神のように完全にならねばなりません。なれるように神は人を作ってくださったのであるからなれるのであります。ヤハウェを恐れるは学問の始めであります。神を恐れることがないとほんとの学問は出来ない。教育も行われぬ。人間として立派に生きて行くことが出来ないのであります。

今日、日本の教育が悪くなっているということはいろいろな方面で叫ばれているからよく知られていると思っておりますが、ほんとの学問をしないで、受験勉強をしているから、学問がわからない、考える力のない、不完全な<sup>(211)</sup>人間になってしまっております。一しょに勉強する級友を殺すということが起こっている。仲良くなるべき<sup>はず</sup>であるのに競争心を煽<sup>あお</sup>る教育をするから、自分より点の良い人を憎むようになる。山形県で一番よいといわれている高校で二番の人が一番の人を殺すという事件が起こって日本中びっくりした。神を恐れる恐れがないからほんとの学問が出来ないで、受験準備の為<sup>ため</sup>といって強制するか、競争心を煽<sup>あお</sup>るかしなければ学問をさせられないのでこんなことになるのであります。

日本の偉い学者先生がたは大抵神を恐れる恐れを持っていない。信仰を持っていない。信仰を否定すれば偉い学者になったつもりでおりますが、それで大きな間違いをして、日本の学問が駄目<sup>だめ</sup>になった。大学でほんとの学問をしない、研究もしない。学問を教えて教育を行うのに学問が駄目<sup>だめ</sup>になったが故に教育も悪くなって終わっている。殺人事件を起こすような教育になってしまったのであります。社会を善くすべき教育がこんなに悪くなって、日本の国はどうなるのか、ほんとに心配であります。世界中が信仰をすてたので、今、世界中が困っております。これはどうしても、信仰を持ち、神を恐れ、ほんとの学問をし、ほんとの教育を行わなければ世界は滅亡<sup>いた</sup>致します。イルアツ・ヤアウエ・レーシート・ダアツ 神を恐るるは学問の始め、これが基督教<sup>キリスト</sup>独立学園の教育目標であります。短い言葉ですから暗記して、よく憶<sup>おぼ</sup>えて、これからの勉強の指針として欲しいのであります。

(「独立時報」第 74 号、1978 年)

## 【 註・VII章 】

- (1) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (2) 同上。
- (3) 原書の表現は、文脈上適切でないため改めた。
- (4) 原書の表現は、現在では用いられないため改めた。
- (5) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (6) 同上。
- (7) 同上。
- (8) 同上。
- (9) 同上。
- (10) 原書の表現は、文脈上適切でないため改めた。
- (11) 片田舎かたいなかの村。へんぴな地にある村。
- (12) へんぴな土地。へき地。
- (13) (1902 ~ 1981) 山形県知事(官選・1945年10月~1946年10月、公選・1947年4月~1955年2月)。その後、参議院議員。内村の弟子で東大総長となった矢内原忠雄やないはらただおの教え子。第二次大戦中、侵略戦争を批判し大学を迫られた矢内原やないはらは、朝鮮で聖書講義かんこうを敢行。その際、当時朝鮮総督府そうとくふの役人だった村山は、日本の官憲かんけんによる矢内原やないはらへの監視かんしを避けられるように、自宅を矢内原やないはらの宿として提供した。独立学園が高等学校として認可されたのは当時山形県知事であった村山むらやまの尽力じんりょくによるところが大きく、鈴木も「この人なくして独立学園はなかった」と語った。村山は、1946年5月15日に山形県会議事堂を会場として、知事主催のキリスト教講演会を開催し、そこで鈴木が「正義と力まさいけ」、政池が「科学キリストと基督教」と題して講演を行った。この講演会が行われた議事堂から道を隔ててすぐ向かいが山形警察署。そこに、つい一年三カ月前の1945年2月12日まで鈴木と渡部わたなべ弥一郎やいちろうが収監まんどうされていた。鈴木まんどうの講演は、満堂まんどうの聴衆ぼんらいから万雷の拍手を受けたという。
- (14) 現在の入学選考は、当時のものとは異なる。
- (15) そこで働く労働者の平均賃金を引き上げること。ベアと略されることもある。
- (16) 給料が少ないこと。安月給。
- (17) 1971年~1972年に起きた連合赤軍せきぐんによる一連の事件。連合赤軍は、「赤軍派せきぐん」と、「京浜安保共闘けいひんあんぼきょうとう」の合体によって結成された。群馬県の山岳地帯を中心に軍事訓練を重ねていたが、1972年2月に最高幹部の森恒夫もりつねおと永田洋子ながたひろこが逮捕された。その後、坂口弘さかぐちひろしら5名が軽井沢の「あさま山荘」に人質をとって立てこもった。10日間に及ぶ攻防戦の間、坂口らの銃撃により警官2名、民間人1名が死亡した。警察の突入によって人質は救出され、5名は逮捕された。その後、連合赤軍内部で「総括せきぐん」と称するリンチ殺人そうかつが行われていたことが判明。森と永田の決定により処刑された14名もの遺体が発見された。
- (18) 思うままに快樂を味わうこと。
- (19) 物事がある方向へ進んでいこうとする勢い。動向。なりゆき。

- (20) 第二次大戦前の小・中学校などの教科の一つ。1880年の教育令改正により小学校教科の首位におかれ、1890年の教育勅語<sup>ちよくご</sup>発布後は、教育勅語<sup>ちよくご</sup>をよりどころとして、国民道徳の実践指導を目的とした。国家主義教育を推進する中核的な教科であり、第2次大戦後に廃止された。
- (21) よいことではなく、悪であるが、組織や社会などにとって、やむを得ず必要とされる事柄<sup>ことがら</sup>。
- (22) 1947年～1954年度に、文部省の管理下で大学進学希望者に対して全国一斉<sup>いっせい</sup>に実施された検査。1947年に筆記試験の一部として実施された知能検査が、翌1948年に進学適性検査と改称された。
- (23) 1963年～1968年に、能力開発研究所が実施した大学への進学適性能力テスト。能力開発研究所は、大学・高校・文部省の関係者<sup>ほつきにん</sup>が発起人となって設立された。
- (24) 鈴木が示したTIME誌に、「Cutthroat Pre-Meds」という題の記事がある。鈴木はcutthroatを「喉切り<sup>のど</sup>」と直訳し、また「点取り虫」と意識したと思われるが、cutthroatには、「激しい、厳しい、情け容赦のない」という意味がある。pre-medは「医学部進学課程の学生」の意であるので、厳密には「医学部入学前の学生」のことと思われ、記事の冒頭には医学部入学のための競争の激しさについて記されている。記事のタイトルである「Cutthroat Pre-Meds」をていねいに訳せば、「医学部進学課程に入学するための激しい競争」とでもなるだろう。
- (25) 医術は単なる技術ではなく、人を救う道であるということ。
- (26) ここでは、金儲け<sup>かねもう</sup>の意であろう。
- (27) 衰えて弱くなること。盛んでなくなること。
- (28) 他よりもひとときわ優れていること。また、相応の能力や内容を備えていること。一人前であること。
- (29) 信教出版社が刊行する月刊誌。1952年4月創刊。
- (30) 何の節度もなく気ままにふるまうこと。わがまま。
- (31) 1922年（大正11年）4月15日刊。内村が発行していた『聖書の研究』に掲載した英文を集めた本。内村は、1922年5月5日の日記に、『『英和独語集』 Alone with God and Me が岩波書店より出た、世に如何に受けらるか<sup>いか</sup>見物<sup>がみもの</sup>である、今日の基督教界殊に英米宣教団<sup>こんにちキリスト</sup>に対し小爆弾の用は為すであらう、それ以上を望む事は出来ない。』と記している。（内村鑑三全集 34巻 p.45）この詩は、内村鑑三全集 19巻 p.434以降に収録。内村自身による和訳は次の通り。
- 独立 / 金にも<sup>きん</sup>優り、<sup>まさ</sup>名誉にも優り、<sup>まさ</sup>知識にも優り、<sup>まさ</sup>生命にも優る、<sup>あ</sup>嗚呼<sup>あなんじ</sup>汝<sup>なんじ</sup>独立よ！ / 噫王等よ、<sup>あ</sup>噫公等よ、<sup>あ</sup>噫監督等よ、<sup>あ</sup>噫博士等よ、<sup>あ</sup>汝等<sup>なんじら</sup>は<sup>ひと</sup>圧制家である。 / ひとり真理と偕に在り、ひとり良心と偕に在り、ひとり神と偕に在り、ひとりキリストと偕に在りて、我は自由である。
- (32) (新共同訳)「闇の中を歩む民は、大いなる光<sup>おお</sup>を見／死の陰<sup>かげ</sup>の地に住む者の上に、光が輝いた。／あなたは深い喜びと／大きな楽しみをお与えになり／人々は御前に喜び祝った。刈り入れの時を祝うように／戦利品を分け合って楽しむように。／彼らの負<sup>お</sup>う<sup>くびき</sup>軛、肩を打つ杖<sup>つえ</sup>、<sup>しいた</sup>虐げる者の鞭<sup>むち</sup>を／あなたはミディアン<sup>ミディアン</sup>の日のように／折ってくださった。／地を踏み鳴らした兵士の靴／血にまみれた軍服はことごとく／火に投げ込まれ、焼き尽くされた。／ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。そ

- の名は、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と唱えられる。／ダビデの王座とその王国に権威は増し／平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって／今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。」(イザヤ書 9 章 1 節～ 6 節) なお、原書で引用している文語訳聖書では 7 節までだが、新共同訳では 6 節までとなる。
- (33) イエス・キリストがこの世に生まれたこと。
- (34) (新共同訳)「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」(ヨハネによる福音書 14 章 6 節)
- (35) (1847～1929)、明治時代の政治家。岡山県議会議員を経て、衆議院議員。
- (36) 浄土真宗の本山。
- (37) いったん衰えたことを再び盛んにした人。
- (38) (1415～1499)、室町時代、浄土真宗の僧。本願寺を建立。
- (39) (1888～1973)、浄土真宗の僧侶からキリスト教の牧師となった。蓮如から 18 代の末裔。鈴木と親交のあったヴォーリズとの出会いを通して、近江兄弟社聖書学校へ入学。
- (40) 完全であろうとするの意。
- (41) 内村鑑三は、この言葉をアメリカの随筆家・詩人である Ralph Waldo Emerson (1803～1882) のものとして紹介している。(内村鑑三全集 31 巻 p.76 など) しかし、エマソンは、著書 *Society and Solitude* において "Hitch your wagon to the star." と記している。エマソンが wagon ではなく wheels と述べている箇所があるかは不明。意味は共に、「あなたの馬車を星につなげ」(直訳)、「高い理想を掲げて励め」(意識) であり、アメリカにおいてことわざのようになっている。オバマ大統領の大統領退任演説 (2017 年 1 月 10 日) にも、形を変えて引用されている。"Because I know our work has not only helped so many Americans; it has inspired so many Americans – especially so many young people out there – to believe you can make a difference; to hitch your wagon to something bigger than yourselves." 「任期中、私たちはとても多くのアメリカ人を助けた。それだけでなく、特にとても多くのアメリカの若者たちを勇気づけた。若者たちは、自分たちには世界を変える力があるということを信じられるようになり、自分自身を越えるものをつなぎ、高い理想を掲げるようになった。」(編者による意識)
- (42) 札幌農学校の初代教頭、William Smith Clark の言葉として知られている。クラーク氏が教頭の任を終えてアメリカに帰国する際、馬上から見送りの生徒に向けて発した言葉ということになっている。(内村鑑三全集 31 巻 p.74) ただし、このエピソードの真偽のほどは定かではない。
- (43) 数学や概念分析とを手段として、物理法則を探求する学問分野。⇔実験物理学。
- (44) 石造りの建物の基礎のうち、隅に据える大事な石。親石。頭石とも。文語訳聖書では「首石」、口語訳聖書では「かしら石」、新共同訳聖書では「親石」と訳されている。鈴木は「かしら石」という訳を好んで用いていたようであり、1957 年にブロックで校舎を建てた際には、「隅のかしら石 多くの愛によって」と刻んだ石を玄関部分に据えた。この石はその後の増築の際も残され続けたが、現在の校舎・講堂には用いられていない。独立学園の同窓会報の名称である「隅のかしら石」は、この石に由来する。

- (45) (新共同訳)「家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石すみ おやしとなった。これは、主しゅがなされたことで、／わたしたちの目には不思議に見える。」(マタイによる福音書 21 章 42 節)
- (46) トルコ南部の都市。パレスチナ以外で最初のキリスト教教団が組織された場所。現在は、トルコ語でアンタキヤ、あるいはアンタキアと呼ばれる。
- (47) きし。終わるところ。果て。
- (48) クラークの在任期間はわずか 8 ヶ月余りであり、クラークから直接教えを受けたのは一期生のみである。そのため、二期生である内村や新渡戸稲造にと べいなぞうなどは、クラーク氏から直接教わった経験はない。
- (49) アンティオキアの昔の呼称。
- (50) 伝聞の内容。…とのこと。…だそうで。
- (51) 岡山県東部の地名。ここで言及されている学校は、鈴木と同じ内村門下だった森本慶三けいぞう (1875 ~ 1964)が創設した「津山基督教図書館高等学校」(1950 ~ 1982)のことと思われる。(津山基督教図書館は 1926 ~ 2001。)現在同校校舎は、同じく森本が創設した「つやま自然のふしぎ館」(元・津山科学教育博物館)の展示場となっている。
- (52) 原文では、この位置に「或ひは清砂あるい せいさの上に立ち、」が入る。意図的な省略であるかは不明。なお、本引用は数箇所かしよで改行位置などが原文と異なるが、概ね原文に合わせて改めた。
- (53) イスラム教。
- (54) ザールラント (地名・Saarland) のことと思われる。ザールラントは、ドイツ西部、フランスとの国境に近い州。炭田たんでんを背景に重工業が発達した。第二次大戦後はフランスの占領地区となったが、1957年に再びドイツに帰属した。州都はザールブリュッケン。
- (55) 自衛隊の前身。1952年～1954年まで。
- (56) 心配事や不安な思い。憂鬱ゆううつな思い。悲しい思い。もの悲しさ。
- (57) 『聖書の之研究』83号 (内村鑑三全集 14 巻 p. 410 以降) に掲載。
- (58) 中国東北部と朝鮮との境に聳える火山。標高 2,744m。朝鮮では白頭山ソビと呼ぶ。
- (59) 中国の古代神話上の霊山で、最も神聖な山とされた。中国の西の地にあるとされ、黄河こうがの水源があると考えられていた。
- (60) 天山山脈てんざん。延長 2,450km にもなる、中央アジアにある多くの山脈の集まり。最高峰は標高 7,439m のポペーダ峰。
- (61) 世界最高の大山脈。長さは約 2,550km、幅は 220km、平均高度は 4,800m。最高峰は 8,850m のエヴェレスト。
- (62) 北アメリカ大陸西部の大山脈。長さは約 4,500km。最高峰はコロラド州にある 4,399m のエルバート山。
- (63) 北アメリカの大河たいが。長さ 6,210km。
- (64) アメリカ、ニューヨーク州の川。長さ 480km
- (65) ヨーロッパの中央南部の山脈。最高峰は 4,807m のモンブラン。
- (66) アフリカ大陸の北部を占める世界最大 (南極大陸と北極のぞを除く) の砂漠。大きさは東西 5,000km、南北 1,800km であるが、周辺の砂漠化がなお進行中である。

- (67) (新共同訳)「わたしたちすべてのために、その御子<sup>みこ</sup>をさえ惜<sup>お</sup>しまらず死に渡された方は、御子<sup>みこ</sup>と一緒にすべてのものをわたしたちに賜<sup>たまわ</sup>らないはずがありませんか。」(ローマの信徒への手紙 8 章 32 節)
- (68) 4 期生。
- (69) (新共同訳)「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢<sup>かしこ</sup>い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」(マタイによる福音書 7 章 24 節～ 27 節)
- (70) 穿<sup>うが</sup>つ。詮索<sup>せんさく</sup>する。普通には知られていないところを暴<sup>あば</sup>く。
- (71) (新共同訳)「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人<sup>ぬすびと</sup>が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人<sup>ぬすびと</sup>が忍び込むことも盗み出すこともない。」(マタイによる福音書 6 章 19 節～ 20 節)
- (72) 世の中の人<sup>せけん</sup>。世間の人。
- (73) 1,000 円以上のお金。この文書が書かれた 1954 年の国家公務員(六級職)の初任給は 8,700 円、2021 年の国家公務員(総合職・大卒)の初任給は 182,200 円であり、20.9 倍の差がある。そのため、国家公務員の給与を基準にして単純計算すれば、当時の 1,000 円は現在の 2 万円ほどの価値があったと考えることができる。一方で、1954 年と 2020 年では、消費者物価指数(持家の帰属家賃を除く総合)は約 6 倍になっていることから、消費者物価指数から単純計算すれば、当時の 1,000 円は現在の 6,000 円ほどの価値があったと考えることができる。また、インターネット上の「日本円消費者物価計算機」(消費者物価指数(持家の帰属家賃を除く総合)、GDP、戦前基準企業物価指数を基に算出しているとのこと)  
(<https://yaruzou.net/hprice/hprice-calc.html?amount=20&cy1=1924&cy2=2019>)によれば、当時の 1,000 円は 2019 年の 5,096 円～ 5,953 円となる。大きな差があり参考にならないかもしれないが、目安として記述した。
- (74) (新共同訳)「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人<sup>つみびと</sup>を招いて悔<sup>く</sup>い改めさせるためである。」(ルカによる福音書 5 章 31 節～ 32 節) 鈴木<sup>しものかのみず</sup>の引用には、最後の部分が省略されている。
- (75) 独立学園周辺の集落。独立学園は下叶水地区<sup>しもかのみず</sup>にあり、その周りには、上叶水<sup>かみかのみず</sup>、新股<sup>あらまた</sup>、大石沢<sup>おおいしざわ</sup>などの地区がある。文中の「ある集落」がどこかは不明。なお、原書の表現は、現在では適切でないため改めた。以後同じ。
- (76) 群衆の状態に置かれた人々が示す特殊な心的状態。無責任性・被暗示性<sup>ひあんじ</sup>・非論理性などの傾向がある。
- (77) 明るい光。逆境の中で見出す、希望や解決の兆<sup>きざ</sup>し。
- (78) (新共同訳)「あなたがたも知っているように、異邦人<sup>いほうじん</sup>の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうでは

- ない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」(マルコによる福音書 10 章 42 節～ 45 節)
- (79) Mary Mason Lyon (1797～1849)、アメリカにおける女子教育の先駆者。文中のマウント・ホリヨーク・セミナリー (Mount Holyoke Female Seminary: マウント・ホリヨーク・女子神学校) の創設者。原文および『後世への最大遺物』にはメリー・ライオンとあるが、現代の一般的な日本語表記と思われるメアリー・リヨンに改めた。Mount Holyoke Female Seminary の創立は 1837 年。1893 年に神学課程 (セミナリー・カリキュラム) を廃止し、マウント・ホリヨーク・カレッジ (Mount Holyoke College) に改名し、現在に至る。
- (80) "Go where no one else will go, do what no one else will do." が元の英語。
- (81) 王と諸侯。諸侯は、人民を支配した人、江戸時代の大名の意。
- (82) イタリア中部の都市名。
- (83) San Francesco d'Assisi (1182?～1226)、フランシスコ修道会の創立者。聖フランチェスコ。愛と清貧の生き方を徹底した。
- (84) 牛小屋から牛糞を片付けること。ここでは、牛小屋から出した糞を堆肥作りのために積み上げる作業も表す。きれいに積み上げて十分に発酵させるためには、相応の経験と技術が必要。
- (85) 榎本 様子 (1892～1992)、独立学園旧職員、100 歳まで在職。1926 年、様子の夫が列車事故の犠牲となり他界した際、様子は夫も自分もクリスチャンだと言って仏式の葬式を断り、キリスト教式で葬儀を行うこととした。この話を聞いた内村と金井為一郎牧師が葬儀の司式を行い、これが縁で、様子は内村の聖書研究会の会員となった。その後、様子が 3 人の子の家庭教師について内村に相談した際に紹介されたのが鈴木だった。戦後、様子は茨城県で開拓農業を営んでいた次男・忠雄 (1914～1980) とその妻・華子 (1922～2012) のところへ身を寄せ、共に 1950 年まで 5 年間農業に励んだが、水害で作物が全滅。そのころ鈴木が茨城の榎本家を訪れ、三人に独立学園高校の職員となることを依頼。忠雄と様子はすぐに受諾したが、迷った華子は石原兵永や政池仁に相談し、決断。榎本一家は 1951 年 6 月に着任し、独立学園構内に居住。以後、忠雄は鈴木担当の英語と鈴木ひろの担当の数学以外のさまざまな教科を教えたほか、教頭の任や学園のあらゆる仕事を担った。様子は書道、華子は音楽などを教えた。鈴木は様子と表記しているが、梅子、うめ子、榎、宇免などと表記することもある。
- (86) (1394～1481)、室町時代中期の臨済宗の僧。
- (87) 正月になり門松を立てるということは、死への旅の区切りをまた一つ通り過ぎるということ。だから、おめでたいはずの正月も、単純に喜ぶことはできない。
- (88) 詞: Sanford F. Bennett (1836～1898)、曲: Joseph P. Webster (1819～1875)。詞も曲も 1868 年作。独立学園で長年使用している英語讃美歌では 228 番。本文中の 488 番は、1954 年版の讃美歌 (日本キリスト教団出版局) における番号。
- (89) マタイによる福音書 5 章 4 節。
- (90) 物事の内部にひそむ弊害。

- (91) 5期生。
- (92) (新共同訳)「金にまさり、多くの純金にまさって望ましく／蜜よりも、蜂の巣の滴りよりも甘い。」(詩編 19 編 11 節)
- (93) 現在のトルコ西海岸の都市。エペソ、エフェソスとも。
- (94) 現在のトルコにある、古代の港湾都市。エフェソスの南に位置する。
- (95) 8期生。
- (96) 担当教科は生物。旧屋代村(現高畠町)の公民館長を務めた。
- (97) 独立学園旧理事、旧職員。本書再版の際にはあとがきを執筆。化学をはじめ、多くの教科を担当した。後に、鈴木の花と結婚。
- (98) 国立・都道府県立・市町村立の、いわゆる公立学校。
- (99) 現在の小国町の北部。
- (100) 中国共産党の略。ここでは、中国のことと思われる。
- (101) 6期生。
- (102) 旧約聖書「コヘレトの言葉」1章 2節の引用。文語訳では、「空の空 空の空なる哉 都て空なり」。新共同訳では、「なんという空しさ／なんという空しさ、すべては空しい」。なお、「コヘレトの言葉」は、以前は「伝道(者)の書」と呼ばれていた。
- (103) 物資の乏しい状態に耐える生活。
- (104) 墓石に刻んだ文章。この短文は、アマーフト大学在学中の内村が、自身の聖書の見返し(表紙と本文の間)に書いたとされる。
- (105) 基督教独立学園高等学校創立式が行われたのは1948年5月26日であるが、このころ創立記念式の日付は年によって異なっていた。たとえば、独立学園史上初めての創立記念式は創立5周年を記念したものであるが、1953年7月29日に開かれている。5月26日の実施が基本となるのは、1958年の創立10周年以降のことである。
- (106) 新校舎(当時)建設の着工にあたり、1956年9月29日に行われた。建材である石の切り出しや運搬作業などは、生徒と職員が協力して行った。
- (107) (新共同訳)「主御自身が建ててくださるのでなければ／家を建てる人の労苦はむなしい。主御自身が守ってくださるのでなければ／町を守る人が目覚めているのもむなしい。／朝早く起き、夜おそく休み／焦慮してパンを食べる人よ／それは、むなしいことではないか／主は愛する者に眠りをお与えになるのだから。」(詩編 127 編 1 節～2 節)
- (108) 物事が進み、はかどること。
- (109) 朝日。さわやかで新鮮、勢いがよいことのとえ。
- (110) 1956年10月27日。現職の東大総長だった矢内原忠雄が、山形市で独立学園新校舎建築記念講演を行った。
- (111) 公のものを自分のもののように勝手に使うこと。
- (112) 好ましくない、気がかりな傾向。
- (113) ここでは、大部分の皆様がたの意。
- (114) 旧民法で、法律上の婚姻関係にない男女の間に生まれ、父親が認知していない子のこと。現

- 行の民法ではこの語を避け、「<sup>ちやくしゆつ</sup>嫡出でない子」としている。<sup>ひちやくしゆつし</sup>非嫡出子とも。
- (115) 1957年11月22日、ブロック建ての新校舎（当時）献堂式にて。
- (116) 当時在校中の生徒の父である西川勇平のこと。西川は聖書雑誌「<sup>おんけい</sup>恩恵」の主筆。誌面で独立学園の<sup>きゆうじょう</sup>窮状を訴え、校舎建築に必要な石の採石費用として、一口300円の「<sup>ひとくち</sup>一石献金」を始めた。その結果、校舎が完成した1957年末までに95,700円の献金があった。1957年の国家公務員（六級職）の初任給は9,200円、2021年の国家公務員（総合職・大卒）の初任給は182,200円であり、19.8倍の差がある。そのため、国家公務員の給与を基準にして単純計算すれば、当時の95,700円は現在の190万円ほどの価値があったと考えることができる。一方で、1957年と2020年では、消費者物価指数（持家の帰属家賃を除く総合）は約5.8倍になっていることから、消費者物価指数から単純計算すれば、当時の95,700円は現在の56万円ほどの価値があったと考えることができる。また、<sup>ぜんしゆつ</sup>前出の「日本円消費者物価計算機によれば、当時の95,700円は2019年の444,091円～556,701円となる。大きな差があり参考にならないかもしれないが、目安として記述した。
- (117) 独立前の<sup>ほんまとしお</sup>本間利雄氏が勤務していた建築事務所。
- (118) この時は地下室と1階のみだったが、以後少しずつ増築していった。なお、新校舎2階の完成献堂式は1959年10月2日。
- (119) 8期生。
- (120) <sup>ますもとただお</sup>榎本忠雄(1914～1980)、独立学園二代教頭。鈴木が東京帝大物理学教室助手となった1928年5月ごろから、鈴木は<sup>ますもと</sup>榎本家の家庭教師をしていた。1938年3月に慶應義塾大学法学部を卒業し、同年4月に三菱石油に入社したがすぐに招集され、中国戦線に配属された。1943年7月に負傷し除隊となり、同年12月22日に<sup>あしや</sup>芦屋華子と結婚。1944年3月に再度招集されたが、<sup>ごてんば</sup>鎌倉や御殿場の部隊で中隊長を務めた。終戦後、1946年3月から茨城県に移住し、開拓農業を行った。1951年6月、鈴木に<sup>こ</sup>請われて一家で独立学園に着任し、召天した1980年度まで教頭を務めた。本書8-1-7、10-2-8、榎本模子の註も参照されたい。
- (121) マタイによる福音書10章29節。
- (122) 役員の皆さん。
- (123) イスラエル初代の王であるサウルを見出す（サムエル記上9章）などした、旧約聖書の重要登場人物。聖書中、「<sup>よげんしや</sup>預言者」（同3章20節）、「神の人」（同9章7節）、「先見者」（同9節）と呼ばれている。
- (124) （新共同訳）「<sup>しゆ</sup>今まで、主は我々を助けてくださった」（サムエル記上7章12節）
- (125) 一般に、役所。ここでは、公務員となること。
- (126) 日本では慣習的に家を継ぐのは長男であるので、農家でも長男が<sup>かおく</sup>家屋や農地を相続し、農家となり、家を継いだ。そのため、二男・三男などは、<sup>かおく</sup>家屋も土地もない状態で家を出て行かなければならず、経済的に苦しい状況に置かれることが多かった。
- (127) 1958年度の修学旅行は、2年生が7月21日～8月9日、3年生が7月26日～8月15日まで。2年生の最後、3年生の最初に2学年が合流し、北海道の<sup>ちやない</sup>茶内（釧路と根室の間あたり）で1週間の酪農実習を行った。

- (128) 内村鑑三著『後世への最大遺物』からの引用。
- (129) 原文ではドイツ語的に「カイゼル」と表記されているが、「カエサル」と改めた。
- (130) 原文は「クレニオ」だが、現代の聖書の表記にあわせた。以後同様。
- (131) 新約聖書における総督はローマ皇帝の代理者の称号で、ローマ帝国が支配した地方の行政を司<sup>つかさど</sup>る者のこと。
- (132) ルカによる福音書 2 章。
- (133) 9 期生。
- (134) (新共同訳)「【都に上る歌。】目を上げて、わたしは山々<sup>あお</sup>を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。／わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。／どうか、主があなたを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるように。／見よ、イスラエルを見守る方は／まどろむことなく、眠ることもない。／主はあなたを見守る方／あなた<sup>おお</sup>を覆<sup>かけ</sup>う陰、あなたの右にいます方。／昼、太陽はあなたを撃つことがなく／夜、月もあなたを撃つことがない。／主がすべての災<sup>わざわ</sup>いを遠ざけて／あなたを見守り／あなたの魂を見守ってくださるように。／あなた<sup>い</sup>の出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに。」  
(詩編 121 編 1 節～ 8 節)
- (135) 現在の名はイズミル。トルコの西端<sup>せいたん</sup>で、エーゲ海に面する古代都市。
- (136) (110 ころ～ 156 ころ)、スミルナの司教。イエスの 12 弟子の一人である使徒ヨハネから教えを受けたと言われ、ローマ総督により火刑に処されたとされる。
- (137) Adolf Hitler (1889～1945)、ドイツの政治家、ナチ党党首、独裁者。第二次大戦を引き起こした。
- (138) 東条英機<sup>とうじょうひでき</sup>。
- (139) ロシア帝国。18 世紀初めから 1917 年のロシア革命までのロシア。したがって、1904 年～ 1905 年の日露戦争時の露<sup>ろ</sup>はロシア帝国を意味する。
- (140) あるところに片寄<sup>かたよ</sup>って存在すること。
- (141) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (142) 差別用語とされてはいないようだが、使用に注意が必要な語とされることもある。ここではこの註<sup>おぎな</sup>を補うことで、原文のまま表記した。
- (143) 1959 年 10 月 2 日。1957 年に建てたブロック建て校舎の上に 2 階を増築した。
- (144) (新共同訳)「【都に上る歌。ソロモンの詩。】主御<sup>しゅご</sup>自身が建ててくださるのでなければ／家を建てる人の労苦はむなしい。主御<sup>しゅご</sup>自身が守ってくださるのでなければ／町を守る人が目覚めているのもむなしい。／朝早く起き、夜おそく休み／焦<sup>しょうりょ</sup>慮してパンを食べる人よ／それは、むなしいことではないか／主<sup>しゅ</sup>は愛する者に眠りをお与えになるのだから。」(詩編 127 編 1 節～ 2 節)
- (145) 黒沼栄一<sup>くろぬまえいいち</sup>。独立学園旧講師、山形大学教授。基督教独立学園維持会の発起人。山形大学聖書研究会<sup>ほんじょうかい</sup>・磐上会を引率して独立学園に度々来校した。
- (146) 独立学園卒業生。菊竹種次<sup>たねじ</sup>の子。6-12 の註も参照のこと。
- (147) 10 期生。10 期生の卒業により、卒業生が 100 名を超えた。
- (148) 本書の別の箇所ではヤハウエ、ヤアウエと記されているが、ここでは文語訳聖書をそのまま

引用したためこの表記となったと思われる。この文章中の以後同じ。

- (149) (新共同訳)「【賛歌。ダビデの詩。】主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。／主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに 伴ひ／魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。／死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける。／わたしを苦しめる者を前にしても／あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ／わたしの杯を溢れさせてくださる。／命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう。」(詩編 23 編 1 節～ 6 節)
- (150) 原書の表記は「平隠」であるが、おそらく誤植であるので改めた。
- (151) 1960 年 1 月 27 日の旧校舎の火災のこと。夕方 5 時頃出火。ピアノだけ運び出すことができたが、1 時間足らずで全焼した。
- (152) 1960 年 9 月 23 日。
- (153) 11 期生卒業式。
- (154) オリオン座。英語の Orion は「オライオン」と発音する。
- (155) すばる。牡牛座にあるプレアデス星団のこと。原文の「プライアデス」は、英語の Pleiades の発音に近い。
- (156) 内村鑑三著、畔上賢造編の書籍。1926 年 10 月 20 日初版発行。
- (157) ゲティスバーグは、アメリカ合衆国北東部、ペンシルヴァニア州南部の地名で、南北戦争中の 1863 年に北軍が南軍を破った地。同年、リンカーンがこの地で行った「ゲティスバーグの演説」(Gettysburg Address) は、「人民の人民による人民のための政治」というフレーズで特に有名。鈴木はこの演説の Hay Copy と呼ばれる版を引用したと思われる。原文は、"the unfinished work which they have, thus far, so nobly carried on".
- (158) 暦に関する法則。天保暦 (1844 年)、グレゴリウス歴 (1873 年) など。
- (159) 旧約聖書のエステル記 3 章 7 節に、「クセルクセス王の治世の第十二年の第一の月、すなわちニサンの月」との記述がある。
- (160) Gaius Julius Caesar (前 100 頃～前 44)、古代ローマの天才将軍、政治家。各地の内乱を平定し、ポンペイウスら反対者にも勝利し、ローマで独裁者の地位に就いたが、元老院議事堂で暗殺された。著書・ガリア戦記などは、ラテン文学の傑作と言われる。カエサルの名は、ローマ皇帝の称号となった。英語読みではジュリアス・シーザー。
- (161) 惑星または彗星などの天体が、その軌道上で太陽に最も近づくとこころ。ここでは、地球が太陽に最接近する位置のこと。
- (162) 太陽などの引力の影響で、春分点が毎年移動する現象。
- (163) 太陽は黄道上を、西から東へ 1 年に 1 周する。黄道は、地球の赤道を延長した大円である天の赤道と 1 年で 2 度交差する。この 2 度の交差点のうち、太陽が赤道を南から北へ横切る点が春分点。
- (164) 13 期生卒業式。

- (165) Archimēdēs(前 287 頃～前 212)、古代ギリシアの数学者・物理学者。てこの原理やアルキメデスの原理などを発見。
- (166) ギリシア語の eureka。日本語では他に、ユリイカなどの表記もある。
- (167) 現在では属州と表記されることが多いと思われる。
- (168) もろもろの神。神々。
- (169) 人が持って生まれた性質や才能を、円満完全になるよう鍛え育て上げ、発達させること。
- (170) 『聖書の研究』第 158 号(内村鑑三全集 20 巻 p.77) に収録。以下、全文。  
 汝<sup>なんじ</sup>の財産を神に献<sup>ささ</sup>げよ、然<sup>さ</sup>らば神は己<sup>おの</sup>が有<sup>もの</sup>として之<sup>これ</sup>を守り、如何<sup>い</sup>に紊<sup>びらん</sup>乱<sup>らん</sup>せるものなり  
 と雖<sup>いえど</sup>も能<sup>よ</sup>く之<sup>これ</sup>を整理し、再<sup>こ</sup>び之<sup>れ</sup>を汝<sup>なんじ</sup>に委<sup>ゆ</sup>ねて己<sup>おの</sup>が(神の)ものとして之<sup>これ</sup>を使用<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>う  
 べし。  
 汝<sup>なんじ</sup>の身体を神に献<sup>ささ</sup>げよ、然<sup>さ</sup>らば神は己<sup>おの</sup>がものとして之<sup>これ</sup>を養<sup>い</sup>ひ、疾<sup>や</sup>ま<sup>い</sup>ひの重<sup>か</sup>か<sup>わ</sup>に拘<sup>よ</sup>はらず能<sup>よ</sup>  
 く之<sup>これ</sup>を癒<sup>い</sup>し、再<sup>こ</sup>び之<sup>れ</sup>を汝<sup>なんじ</sup>に与<sup>え</sup>へて己<sup>おの</sup>が(神の)ものとして之<sup>これ</sup>を使用<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>う  
 べし。  
 汝<sup>なんじ</sup>の靈魂を神に献<sup>ささ</sup>げよ、然<sup>さ</sup>らば神は己<sup>おの</sup>がものとして之<sup>これ</sup>を聖<sup>きよ</sup>め、汝<sup>なんじ</sup>の罪<sup>ひ</sup>は緋<sup>ごと</sup>の如<sup>ごと</sup>く  
 なるも雪<sup>ごと</sup>の如<sup>ごと</sup>く白<sup>か</sup>くなし、再<sup>こ</sup>び之<sup>れ</sup>を汝<sup>なんじ</sup>に還<sup>か</sup>えして己<sup>おの</sup>が(神の)ものとして之<sup>これ</sup>を使用<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>う  
 べし。  
 神<sup>さ</sup>に献<sup>さ</sup>げよ、神<sup>もの</sup>の有<sup>も</sup>とせよ、神<sup>そのち</sup>をして自由<sup>から</sup>に其<sup>ほ</sup>能力<sup>ど</sup>を施<sup>さ</sup>しめよ、然<sup>さ</sup>らば困<sup>ま</sup>難<sup>ぬ</sup>として免<sup>ま</sup>  
 がれざるはなし、疾<sup>や</sup>ま<sup>い</sup>ひとして癒<sup>い</sup>されざるはなし、罪<sup>きよ</sup>として潔<sup>きよ</sup>められざるはなし。  
 乱<sup>そのま</sup>れし其<sup>ま</sup>儘<sup>ま</sup>、病<sup>け</sup>みし其<sup>そのま</sup>儘<sup>ま</sup>、汚<sup>こ</sup>れし其<sup>ま</sup>儘<sup>ま</sup>、今<sup>こ</sup>之<sup>れ</sup>を神<sup>さ</sup>に献<sup>さ</sup>げよ、而<sup>しか</sup>して神<sup>そのた</sup>をして其<sup>の</sup>大<sup>たい</sup>能<sup>のう</sup>  
 を以<sup>も</sup>つて汝<sup>なんじ</sup>に代<sup>ち</sup>りて整理<sup>ち</sup>、治<sup>ち</sup>癒<sup>ゆ</sup>、救<sup>ち</sup>済<sup>ゆ</sup>の任<sup>ち</sup>に当<sup>ち</sup>らしめよ。
- (171) 18 期生。
- (172) (新共同訳)「涸れた谷に鹿が水を求めるように／神よ、わたしの魂はあなたを求める。」  
 (詩編 42 編 2 節)
- (173) 1954 年版の讃美歌。特に、1 番から 3 番までの繰り返し部分の歌詞、「みたまよ、みたまよ、  
 わがたまぞあこがる。縫<sup>すが</sup>りまつる手をばとりて主にみちびきたまえかし」を意識した選曲と思  
 われる。
- (174) 身近でわかりやすいこと。高<sup>こう</sup>尚<sup>しょう</sup>でなく、通俗<sup>たうつう</sup>的でなじみ深いこと。
- (175) 極めて厳しいこと。
- (176) 原文の表記は「残酷」だが、現代においてより一般的であると思われる「殘酷<sup>ざんこく</sup>」に改めた。
- (177) 家畜を殺すための場所。
- (178) Mao Zedong (1893～1976)、中国の政治家・思想家。1921 年、中国共産党創立に参加。日  
 中戦争では抗日戦を指導した。戦後、蔣<sup>しょう</sup>介<sup>かい</sup>石<sup>せき</sup>を打<sup>だ</sup>倒<sup>とう</sup>し、1949 年、中華人民共和国を建国し、国  
 家主席となった。1966 年には極<sup>き</sup>左<sup>よく</sup>的<sup>さ</sup>弊<sup>てい</sup>害<sup>がい</sup>を生<sup>せい</sup>んだ「文化大革命」を起<sup>き</sup>こしたが、毛<sup>もう</sup>沢<sup>たく</sup>東<sup>とう</sup>の死  
 後その指導<sup>あ</sup>の誤<sup>あ</sup>りを指<sup>あ</sup>摘<sup>あ</sup>され、文化大革命は 1977 年に終了が宣言された。鈴木はこの文章は文  
 化大革命の初期に書かれたもの。
- (179) 原書では 1966 年とあるが、誤植のため訂正した。
- (180) 学生運動で武器として用いられた棒。ゲバはドイツ語のゲバルト (Gewalt) の略で、国家  
 権力に対する実力闘争の意。
- (181) 警察機動隊。

- (182) 憂き身をやつすとは、身の瘦せるほどに物事に熱中すること。また、無益なことや本業でないことに熱中すること。憂き身は浮身とも書く。
- (183) 元はヘブライ語で「油を注がれた者」の意。古代ユダヤ人が待ち望んだ救い主。鈴木は「メシヤ」としているが、現代の聖書の表記にあわせた。以後同様。
- (184) キリニウスは三度総督となっている。一度目はシリア総督で、期間は紀元前 6 年～紀元前 4 年。二度目はアジア総督で、期間は紀元前 3 年～紀元前 2 年。三度目は再びシリア総督で、期間は紀元 6 年～紀元 9 年。複雑でわかりづらいが、以後の鈴木の本主張は以下のように整理できるだろう。ただし、人口調査の時期については諸説あり、鈴木の本主張が正しいとは限らない。①ルカは総督という語を、総督の種類によって使い分けている。②ルカが用いた語とヨセフスの記述を基に考察すれば、ルカによる福音書に記されている人口調査はキリニウスが一度目のシリア総督だった期間中に行われたものである。③しかし、ルカの言葉遣いの区別を無視する学者は、キリニウスが二度目のシリア総督の時期（総督としては三度目）に人口調査が行われたと考え、ルカの記述が間違えていると主張する。④しかし、間違っているのはルカではなく、学者のほうである。⑤このように、学者の学問が駄目になってしまっている。
- (185) Josephus Flavius（37 頃～100 頃）、ユダヤ人の祭司、歴史家。ユダヤ名は Joseph Ben Matthias。16 歳から 3 年間荒野で修行したのち、エルサレムに帰った。その後、使節としてローマへ行ったが、ユダヤ戦争（66～70）前夜に帰国。しかし、戦いに敗れ捕虜となった。解放後はローマ皇帝に仕え、70 年のエルサレム陥落後はローマに滞在し、ギリシア語で「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」などを執筆した。
- (186) 現在では、前 6 年ごろ～前 4 年頃の誕生とされることが多く、とりわけ前 4 年頃とされることが多いようである。
- (187) 西暦 525 年。
- (188) Dionysius Exiguus（470 頃～550 頃）、ローマの司祭。神学、数学、天文学に優れ、多くの重要な教会法の集成に貢献したほか、多数のギリシア語文献を翻訳したといわれる。初めて西暦紀元を算定したが、この計算は 4～7 年の誤差があると考えられている。ディオニシウス・エクシグウスとも表記。鈴木はデオニシウス・エクシグウスと表記。
- (189) ミトラ（ミトラス）教（など）の、太陽神の新生を祝う冬至の祭りが起源と言われる。
- (190) 新潟県南西部、長野県境にある山。標高 2,454m。
- (191) 旧製の工業専門学校略称。ここでは、都立工業専門学校（1940 年の設立時は府立）のことと思われる。
- (192) みずから山野や荒地を切り開いて作った農地でおこなう農業。
- (193) 米の値段。
- (194) 元はフランス語で、面積の単位。1 アールは 100 m<sup>2</sup>。
- (195) 晴れた日には外で畑を耕し、雨の日には家で読書をする暮らし。鈴木の本文脈とは異なるが、悠々自適な生活という意味で用いられる。
- (196) 家族の一員が一定期間家を離れ、ほかの場所で働くこと。ここでは、冬期などの農閑期に農家の父親などが都会へ移り住み、そこで働いて賃金を得ること。

- (197) 原文は「見せびらかさせて」。
- (198) 26 期生の卒業式。当時建設途中だった新講堂・体操場<sup>じょう</sup>（現在の講堂の前の講堂）にて行われた。
- (199) 3 章 1 節～ 2 節。
- (200) (新共同訳)「あなたがたは、キリストがわたしたちを<sup>もち</sup>用いてお書きになった手紙として<sup>おおやけ</sup>公にされています。墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に、書きつけられた手紙です。」(コリントの信徒への手紙二 3 章 3 節)
- (201) (新共同訳)「主はシナイ山でモーセと語り<sup>おきて</sup>終えられたとき、二枚の<sup>おきて</sup>掟の板、すなわち、神の指で記された石の板をモーセにお<sup>さず</sup>授けになった。」(出エジプト記 31 章 18 節)
- (202) (新共同訳)「もしいけにえがあなたに喜ばれ／焼き尽くす<sup>ささ</sup>献げ物が御旨にかなうのなら／わたしはそれをささげます。／しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた<sup>みむね</sup>霊。打ち砕かれ<sup>く</sup>悔いる心を／神よ、あなたは<sup>あなた</sup>侮られませんか。」(詩編 51 編 18 節～ 19 節)
- (203) Richard Milhous Nixon (1913～1994)、アメリカの第 37 代大統領 (1969～1974)。共和党出身。1972 年の大統領選挙の際、共和党関係者が、ワシントンの「ウォーターゲート・ビル」にある民主党本部へ侵入し盗聴を試みたが、警備員に発見され、逮捕された。その後、大統領の側近のこの事件への関与が明らかになったばかりか、大統領本人の<sup>らんよう</sup>権力濫用なども発覚し、重大な政治問題へと発展した。最終的に、アメリカ史上初めて、現職大統領が<sup>いた</sup>辞任するに至った。
- (204) (1918～1993)、昭和後期を代表する政治家、元総理大臣 (1972～1974)。首相在任時に、日中国交正常化を実現した。新潟の農村に生まれ、貧しい幼少期を過ごし、高等小学校しか卒業していない(後に現在は専門学校となった学校で土木を学んだ)という非エリートの経歴から、<sup>かくえい</sup>角栄ブームが巻き起こり、<sup>いまたいこう</sup>今太閤(現代版豊臣秀吉の意)とも言われた。しかし、田中が進めた日本列島改造論の失敗や第一次オイルショックなどにより物価が<sup>きゅうどう</sup>急騰。また、1974 年 10 月、田中が自らの地位を利用して不当に資産形成をしていたことが週刊誌に暴露され、田中人気は急落。同年 11 月に首相を辞任した。さらには、1976 年 2 月、戦後最大の汚職事件と言われるロッキード事件が発覚。田中に関するロッキード事件とは、1972 年 8 月の田中・ニクソン会談において、当時総理大臣だった田中<sup>かくえい</sup>角栄が、アメリカのロッキード社の大型旅客機と軍用機の導入を約束し、その見返りとして 5 億円を不当に得たというもの。田中は 1976 年 7 月 27 日に逮捕され、8 月 16 日に起訴された。一審は<sup>ちようえき</sup>懲役 4 年、<sup>ついちようきん</sup>追徴金 5 億円の有罪判決、二審は一審を支持し<sup>こうそ</sup>控訴棄却、最高裁での上告審の最中に田中が死去したため、<sup>こうそ</sup>公訴棄却(裁判の打ち切り)となった。しかし、別人に対するロッキード事件上告審の中で、最高裁判所は田中が 5 億円を受けとったことを認定した。田中は、ロッキード事件係争中も自民党の最大派閥<sup>はぼつ</sup>を率い、政界に大きな影響を保ち続けたため、<sup>やみ</sup>闇将軍とも呼ばれた。
- (205) 1975 年 4 月 12 日、28 期生の入学式の二日後、朝礼で喫煙の告白があった。この日以来、全校生徒が集まる場(当時は大教室、現在では講堂)の正面に、内村鑑三の書「畏神不恐人」(神を畏れて人を恐れず)<sup>かか</sup>が掲げられるようになった。
- (206) 当時の講堂の東側の壁面に書かれていた。現在の講堂においては、同じく東側の壁面に刻まれている。現在の表記は、「神を<sup>おそ</sup>畏るるは学問の始め」。

(207) (新共同訳)「主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも諭しをも侮る。」(箴言 1 章 7 節)本文中で口語訳について言及しているため、口語訳と、最新の訳である聖書協会共同訳も記載しておく。(口語訳)「主を恐れることは知識のはじめである、／愚かな者は知恵と教訓を軽んじる。」、(聖書協会共同訳)「主を畏れることは知識の初め。／無知な者は知恵も諭しも侮る。」

(208) ここではヤハウエと改めず、ヘブライ語のフリガナに合わせて原書の通りの表記とした。

(209) (新共同訳)「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかない。」(出エジプト記 20 章 7 節)

(210) 原文ママ。現代の表記としては「初め」のほうが一般的であると思われる。

(211) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。